

確かなモノ・・・

～ 今までそれはずっと不確かなモノだったから
 僕はずっと不確かなモノだと思っていたよ
 けれど君と出会って僕は　それが確かなモノに変わ
った気がするんだ～

著者　　斉藤和彦

僕たちずっとこのままでいようね。

うん。

ねえ、ずっとだよ……。

うん。

この事を思い出すと今でも潤一の心は苦しくなった。

その日、岸崎潤一（きしざきじゅんいち）は疲れていた。正確に言う
と疲れきっていた。

もう世間では暮れに入り始めていて、何処の会社も実りある年越し
をしたいのだろう。越冬闘争目標何百万と言うスローガンを掲げ、今
年最後の追い込みを掛けていた。そしてその意気込みは12月に決算
を控えていた潤一の会社も同じ事だった。

潤一の会社は大手の輸入会社で、中でも潤一の所属する横浜営
業所の営業第一課では、主にヨーロッパ製の高級家具等をレストラン
や宝石店、そしてデパートや高級ホテルなどに、店のコーディネート
も兼ねて取引していた。

潤一が就職した頃は、割と何千万円もする家具等を購入する店もそ
れなりあったのだけれど、このところ続く不景気や円安ドル高と言う
不況の波に、その勢いは完全に飲まれていた。

今朝の朝礼でも営業部の佐々木部長が「ここ最近の我が社の売り上
げは、非常に厳しいものだ。勿論それは不景気のせいもあるのかもしれ
ない。がしかし厳しいのは何処も同じ事、そしてその中でも確実に
業績を挙げている会社もあると言うことは、即ち何かしらの方法でこ
の不況を乗り切っていると言う事である。えー今朝の新聞に今日の一
言と言う欄があったのですが、そこにこんな事が書いてありました。
艱難汝を玉にすと。即ち人は大きな試練に打ち勝ってこそ、成功する
事が出来ると言うことである。そして今我々はまさにその試練にぶつ
かっているのではないだろうか。だからこそ今ここで我々はこの試練
を、力を合わせて乗り越えて成功を納めようではないか。」と力説を
述べていた。けれどそれは明らかに部長と言う肩書きが言ったセリフ
であり、佐々木敏夫、個人のセリフでは無かった。

きっと何かを握らせているのだろう。でなければこんな何の具体的
策も脈略も無い力弁を、一体誰がするだろう。きっと何処かの誰かに
何かいいモノを握らされているに違いない。けれどその事で誰一人と
して反発や否定する部下は居ない。何故なら部下達だって少なからず
何かを握らされているのだし、それにいつだってもっといいモノも握
らされたいと、思っているのだから。

だから結局潤一らは疑問すら感じながらも必勝の鉢巻きを頭に巻き、

越冬闘争目標何千、何百万と言うノルマを達成しようとしてしまう。少なくとも企業と言うものはそうであり、今までの潤一もそうだった。

けれど幾らノルマを達成しようとも、実際そこには終わりや安らぎなんて気の利いた場所なんてモノは一つも無かった。その事は潤一自信が一番分かっていた。

潤一は会社の中の成績は割と良かった。今までだって幾度となくその企業が掲げたノルマを達成もしたし、それなりの結果も出してきた。けれど結局の所、それをクリアすればしたなりにまた違ったノルマがそこには用意されていて、その時までと違ったモノをただ握らせるだけの事だった。勿論それによって潤一の生活はそれなりにいいものでもあった。

車はマツダのRX-7に乗っていたし、マンションも横浜にある山手の高台に建っていて、少し広めのバルコニーからはベイブリッジの夜景が見渡す事も出来た。

着る服だってアルマーニを初め、カルバンクライン、ダンヒル、等々と、学生の頃じゃ考えられない位いい服を着たし、女にも不自由したことも無かった。会社の中でもいろんな意味でやり手だった潤一は、誰が決めたかは定かでは無いが、社内の女子社員No1、No2と言われていた大原彩子（おおはらあやこ）、中村香織（なかむらかおり）ともいい付き合いをしていた。

二人ともNo1、No2と言われるだけあって顔は勿論、プロポーション、仕草、服の着こなし方のどれをとっても、非の打ち所無い女性だった。けれどそんな二人はプライドの高さから来るのだろう。何処と無く人を軽蔑するような冷たい目を持っていて、その化粧の下に隠された本当の素顔は誰一人知っている者は無かった。

それは社内で唯一その化粧を落とした顔を見たことがあった潤一でさえ、分かるはずもない。何故なら潤一本人だって他から見れば、彩子と香織と同じ冷めた淋しい目をした人間だったのだから。そして潤一は今、そんな仕事や人間関係に疲れていた。けれど本当に疲れていたのは、そんなスカした自分自身にだったのかもしれない。

潤一は誰も居ない暗いオフィスの自分の机の上でラップトップ型のコンピューターのキーを叩いていた指を止めて、大きな溜息を突いた。

時計はもう八時四十五分に成っていた。そしてその時間はそろそろ仕事を切り上げなければいけない時間だった。

潤一の勤めているオフィスのビルは今年の4月から夜間警備の為に9時までには部屋を出なければならぬ事になっていた。けれどそれは建て前上のものであって実際の所は、残業代をカットする事がその本当の理由だった。そしてもし必要に応じてそれ以降にも仕事をする

場合は、あらかじめ警備会社の方に申請書を出さなければいけない事になっていた。だからどうしてもやらなければ成らない仕事は申請書を出すしか無かった。勿論潤一はそんな申請書を出しても居なければ、出し方も知らなかった。過去に何度も仕事の関係で九時以降も仕事をした事があったし、月末も二十日を過ぎると大概十二時近くまで仕事をしなくては成らなかったが、その時は内勤の女子社員に頼んで出してもらっていたので、その出すプロセスと言う物をやはり潤一は知らなかった。

「もう八時四十五分か・・・」

潤一は声に出して言ってみた。けれどそれはこの後に何の予定も入っていない潤一にとって、何の意味も持たない言葉だった。

仕事を切り上げる事は簡単だった。それは確かにまだまだやりかけの仕事はあった。けれどそれは幾らやったとしても同じ事で、やればやるほど増えていく物なのだ。だからそれを役所みたいに時間が来たから、はい今日の仕事はここまでと言う風に片付ける事は簡単だった。けれどこの終わる事の無い握らせ合いに少し疲れを感じていた潤一にとっては、このまま誰も居ない広すぎる部屋に帰るのは、その嫌な仕事を切り上げる事より辛いことだった。

何だかこのまま一人で家に帰ったら、自分自身が壊れてでもしてしまいそうなそんな気持ちだった。

とにかく誰かに会いたい。誰だっていい。口と目と鼻が付いていれば。そして会って話をしながら美味しいご飯と、美味しいお酒を飲みたい。いや最悪ご飯なんて無くてもいい。美味しいお酒だって要らない。とにかく誰かに会って、そして話をしたい。面白い話なんかじゃなくてもいい。誰もが何それと鼻で笑う様な話しでも構わない。とにかく話がしたかった。ただそれだけで良かった。潤一は鞆の中から手帳を取り出し、アドレス帳を見た。勿論このどうしようもない心の渴きを癒す為に。

潤一のアドレス帳は一目で几帳面と分かる丁寧な字で、その殆どが埋め尽くされていた。

お・・・お・・・お・及川・・・大木・・・太田・・・大原・大原彩子。
まず潤一が目にしたのは大原彩子だった。

きっと彩子だったら、しょうが無いわねえとでも言いながら、関内辺りまで出て来てくれるだろう。そして勿論朝まで潤一のベッドの中で付き合ってくれるはずだった。

潤一は手帳を見ながら電話のプッシュダイヤルを押した。

2・5・3・・・9・8・・・

潤一と彩子の出会いは会社の中でも同期入社と言うこともあって、

割と早い時期に知り合った。

潤一も彩子もそうだった様に、会社に入りたては何かとくだらない行事が多かった。それは新入社員歓迎会から始まり、泊まり込み研修会、同期会、そして極めつけは同期社内旅行までであった。

勿論目的は明るい将来を夢見ている若者達が、これからみんなで力を合わせて頑張っていくと、仲間意識を強める為のものなんだろう。けれど何処となく冷めていた潤一と彩子にとってそれは、ただの無駄な行事に過ぎなかった。それでももしそんな二人にとって無駄じゃなかった事があるとすれば、きっとそんな冷めきった二人がそれまでより深い付き合いが出来た事だろう。

それは一泊二日の同期社内旅行で、妙高高原にスキーに行った時の事だった。

元々スポーツ万能な潤一にとってスキーは苦手なスポーツでも、嫌いなスポーツでも何でもなかった。それどころか潤一が一滑りでもすれば誰もが振り向く程の腕前も持っていた。

けれどそんな、いずれは蹴落とし合うにも関わらず仲間だぞと言う、上辺だけの付き合いに興味が無かった潤一は「体調が悪いから俺はゲレンデで休んでいるよ」と言ってみんなの誘いを断り、一人ゲレンデでコーヒーを飲みながら、ヘルマン・ヘッセの車輪の下の文庫本を読む事にした。

そしてみんなが滑りに行ってから一時間程した頃だろうか。明らかにそのゲレンデとは不釣り合いな、下はヴィニーニの黒のパンツを履き、上はバーバリーのチャコールグレーのタイトネックのセーターと言う出で立ちをした彩子が潤一の前に現れた。そして「ねえ前の席座っていい？」と彩子は言った。

潤一としてもそれを断る理由はない。

「ああ構わないよ。けれどスキーはしないの？ その服装からすると全くする気が無いって気がするけれど」と彩子に言った。

「ええその通りよ。岸崎君だから言うけれど本当はこの旅行だって来たく無かったんだから」

彩子はそう言いながら潤一の前に座った。

「けれどそう言う岸崎君だってこんな所でそんな堅苦しい本を読んでいると言う事は、私と一緒にスキーなんてやる気が無いんじゃないの？」

「けど俺は少なくともスキーウエアーは着てるぜ」と少し冷やかさっぽく潤一は言った。

そして彩子もそんな潤一の冷やかさに、お返しする様に言った。

「けどそんなスキーウエアーなんて着てても中身は私と同じでしょ。」

どうせこんな旅行きたく無かったんじゃないの？」

確かに彩子に言われた通りだった。

「まあね。確かに君の言う通りかもしれない。正直言って俺もこんな出来る事なら参加したくなかったさ。けどタケ（本名 竹野浩二）がしつこく誘うから仕方なく来たんだ。けれど実際来てみるとやっぱり滑る気には成れなくてね」

「そうでしょ。私も初め断ったんだけど、久美子（若菜久美子）がしつこい位電話して来るから仕方なく来ただけよ。でも本当あの二人には参っちゃうわ」

「仕方ないよ。体育会系だから仲間とか友情とかそういうモノに憧れてんだろ」

「友情か・・・。本当くだらないわね」

彩子は呟いた。

「友情か・・・。」

潤一も呟いたが、潤一が呟いたそれと、彩子の呟いたそれとは何処か違うモノの様な気がしたが、高校、大学と進学学校を友達を蹴落とし合いながらただひたすら走ってきた潤一には、その違いが一体何だったのかは、分かるはずもなかった。

その夜はタケこと竹野浩二と若菜久美子の音頭で宴会が始まった。

「いやあ本当今日はみんな集まってくれてどうもありがとう。我々は今もうすぐ入社して一年が経とうとしていますが、今まで本当に色々な苦労があったと思う。けれど誰一人脱落者も出ずに」

と竹野が言いかけると他の者が「まだ一年経ってないんだぜ」「こんなに早く出るわけ無いだろ」と一斉にヤジを飛ばした。

「まあまあそれはそうだけど、一応たて前としてだよ。えー話がそれましたが、とにかくまたいつの日かこうして同じメンバーで旅行でもこれたらなあと思います。まあとにかく堅い事は抜きで、今日は楽しく飲みましょう。それでは男の僕が音頭を取るより女の子に取って貰った方がいいと思いますので、乾杯の音頭は若菜さんをお願いしたいと思います。若菜さんお願いします」

「あの今日は本当にお疲れさまでした。これからもみんなで力を合わせて頑張っていきたいと思います。それでは乾杯！」

乾杯、乾杯、乾杯！！

竹野と久美子の音頭で始まった宴会は酒の勢いもあって、想像以上に盛り上がった。

しかしそんな盛り上がりにも関わらず冷めていた者も居た。

潤一と彩子は二人ともちょっとクールな男前と、少し色っぽいイイ女で通っていた事もあって、初めのうちは女の子や男達にお酒を注が

れていたが、やがてその勢いに乗った盛り上がりには付いていけず、段々冷めて行った。そしてその学生の頃のコンパの延長線の様な盛り上がりは、例えそんな冷めた二人が居なくなったとしても、誰一人気が付く者は居なかった。

潤一と彩子はどちらが誘うと言う訳でも無く寝た。それは彩子がそうであった様に、潤一にとっても愛だとか恋では無かった。そしてそこには愛や恋が存在しない様に、言葉や理由なんて物も存在しなかった。しいて言うなら、そこに共通する何かを持った男と女が居たからなのかもしれない。さもなければそれは共通する何かを失ってしまった男と女だったのかもしれない。ただハッキリ分かる事は、それは潤一と彩子の仲には存在するモノであり、あのにぎやかな宴会会場には存在しなかったモノだった。

その日から潤一と彩子は時々寝る様になった。そしてそれは3年経った今もあの時がそうであった様に、そこにはやはり愛や恋、そして言葉や理由なんて無い事に変わりはなかった。

PU・RURURURU・・・。PU・RURURURU・・・。
彩子の部屋ではムードランプの明かりに照らされたベッドサイド。そしてそこに置かれた、ピンク色をしたハート型の可愛らしい電話機が、そのドアの間隙から漏れる光と、ムードランプから放たれる切ない光だけの少し薄暗い部屋の中で鳴っていった。そしてその呼び出し音は五回程鳴った所でその役目を終わらせた。

「タダイヤモンド、ルスニシテイマス。ピーー、トイウハシオンノアトニヨウケンヲイレテクダサイ・・・ピーー・・・ガチャン・・・プー・プー・プー。」

電話は機械的なメッセージの後、ガチャンと言う何の意味も持たないメッセージを残して切れた。そして電話機がその役目を全て終わらせた後には、シャワー室から聞こえる水の音と、微かに聞こえる彩子の喘ぎ声。そしてそんな彩子を愛撫する男の漏らす吐息が聞こえていた。

潤一は電話は切ったが、受話器は握ったままだった。どうしても諦める事が出来なかった。潤一にとって今日このまま一人で家に帰る事はやはり出来そうもなかった。

潤一は受話器を肩と顎の所に挟み、もう一度アドレス帳を開いた。そこには空白なんて殆ど無かったのに、掛けられる相手も殆ど無かった。潤一は改めて友達の少なさを再確認させられる。

一体いつ頃からなのだろうか。こんな薄っぺらい人脈ばかり集めだ

したのは、と潤一はアドレスを見ながら思った。

元々潤一は中学までは実家に住んでいた。その頃は潤一にも友と呼べる友達も人並みに居たつもりだった。けれど中学の途中からある理由で横浜の私立学校に通う為に、その学校の寮で生活しなければ成らなく成った。

そしてその事は特に潤一が望んだ事では無く、潤一の両親の望んだ事だったが、その時の潤一は何故か親の意見に逆らう事はしなかった。けれどそれは親の言い成りに成ったと言う事でも無い。正確に言うところある瞬間から潤一にとっては、そんな事はどうでもいい事だと思っていた。中学が何処であろうと、その先に友達が居なかりょうと。ただその目の前に永遠と続くレールがあって、ただそこをまるで事細かく決められた標識やダイヤグラムを守って走る電車の様に走れば良かった。何も考えずにただ黙々と。だって初めからそうしていれば、きっと誰も傷付かないで済んだのだから。

潤一は過去の事を思い出そうとしたけれど、すぐにやめた。何故なら潤一が思い出にふけるには、それは余りにも時間が足りなかったから。いつだって時計の針は潤一と言う一個人の事などにかまってはくれないモノなのだ。それは何も考えずにただ誰かが決めたダイヤグラムをきちんと守って歩いて来た潤一が一番分かっていた。

潤一にとって時間は、ある時期まで本当に待ち遠しいモノだった。早く明日に成らないかなとか、早く授業が終わらないかなと言う風に。

けれどその待ち遠しいはずだった時間も、ある時期から自分を責め立てるモノに変わった。入試まであと十日とか、試験終了まであと5分という風に。

そして気が付いた時には、その流れた時間と同じだけ大切な物も失うモノに成っていた。そして今現実的に感じている時間も、やはり潤一を責め立てていた。

もうオフィスの壁に掛かった時計は、八時五十分を過ぎ様としていた。そして潤一の目はアドレス帳のナ行に書かれた、中村香織の所で止まった。香織は潤一よりも一年遅れて彩子と同じ企画部に入社して来た。隣の部署の人間だった。

本来ならば営業部の潤一と、同期でも無い企画部の香織とは殆どと言って繋がりがなくて無かった。事実、仕事上では隣の部署にも関わらず内線のやり取り位で、その部屋にも入った事も余り無かった。要するに企画部と営業部とは余り仲が良くなかったんだ。

潤一にとって企画部は、いつだって見当違いの企画しかしないものだという気持ちがあった。

事実、企画部が提案する企画は余りぱっとしたものが無く、潤一は良くその事で彩子にグチをこぼしていた。そして彩子やその同僚も潤一と同じ様に、そのそれぞれの企画に疑問を感じてはいたものの「今の上司が変わらない事にはね」と言う答えしか帰ってきたためしが無い。もし時々違う答えが帰って来たとしても、「それは私には関係ないわ」と言う、やはり意味の無い答えだった。

だから自然と企画部と営業部の中では同僚同志は別としても、考え方の違いによって見えない溝が深まっていた。

なのに何故そんな別々の部署の二人が出会えたのかと言うと。それは彩子が会社を休んでいた時に起こった。

その日は次の日に企画部が企画した企画を、営業部がどの様にしてその企画に取り組んで行くかと言う、営業会議を控えていた時だった。

そしてその営業会議の責任者だった潤一は、その日は資料集めや、提案書の作成に追われていた。しかしやはりその企画部が企画した企画には、色々な疑問点が多かった。

潤一はその疑問点を解決する為に、仕方なく内線電話で企画部に電話した。

「はい、企画部です」

電話に出たのは、潤一が聞いた事の無い新人の若い女性の声だった。今まで大概は彩子が電話に出たものだったので潤一は少し驚いたが、それは営業部がそうであるように、企画部にだって新人は入ってくるものだった。

「あっお疲れさまです。あの営業部の岸崎ですが、大原さんお願い出来ますか？」

「えっ岸崎さんですか、あの大原さんは、今日は休んでいるんです」

「休み？あっそうですか。休みか」

潤一は諦めようとした。まだ入社して二年目に成ったばかりの潤一にとって、彩子以外の人みんな先輩だった。ましてや変にプライドが高かった潤一にとって、その先輩や上司に資料集めなんて頼めやしない。かといって企画部に行って資料集めなんかしたくも無かった。けれど明日では会議までに時間が無い。そしてこの営業会議は何がなんでも成功させたかった。何故なら潤一にとってこの会議は初めて上司が与えてくれたチャンスだったから。

それは誰も居ない時に上司が言った事だった。

「なあ岸崎、今度の営業会議お前やってみる気はないか？」

「えっ僕ですか？」

「そうだ。お前だ。正直言って、まだ入社して一年しか経たない者に

重要な仕事を任せるには早い気もするが、お前ならやれるだろう。この一年見て来てお前ならやれると思ったんだ。お前にとっても他の者に差を付けるチャンスだと思うけれど」

上司は確かに言った。他の者と差を付けるチャンスだと。

「ええ勿論。やらして頂けるのなら必ず成功させますよ」

「そっか。そう言うと思った。じゃあ頼んだぞ」

「はい。分かりました」

それは潤一にとって初めてのチャンス。失敗する訳にはいかなかった。

「そっか休みか。他の人じゃやってくれそうな人居ないからな・・・。あっそうだ君は確か今期入社なの・・・」

「あっ済みません、遅れましたが私、中村と申します」

「中村さんか、あの突然なんだけれど一つお願い出来るかな」

「えっ何でしょう。出来ることなら何でも」

「いや、そんなに難しい事じゃないよ。この前企画部が企画した春のまるとくキャンペーンと言うのがあったでしょ」

「ええありました」

「その企画書の、八番と十二番、それとこのAコース、Bコースの商品の一覧の資料を集めて置いて欲しいだけなんだ。どうしても明日の会議で必要なんでね。用意出来るかな」

「ええと、春のまるとくキャンペーンの八番と十二番、それとAコースとBコースの商品の資料ですね。分かりました。お昼頃までにはやっています」

「ありがとう。じゃ後で取りに行くから、よろしく」

潤一はそう言って電話を切った。そしてそれからしばらく自分の仕事を片付けて、時計が12時を過ぎた事を確認してから、企画部に行った。

ドアを開けるとそこには嫌な企画部の連中は居なく、彩子の机の隣の机に座っている、少し綺麗な香織だけがポツンと居るだけだった。

「あっ君か。中村さんは」

潤一は新入社員歓迎会の事を思い出した。大体潤一の営業所だけでは新入社員は十人位しか居なかった。だから普通の人ならば少なくとも名前まで全部覚えて居なくとも、誰が入ってきたか位は分かった。けれど余り仲間とかそう言うモノが好きでは無かった潤一にとっては、そんな自分の部署とは関係が無い人間入社して来ても名前どころか、顔も覚えていない。でも潤一はこの中村と言う女の顔をしっかりと覚えていた。何故ならこの中村香織だけは、新入社員の中で飛び抜けて美人だったからだった。

「えっ私の事、知って居るんですか？」

「ああ顔だけは覚えていたよ。だって新人の中で一番可愛いからね」

「えっ岸崎さんにそう言ってもらえると嬉しいです」

「えっ俺の事も知って居るの？」

「ええ勿論ですよ。私の同期の女の子の中では、素敵な先輩で通っていますから。ほら岸崎さんの第一課に入った神崎さんいるじゃないですか、彼女なんていつも尊敬しているんだって。言っているんですよ」

「ああ神崎ね。彼女だったらそんな事言いそうだな。所で例の資料は揃った？」

「ええこの通り揃えて置きました。それとまるとくキャンペーンの参考チラシのサンプルも一応一緒に入れときましたから」

「ああ助かるよ。ありがとう。本当はお昼でも御馳走したいんだけど、今日はちょっと時間が無いから、また今度このお礼はするよ。だから食べたい物でも考えて置いて」

潤一にとってこんな仕事として当たり前のも、お礼をするのは当然だと思っていた。

「えっ本当ですか？じゃあ高い物でも考えて置きます」

香織にとってもこんな仕事として当たり前のも、お礼をされるのは当然だと思っていた。

「なんか高く付きそうだな。じゃあまた」

「美味しいお店探して置きます」

そう言って二人は別れた。そして次の日の会議は、潤一のコマメな資料とデータをもとに上司も満足するほど充実した会議が出来た。そして会議が終わったその日にさっそく潤一は、彩子が2日休んだ事もあり香織を食事に誘った。

潤一は少し奮発して、ホテルニューグランドのラウンジにあるレストランに行った。

「いやあ、昨日は君のお陰で助かったよ」

「いえ、どういたしまして。ところで今日の会議は成功したんですか？」

「まあ初めての会議だったから色々あったけど、一応上司にはなかなか良かったって言われたよ」

「それは良かったですね。それじゃ今日は会議の成功に乾杯ですね」

「でもホント君のお陰だよ。あのチラシのサンプルなんか凄く効果的だったよ。これからも何かあったらお願いしたいね。なんせあの企画部ろくな人間ないからね。今までだって彩子以外・・・」

潤一はそう言い出してはっと気付いて言い直した。

「あっいや、大原さん以外頼めなかったから」

けれど感のいい香織はそんな、潤一の言葉を見過ごす訳はなかった。

「彩子って、大原さんの事ですよ。ふうん、そういう仲だったですか、岸崎さんと大原さんは」

潤一としてもばれてしまってまで言い訳する気は無かった。

だってそれは別に言わなくていい事であるかわりに、隠す事でも無かった。ただ気付かれなければ気付かれないで、イイ事があるかもしれないと思っていただけの事だった。けれどそれは知られてしまった。だからそれはただ食事をして、そのまま何も無く家に帰る事に変わったただけだった。

「まあ、恋人って訳じゃ無いけど。友達と言う訳でも無いんだ。良くある事じゃん、ねえそんな事は」

「ええ、そうですよね。だから心配しないでください。私はそんな事は気にしませんから。かえってスリルがあって楽しそうですよ」

そう言いながら香織は微笑んだ。

「えっ」

潤一にはその香織の言葉と微笑みが意外だった。それは具体的にどうと言う事では無かったのかもしれない。だってそんな事は潤一がさっき言った様に、何処にだって良くあることなのだから。

そして「良くある事なんですよ、こんな事は。だから勿論今夜は食事だけでさよならなんて事は無いですよ」

そう言って香織は自分の携帯電話の電源を、ピッと切った。

その日以来潤一と香織とは、彩子の目を盗んで会う様に成った。けれどそれはどちらかと言うと、潤一の方だけだったのかもしれない。勿論香織も潤一と会って居る事を彩子には黙っていたが、潤一からプレゼントされたイヤリングを、わざわざ見せつける様に「これ彼氏から貰ったんですよ。似合いますか？」って見せびらかしたりしていた。

そして、もしかするとそんな香織の事を彩子が知らないと思っていたのも、潤一だけだったのかもしれない。

香織の場合、親と同居して居る事もあって、連絡のその殆どが携帯電話だった。

0・3・0・・・2・2・5・・・・・・。 ガチャ。

「オカケニナッタデンワハ、デンバノトドカナイバシヨニアルカ、デンゲンガハイッテイナイトメ、カカリマセン」

潤一はもう一度掛けてみたが結果は同じ事だった。要は電話局の言いたい事は、お掛けに成った電話は何処か遠くの砂漠か、ジャングルの様な電波の届かない所にあるか、その電話の持ち主が何処かの男と寝ている為に、電源を切っているかのどちらかと言う事だった。付け加えるなら、だから何度あなたが電話を掛けたとしても、今夜は繋が

る事はありません！ とでも言いたかったのだろう。けれどそれは、潤一と会う時は必ず携帯電話の電源を切っていた香織を知っている潤一が、一番分かっていることだった。

潤一は仕方なく握っていた受話器を置いた。そしてそれは希望の少なさと、残された時間の少なさと、そして友や愛の少なさを意味するものだった。

もう潤一には溜息すら残されてはいなかった。そして時間はそんな潤一を待つことは無く、刻一刻とその役目を果たしている。潤一は仕方なくそのやりかけの仕事を終わらせて、ラップトップ型のコンピューターの電源を落とした。

そしてコンピューターの画面はそんなまるで潤一の希望とオーバーラップするかの様に、その黒い画面の中に吸い込まれて消えていった。潤一にとってその何も無い真っ黒な画面を見ると、その希望の少なさが、やけにリアルに感じられるものだった。

そして潤一はその何も無い真っ黒な画面を、ただ諦め切れない気持ちだけで眺めていた。

時間が無い。確かに時間は無かった。けれどそれは例え時間が在ったとしても同じ事なのだろう。何故ならその本当の理由は、今この場だけの事ではなく、きっと、もっと前から分かっていたのだから。元々潤一と彩子そして香織。一体何で繋がっていたのだろう。

愛を捨てた彩子。愛を知らずに育った香織。そして愛を失った潤一。こんな三人に共通するものは何も無い。けれどこんな何も無い事が唯一共通するモノと呼べるのかもしれない。だから幾ら潤一がこの二人に何かを求めたとしても、何も返ってこない事は分かっていた。そんな事は今更実感する事でもない。そんな事は潤一には一番分かっていた。そんな事は・・・。

けれど現実の時間はそんな余韻すら与えてくれない。潤一は仕方なく最後の力を振り絞って、その諦めきれずに眺めていったラップトップ型コンピューターの画面、そう心の最後のトピラを閉じようとしたその時だった。

・・えっワスレナグサ？ ・・ 真実の愛。そして私を忘れないで・・・。
何もかもを失い掛けていた潤一の目に写ったものが在った。

それは青い小瓶に入った、透き通るほどに青い一輪の勿忘草だった。その暗い画面の先、そしてその心の先に確かにその勿忘草はポツンとあった。そしてそれは今突然この場に現れたモノでは無く、もっと前からそこには存在していたモノだった。けれどそれは奪い合い、蹴落とし合いの人生を過ごし、その中で本当に大切なモノを見落として来た潤一がそうであった様に、この資料の山やあくせくした毎日の中に埋もれて、見落とされていただけの事だった。

潤一はその今にも触れると消えて無くなってしまいそうな花びらに、手をかざしてみた。

そこには微かではあるが、確かな優しさが感じられた。そしてそれは自分の心に触れた感触でもあった。

・・・神崎幸子・・・。

潤一は心で呼んだ。そう、彼女こそ、その今日の前の触れる事の出来る優しさの持ち主だった。

神崎幸子。彼女は香織と同期で第一営業部に入って来た、ごく普通の女の子だった。

ごく普通と言っても、それは彩子や香織と比べてであり、普通の子の中では色々ないい所が沢山あるのだろう。けれどこの頃の、女の子に何も求めていなかった潤一にとっては、それは見た目が特にとびつきり綺麗とかじゃなければ見えるはずもなかった。

けれどそんなはずだった潤一にとって、今日の前の触れる事の出来た優しさ。そうこの花は、あの日以来の彼女の贈り物だったのだ。あの日以来の。そうあの日は丁度潤一がある花屋に仕事で行った時だった。

商談も大体終わりかけ、後は花屋のオーナーがうんと言えれば全てが終わると言う頃だった。

ただ実際花屋のオーナーも少し迷っている様だった。話は凄く良い内容だと言ってくれたし、金額的な面もクリアーしていた。要するに誰かに背中を押してもらいたいのだろ。あと一押しして欲しいと思っていた。そんな時、潤一の目に留まったものがあった。それはショウケースに飾られた、透き通る程に綺麗なスノードロップだった。

「わあ、綺麗なスノードロップですね」

「あら、男の人なのに珍しい。ご存じなんですか？ この花」

花屋の女性オーナーは少し驚きながら言った。

「ええ。スノードロップ。ヒガンバナ科の花ですよ。確かこの花は昔、エデンの園を追い出されたアダムとイブが雪の中で寒さに震えていると、そこに何処からか天使が舞い降りてきて、悲しみに暮れるイブを慰め元気づけようと、雪をすくい息を吹きかけ、そのこぼれた雫から咲いたのがこのスノードロップと言われているんですよ。すごくメルヘンティックなんですよ。この花の由来は」

「すごく良くご存じなんですね」

「ええ、僕は昔、花が好きだったんですよ。だから一通りの花なら知

っています」

「そうなんですか。でもそう言う男の人って今あまり居ないんですよ」

「そうなんですか？　こんなに綺麗な花なのに」

「ねえ、この花の花言葉知っていますか？」

花屋の女性オーナーは期待を込めて言った。

「ええ、確か、希望、ですよ」

「ええ、本当に良くご存じなんですね。あっもし良かったら一束どうぞ。好きな人にでもプレゼントしてあげなさいよ。そう言う人いるでしょ」

そう言って、女性オーナーは真っ白い今にもその雫が雪に溶けてしまいそうなスノードロップを数本包み始めた。

「いいんですか？　いただいて」

「ええ勿論よ。あっそうだ。契約書も置いといてくれる。今度までにサインして置くから」

「あっ本当にすみません」

「どういたしまして、はいどうぞ。ちゃんとリボンして置いたからこのままプレゼント出来るわよ。あっそれと、さっき昔はって言ってたけど、今は好きじゃないの？　花は」

・えっ・潤一は一瞬迷った。昔は確かに好きだった。好きで好きで色々な図鑑を読んだり、色々な所に行って色々な花のにおいをかいだ。本当にその頃は、知るって言う事に喜びがあった。一つ知ると、もっともっと知りたくなった。夕方暗くなるまで、一人で花を探した。知ると言う事が嬉しくて嬉しくて。

けれどそれはある時から、知っていると言う事が当たり前になり、知らないと言う事が誤りに変わった。自分の意志とは関係なく詰め込まれ、それは決められたルールを歩く道具になった。

そして今もそれはただ契約を取る為だけの豆知識に過ぎなかった。「あっいや。勿論今も好きですよ。それじゃ契約書、ここに置いときます。本当にありがとうございました」

潤一は白いスノードロップを受け取り、逃げる様に店を出た。けれど本当に逃げ出したかったのは、きっと店からではなく。自分の過去と言う思い出からだったのだろう。何となくやりきれない気持ちだけを残したまま。そしてそれは、いつものことさ、いつもの。そう自分に言い聞かせながらも、イマハスキジャナイノ？　と言う台詞が離れない複雑な気持ちだった。

こんな気持ちではとてもじゃないけれど、この後はお客さんの所になんて行けやしない。契約も気持ちはどうであれ、とりあえず一件取った事もあり、潤一は残りの予定をキャンセルして会社に戻る事にした。

営業部は潤一だけが早く戻って来た事もあり、珍しく内勤の神崎幸子以外誰も居なかった。そして会社に着く頃には潤一の気持ちも少しは落ちついていた。

「あら、岸崎さん。どうしたんですか？　こんなに早く」

時計はまだ二時だった。

「えっ、いやあ今日は契約取ったから、たまには早く返ってこようかなと思って。あっそうだ。神崎にこれプレゼントするよ。いつも内勤大変だからね」

潤一はそう言って、手に持っていた花束を幸子に渡した。

「わあ。綺麗ですねこのスノードロップ。ありがとうございます。大切にします」

「大切にしてくれよ。俺が花をプレゼントするなんて、そんなにないんだからな。あっそうだ確か俺の机の引き出しの中にこの前もらった粗品の」

そう言いながら潤一は粗品の箱を開けた。そこには赤と青の二つのペアーの小さな花瓶が入っていた。

「ほらこの花瓶に入れとくといい」

そう言ってその粗品の箱ごと幸子に渡した。

「あっありがとうございます。さっそく水を入れてきます」

そして幸子は嬉しそうに花と花瓶を持って給湯室に行った。

潤一にとってそんなにも嬉しそうにする女の子を見るのは本当に久しぶりだった。それもただたまたまもらった花、そしてただたまそこに居た女の子に渡しただけだったのに。

確かに女の子にプレゼントする事は何度かあった。例えばそれは彩子だったり、香織だったり。けれどそんな二人にプレゼントしてもこんなには嬉しそうにはしなかった。勿論ありがたいと言うけれど、それは何となく機械的というか、そこに元々用意されてあった言葉を、ただマウスでカーソルを動かしてクリックするだけの様な感じがしていた。そしてそんな受け答えが今まで潤一も当たり前だと思っていた。

けれど何故か今嬉しそうに花瓶に水を入れに行った幸子を見ていると、こんな当たり前の事でさえ新鮮で清らかなモノに感じられるモノだった。そしてそんな当たり前の事で、潤一は少なからず幸せをほんの少し感じる事が出来た。

幸子は5分程して、二つの花瓶に同じだけの花を入れて戻ってきた。

「どうです。綺麗ですか？」

潤一は机の上のファイルを閉じて幸子の方を見た。

「えっ、あっ、き、きれいだよ」

幸子が聞いたのは花のことだった。勿論潤一もそんな事は分かって

いた。けれど潤一が綺麗だと思ったのは、その二つの花の間だから見えた幸子の笑顔だった。そしてそれは初めて潤一が幸子に感じた気持ちだった。

「本当ですか、良かった。少し失敗したかなと思って。それじゃどうぞ。一つは岸崎さんの所に置いてください。もう一つは私の所に置きますから」

そう言って幸子は自分の所と、潤一の所に置いた。

潤一はペアーの花瓶を幸子の所と自分の所だけに置いてあれば、きっとみんなが帰って来た時に変な目で見られるなと思い、俺の所はいいからと言いかけたが、すぐにやめた。今目の前で嬉しそうに花を眺めている幸子を見ていると、何だかそんな彼女の気持ちを壊したくない気がした。それにもともと人の目なんてどうだって良かったし、今までだって特に気にしていたわけでも無いのだから。

その日は他の者が返ってくるまでの2時間位の間、幸子と潤一の二人だけの声でその広いフロアーを埋めていった。それは笑い声だったり、えっそれでどうなったんですか？ という期待の声だったり、それじゃ俺と同じじゃん、そうでしょ私もそう思うんですよ。と言う共通のモノを手探りで確かめ合う声だった。

潤一にとってそれは本当に久しぶりの笑顔だった。それが一体どれくらい前から無くなっていたかは分からない。けれど少なくともこの会社に入ってからは無かった。彩子や香織と話をしていてもそこには心からの笑顔なんて無かった。それに彼女達も心からの笑顔なんて求めてはいなかった。それどころか心のこもったモノなんて何も求めてはいなかった。

お互いそこに求めていたモノは、金を出せば買えるモノや目に見えるモノだけだった。けれどそんなスカし合いの日々だった潤一にとって、いま目の前で無邪気な笑顔を見せている幸子を見ると、そんな誰にも求めても求められてもいなかった心のこもったと言うモノが、やけにいいモノに感じるものだった。

それからだった、潤一と幸子の間に形じゃなく、物でもないモノが存在するように成ったのは。

幸子は潤一の机の上に花を絶やさない様に気を配っていた。潤一はそんな幸子に出張や旅行に行った時は、何かしらお土産を買って来たり、仕事で分からなそうな時は優しく教えてあげた。勿論それにはお互い心があった。けれどそんな心と言うモノも、この忙しい追いつ追われつの日々の中に見えなく成っていた。それが今疲れきってオフィスにたたずんでいる潤一の中で目覚めた気持ちだった。目の前の一輪のわすれな草によって。

そしてそれはあの日以来、幸子が絶やさないでいてくれた花だった。

・・・神崎幸子・・・会いたい・・・。

それは潤一が初めて幸子に感じた気持ちだった。

潤一は机の中の社員名簿を見た。神崎、神崎・・・、神崎幸子。そこには確かに彼女の名前はあった。電話番号もそこにはちゃんと付随してあった。2・6・2・4・3・7・・・。

潤一はその番号を確かめる様に一つ一つ押したけれど、途中でやめた。もう一度同じ事をやってみたけれど、結果は同じ事だった。

どうしても最後の一字を押す事が出来ない。一体何故なんだろう。けれどそんな事を悩んでいるほど時間も無かった。時計はもう九時を目指そうとしていた。仕方ない諦めるか。潤一は諦めてオフィスを出ることにした。

全てを片付けてオフィスの電気を消した。ガラス張りに見える自分のオフィス。そこには昼間のにぎやかさが嘘の様に、静まり返った淋しい空間だけが広がっていた。全ての電気は消した。けれど正確に言うとは全てではなかった。一つだけ消さずに置いた物がある。それは自分の机の上の、何処にでも有りそうな小さな白いスタンドだった。そしてその小さなスタンドの光の先には、スポットライトを浴びて少し恥ずかしそうにしている、一輪のわすれな草がポツンとあった。それは潤一のせめてもの気持ちであり、ささやかな気持ちでもあった。

潤一はそのスポットライトに照らされた一輪のわすれな草を見つめながらオフィスのドアをロックした。

夜の街は金曜の夜と言う事もあって、欲望や溜息の渦にその全てを覆い尽くされていた。いつものアンティークショップや、いつものコーヒーショップ、そしていつものショットバーは今の疲れきった潤一にとっては、本来の鮮やかな色には見えなかった。どの店に寄っても、そこには溜息以外の物は何も見付けられそうにも無かった。

仕方ないさ、だって時間が無かったんだから。そう自分に言い聞かせてみても、なんの慰めにも成らない。慰めどころか言い訳にすら成らなかった。きっと潤一は分かっていたんだ。例えば時間が合ったとしても最後のボタンが押せなかった事を。それは潤一がある時期からずっと続いていた事だったし、これからもきっと同じ事なのだろう。その仕方無いんだなんて言い訳にすらならない言い訳を、何かや誰かのせいにしてている限りには。

潤一はその欲望と溜息の渦に覆い尽くされていた街の中に、今までかたくなに守ってきたその下らないエゴを、何処かのポリバケツに燃えないゴミと一緒に捨てたい気持ちだった。けれどこの街にはそんなゴミ箱すら用意されてはいない。もし用意されているとしたらそんなやり場の無い気持ちのはけ口だけだった。けれどそんなはけ口に幾ら

気持ちを委ねても、明日になれば同じ事を繰り返してしまうだけで、結局のところ、あの嫌な仕事と同じで終わりなんて無かった。

潤一はその終わり無きレールをただ走るだけなんだ、今までのように。それは時々には嫌なこともあるだろう。けれど目を瞑ってさえいれば、いずれそれは今までの様に過ぎ去って行く。だから今夜だって目を瞑ればそれで全ては解決するはずだった。けれど今夜の潤一にとってはそんな今まで簡単にやってのけてきた事が、すごく難しく感じていた。何故ならその全てが偽りだったのだから。

その気持ちはあのワスレナ草を見た時にほんの一瞬、幸子とのあの楽しかったひとときを思い出してしまってから離れられない気持ちだった。初めて人を求めた。それも人なら誰でもいいと言うそんなモノではなく、たった一人の人を。

そしてこの夜の街では、そんな潤一の気持ちとオーバーラップすかの様に様々な声が木霊していた。

「ねえねえ、そこのお姉さん達。俺達とカラオケでも行かない？」

「なあ、今夜はいいだろ？」「ねえ私あれ欲しいの。だからあれ買ってくれる？」「君、歳は幾つ？　そうか17か」

「ふざけんなよ！」「ふざけないで！」「ふざけないでくれ！」

けれどその殆どが何だか悲しくなって来るような声だった。そしてその欲望と握らせ合いのやり取りの中に、痛烈に心に響いた声があった。

それは丁度電話ボックスのドアを足で押さえながら、受話器に向かって大声で話している歳の頃なら潤一と同じくらいだろうか、二十五歳くらいの男から聞こえてきた。

「だから、なんでわかんねえんだよ。それはしょうがねえって言っただろ。なんせ時間が無かったんだからよ。えっ今日？　それも無理だよ。今日も時間がねえんだ。だからまた今度電話するから」

その男は確かに言った、時間が無いと。

時間が無い、時間が無い。今の自分と同じだと潤一は思った。とにかく時間が無かったんだと。けれどその男が電話を切った後に、電話ボックスの横に居た女に「悪いな、なんせうるせえ女だから参っちまうよ。でもこれで今夜はゆっくり楽しめるから」と言って、その女の肩を抱いて夜の街に消えて行く様を見た時、痛烈な痛みと吐き気を覚えた。

それはこんな安っぽい男と、今の自分との相違点が見つからなかった悔しさから来るモノだった。同じじゃない、同じじゃない。たぶん同じじゃない。きっと同じじゃないよ。ねえ、同じじゃないよね。きっと同じじゃないよね。ねえ同じじゃないって言ってくれよ。同じじゃないって・・・。

潤一はこみ上げてくる吐き気を押さえながら走った。その様はまるで永遠に抜け出すことの出来ないその握らせ合いの世界から、必死に逃げ出そうとしている様にも見えた。けれど結局の所、幾ら遠くに走って行ったとしても、その場所から逃げ出す事なんて出来やしない。何故ならそれは物理的な場所ではなく、心のずっと奥の方にある場所だったのだから。

気が付いた時には潤一は、その欲望、溜息、そして握らせ合いにその全てを飲み込まれてしまった街を少し離れた、川っ淵に立っていた。そしてその殺風景な空間こそ潤一にとっては、その眼下の川辺に映るネオンサインに埋め尽くされた街や、握らせ合いの現実から逃れたどり着いた場所だった。

今日は本当に疲れたと改めて潤一は思った。そしてやはりこのまま一人で家に帰りたくないことや、自分自身が壊れてしまうかもしれないと言う気持ちは、あのオフィスに居た時から変わらなかった。いや変わらないどころか、あのオフィスに居た時よりもっと強い気持ちに成っていた。潤一は少し息を整えてその殺風景な空間を見渡してみた。

目の前に広がる川の流れは、この目まぐるしく過ぎていく時の流れに上手く乗ることが出来ないとも言いたいのか、逆らう様にわざとゆっくり流れているかの様に見えた。そしてその川沿いの道にはやはり、この目まぐるしい現実に上手く乗る事が出来ないのだろう。きらびやかな街からつまみ出された人々が、その一人一人が個々に抱え込んだエゴを吐き出していた。

そんな世界ではもはや優しく包み込む街路灯の明かりや、海から漂う潮風なんて、何の意味も持たなかった。

自分が変わるしかない。その風景はそんな潤一の気持ちをやけにリアルに映し出していた。

潤一は腕時計に目をやった。時計の針は九時三十分の所で止まってくれた。

正確に言うと止まっていたのではなく、少しずつではあったがその針は確実に一定の早さで動いていた。けれどそれは昔の様に待ち遠しいモノでも、今までの様に追い立てるモノでも無かった。それは自分の為に止まってくれた。そしてそんな気持ちは初めて潤一が感じた気持ちだった。

潤一はビルの陰に隠れる様に建っている一台の電話ボックスを見つけた。もう迷う事はない。きっと今からだってまだ間に合うさ。

だって時計はまだ九時半なんだし、それに二十五歳なんてまだ人生の半分も終わったわけでは無いのだから。

その頃、幸子は自分の部屋で料理の支度をしていた。

部屋は1DKの決して広いとは言えないものではあったが、ベッドとタンスとテレビ、そして白の細長い本棚があるだけと、かなりこまめに整理されている事もあり、その八畳半の空間は広く感じられるものだった。壁には誰が書いたか、薔薇の花束が緑の花瓶に飾られている絵が掛かっている。カーテンはベッドカバーとお揃いのピンクがベースの花柄だった。よほど花が好きなのだろう。タンスの上とテレビの上には紫のフリーズと白のクリスマスローズが飾られていた。そして一枚のちょっとインテリっぽい曇りガラスがはめ込まれたドアを挟んで、使い勝手の良さそうなダイニングキッチンがあった。勿論ダイニングキッチンにもピンクの薔薇がテーブルの上に置かれていた。そしてそのキッチンで幸子は、一人用の小さな鍋でクリームシチューを暖めていた。

もう火は弱火に成っていた。後は時間が来るまでそのままにしていれば良かった。けれど何故かその場にたたずんでグツグツ煮えるシチューを眺めていた。正確に言うと眺めてはいたが見てはいなかった。頭の中は違うことを考えていた。

幸子は元々は青森の出身だった。勿論今も実家は青森の片田舎でリング園をやっていた。

幸子も高校までは青森の高校に通っていたが、行きたかった大学がどうしても横浜にあった事と、大好きだったおばあちゃんが死ぬ前に最後に残してくれた、「幸せはお天とう様とおんなじで、あのお山の向こうにあるんだよ。だから大切な物は自分であのお山を越えて手に入れる事なんだよ」と言う言葉が有った事もあり、高校を卒業と同時に一人で上京して来た。

幸子は一人娘だった事もあり、それはかなりの反対を押し切った決断だった。親には大学を出たら帰って来るからと言って、何とか親の反対を押し切ったけれど、結局大学を出た後もこの街に残る事にした。

理由は今も良く分からない。とにかく一人っ子だった事もあり、家にいる時は何一つ不自由は無かった。それがもしかしたら理由なのかもしれない。不自由が無い事は自由も無いものだと思っていた。親の事は何よりも大切だったけれど、それ以上に自分というものを試したかったのかもしれない。毎年お正月には家に帰っていたけれど、今度はどうしようか考えていた。家に帰れば必ず言われる事は決まっていた。「都会なんてお前には向いてないだろ」とか、「何処何処の家の息子とお見合しろ」とか、結局自分の所に戻ってこいと言う事だけだった。勿論幸子にはまだ戻る気も無ければお見合をしたいと言う気持ちもなかった。けれどその反面、親のそんな気持ちも良く分かっていて、だからこそなおさら戻りづらかった。

かといってこの横浜に一体何があるのだろうか。大学を出て横浜に残ると決めたとき、自分の中に誓った事があった。二十五、二十五歳までに、自分がどっちで生活して行こうか決めようと言うことを。二十五歳位だったら田舎に帰ってもまだまだ嫁の貰い手はあるだろうし、何とかやっていける年齢だと思っていた。けれどそれを越えたらもう後戻りは出来ない、この横浜という街で完全に生活する気持ちに成らなければ絶対に全てが中途半端に成ってしまう、だからこそ幸子は今一生懸命頑張っていた。けれど自分の中の答えは、もうすぐ二十五歳に成ろうと言うのにまだ中に浮かんだ風船の様に、その何もない空間を漂っていた。

仕事は順調だった。みんなもそれなりに優しくしてくれたし、慕ってくれる後輩もできた。時々はきつい事も言われたけれど、それは何処にでもある事だし、それに何より頼りに成る先輩がいた。その人がいつも分からないことは色々優しく教えてくれた。

大きな声では言えないけれど好きな人もいた。正確に言うとそれは恋とはまだ呼べるものでは無かったのかもしれない。ただの憧れだったのかもしれない。けれど明らかにその気持ちは特別なものだった。勿論相手はその事を知らない。その人は会社の先輩で、頼りになる人だった。けれど実際仕事以外の会話なんて殆ど無かった。ただ一度だけ花をもらった事があるだけだった。ただその時にほんの少し色々な話をしてくれただけだった。ただそれだけだったが、今ハッキリ言える事はその日以来、尊敬や憧れだった気持ちが何となく特別なモノに変わったと言うことだった。

それから半年間、幸子は何度かその人の机の上の花を取り替えた。そしてその度にその人が言う、ありがとうがとても楽しみだった。それは見返りなんてモノではなく、純粹に好きな人が喜んでくれる事が嬉しかった。

けれどそれもあと一年の後には答えを出さなければ成らなかった。二十五歳の誕生日までにどちらかの道を歩いて行かなければ成らない事に。けれど大学の時にも結局好きな先輩に告白出来なかった様に、この恋も何も出来ないまま終わってしまいそうな気が何となくあった。あの頃の様子にただ見ているだけでいいの、と言う言い訳を抱えたまま、そして二十五歳に成って田舎に帰るだけ。恋愛にも夢にも答えを出せないままに・・・。

幸子は鍋と自分との間だけに存在する、その曖昧な空間にそんな自分の未来を見つめていた。もうただ待っているだけでは、きっとこの先も何も変わることは無いんだ。それは例え田舎に帰ったとしても変わる事の無い現実なんだ。もし自分の描いた未来に近づく事が出来るとしたら、自分が変わるしか無い、自分自身が。そう思っていた時だ

った。突然電話が鳴ったのは。

PU・RURURURU・・・。PU・RURURURU・・・。

鳴っている電話はタンスの上の花瓶の横に置かれた、今流行りの可愛らしいコードレスホンだった。

「はい、神崎ですけど」

相手の声が聞こえて来るまでにそこには一瞬の間（ま）があった。けれどその間（ま）はイタズラ電話特有の嫌な雰囲気ではなく、どちらかと言うと何か伝えたいのだけれど、どう言えばいいのか迷っているかの様だった。

幸子はもう一度その電話に優しく声を掛けた。

「もしもし」

「あっ、もしもし岸崎だけど。あっと今忙しかった？」

その声は確かに会社の頼りになる先輩の潤一の声だった。けれどその言い回しは何処かいつもとは違って不器用そうに感じられた。ただハッキリしていたことは、その声の主は幸子の今一番聞きたかった声だということだった。

「えっ岸崎さんですか？ えっどうしたんですか？」

「あっいや、机の上の花のお礼に夕食でもどうかなと思ったんだけど、もう夕食済ませちゃったよね。そうだよなこんな時間だからね」

実際幸子は夕食を食べてはいなかった。けれどダイニングのテーブルの上にはシチュー以外のものは全て整っていた。そして最後のシチューも、もう少しでそのテーブルの上の料理の仲間入りをしようとしていた。

「えっいや、あれ本当に偶然ですね。私も今夕食何にしようか考えていた所だったんですよ」

そう言いながら、コンロのスイッチを静かに切った。

潤一は幸子と純粋に合いたかった。そして幸子はそんな純粋な潤一の誘いを快く受け入れた。そして二人は関内にあるルージュと言うフランス料理屋に、十時に待ち合わせをして電話切った。

電話を切る頃には幸子はもうさっきまでの憂鬱な気持ちはなく、いつもと変わりの無い明るい笑顔に変わっていた。その理由は今はハッキリしている。電話が鳴るまでに有った何かが今は無く、鳴る前まで無かったモノが今あるということだった。

幸子は嬉しかった。憧れだった人からの突然の電話、そして突然の誘い。それはまさに夢の様な出来事だった。それは小さい頃に読んだ絵本の中だけに存在する、おとぎ話の様に。

実際幸子は何度か潤一に声を掛けようとした。けれどそれは出来なかった。そこにはいつも越えることの出来ない大きな壁があった。潤一は自分より一つしか歳は離れていなかったのに、会社の中ではいつ

だって人に頼られる存在だった。仕事だって人一倍器用に処理してしまうし、それに女性社員の憧れの的だった。それに比べて自分はいつだって人を頼ってばかりいたし、仕事だって人の何倍も遅かった。それは時々神崎さんのお陰で助かったよ、なんて事も言ってくれる人もいたけれど、それは昔まだおばあちゃんが生きていた頃、おばあちゃんが良く言ってくれた「サッチャンはきっと大きく成ったらいいお嫁さんに成るね」と言う言葉と何処か同じ様なものだと思っていた。勿論そう言われるととても嬉しかったし、頑張ろうと言う気持ちにも成れた。けれどそれはこの厳しい現実の中ではシンデレラのガラスの靴にさえならない事も良く分かっていた。そしてそんなガラスの靴を抱えていたとしても、潤一と自分の中に存在するその壁は乗り越える事が出来ない事を。

けれどそんな壁が今なんの前触れも無く目の前から消えた。たった一本の電話によって。

幸子は限られた時間を掛けて身支度をして部屋を出た。

潤一は幸子より早く店に着いた。この店は何度か潤一が他の女性と来た事があったので、気持ちの上では他の店にしたかったが、この辺で有名な店と言ったら余り無かったし、どちらにしろそのどれをとっても他の女性と一緒に来たことがあったので、結局の所同じ事だった。

では何故この店を選んだかと言うと、この店はとにかく花が中心にコーディネートされた事がその大きな理由だった。

全てのテーブルには目立ち過ぎず、目立たな過ぎずの花が飾られていたし、壁にも様々な色彩を持った花が飾られていた。そしてそんな花たちが放つ香りがなんとと言っても潤一が一番好きなものだった。

きっと花好きの幸子なら喜ぶだろうし、潤一としてもそんな花好きの人と一度来たいと思っていた。

潤一は席に着き、その雰囲気や香りの中に身を置くと、先まで感じていた絶望感に似た気持ちが、まるで嘘の様に感じられた。勿論その理由はこの空間にいる事だけでは無かった。そしてそんなこの空間も、もう少しでさらに良く感じるものになる。潤一はそんなモノがとても待ち遠しかった。子供の様にワクワクしていた。久しぶりにドキドキもした。大人気も無くソワソワもした。本当に久しぶりだった。こんな気持ちに成れたのは。思えばこの町に来て本当の恋愛なんてした事が無かった様な気がした。確かに何人もの女性が潤一の前を通り過ぎては行ったけれど、そのどれをとっても潤一が望んだモノなんて一つとして無かった。だから付き合う時に笑顔が無かった様に、別れる時にも涙なんて無かった。そしてその一つ一つを振り返って見ても、その時に心のこもった笑顔や涙が無かった様に、やはりその後には何一

つ残ってはいなかった。何一つとして。

この空間で目を閉じていると、そんな今までの自分が薄っぺらかった事や、本当に孤独だった事を実感してしまうものだった。

でもこれからは違う。これからは違うんだ。勿論何もかもが思い通り上手く行くかどうかは分からない。けれどそれでもいいんだ。きっと何かを失う事すら、今の自分にとっては懐かしく思えるのだろうと潤一は思った。何故なら失うことは何かを求めたその後にあるモノなのだから。

店の壁に掛けられた時計が十時に成ろうとした時に、幸子は淡いピンクのピーコートと白いぼんぼんの付いた手袋と言う、まるでピンク色の兎でも連想しそうな出で立ちで店にたどり着いた。

潤一にとってはそんな二十四歳には見えない幸子が新鮮に感じられた。

今まで付き合った女の子はその殆どがブランド品で身を固め、その殆どが実際の年齢より大人っぽく見えた。それに比べて今目の前で恥ずかしそうにコートをウエーターに預けている幸子を見てみると、まるで汚れの知らない少女の様に思えてしまうものだった。

「すみません。待ちました？」と言う幸子に、潤一は微笑んで俺も今来た所だからと言って答えた。

そして二人はコースを中心に幾つかの味付けや焼き加減を付け加え注文した。

注文し終わると幸子は改めて周りを見渡して言った。

「岸崎さんは良くこう言う所来るんですか？」

「まあ良くて訳では無いけれど時々は来るよ」

「私なんて余りこう言う所来たこと無いんで、びっくりしましたよ。店の名前は何度か聞いた事あったんですけど、中に入ったのは初めてなんです。でも凄く良い所ですね。花がこんなに飾ってあるなんて」

「そうだろ。ここは俺のお気に入りの場所なんだ。このアルコールランプも花から取った油で付いてんだよ」

そう言って潤一はテーブルの上のアルコールランプを指さした。二人は食事が出るまでの間、その空間が醸し出す雰囲気を楽しんだ。

幸子はテーブルに頬杖を付いて、小さなスピーカーから流れる音楽に心と体をふるわせて、少し嬉しそうにその花の香りや色彩を楽しんでいた。

そして潤一もそんな幸子の様を見てみると、何だか本当に誘って良かったと実感できた。

正直言って潤一はこの店にはどんな高価なブランド品で身を固めた誰よりも、素朴な手編み風セーターを来て、今目の前で頬杖を付いている幸子が一番似合っているのかもしれないと思った。今まで何人か

の女性とこの店に来ただけで、この空間はそんな女性の前では何の意味も持たないものだった。大概良い雰囲気のお店ねとは言うものの、実際はその雰囲気を満喫している様には見えなかった。

それは時には強い香水の匂いによって花が灰かに漂わせる香りは消されてしまうし、ひどい時には無神経にタバコに火を付ける者もいた。

潤一もタバコは吸うし、タバコを吸う女性がどうと言いたかった訳ではない。要するに人がこの灰かに漂う花の香りを楽しんでいるのに、平気で目の前でタバコを吸うその無神経さが嫌だった。それに比べていま目の前で口を横につぐんで、頬をほんの少し赤く染めて嬉しそうにこの雰囲気を楽しんでいる幸子を見ると、本当にこの空間は最高にいいものを感じられた。潤一はそんな濡邪気な子供の様に嬉しそうにしている幸子に、いろんな意味を込めてありがとうと言った。

「えっ何がですか？」

幸子はそんな潤一の突然のありがとうの意味が分からなかった。

「いや、ほら机の上の勿忘草。それに今までも色々な花を置いてくれただろ。ホント凄く感謝しているよ」

「いえ、そんなありがとうだなんて。こちらこそ仕事の上で色々お世話に成っていますから。それに私の花瓶には花を一束買うと入りきれないから・・・。それにそれは・・・」

幸子にとってそれは感謝の気持ちであり、お礼の気持ちでもあり、特別な気持ちでもあった。そしてそれは何より、突然お礼を言われても何一つ上手く答えられない純粋な気持ちだった。

潤一としても今はそんな幸子と同じ気持ちだった。だからそんな照れを隠すように少し冗談混じりに答えた。

「えっ、何？ ひょっとして余ったから俺の机の上に置いていただけだったの？」

「えっ、いえそんな・・・」

「うそ、うそ、そんな事無いよな。でも本当に感謝してるんだ。なんか朝、机の上の花見るとがんばろうって気が出るんだ」

幸子もうつつむきながらもそんな感謝の気持ちを言われると嬉しいものだった。

「そう言ってもらえると、私もうれしいです」

幸子はそう言って少し恥ずかしそうに微笑んだ。そして潤一もそんな幸子を見て微笑んだ。

二人は食事が始まり、そしてそれが全て終わるまでに色々な話を交わした。それは花についての話だったり、仕事の話だったり、身の上話だったり。それは潤一にとっても幸子にとっても、充実した会話だった。あのオフィスで話をした時よりもそれは確実に二人の距離を縮めてくれるものだった。勿論本当に言いたかった事や、本当に確かめ

たかった自分の気持ちは、きつともっとずっと奥の方にあったのかもしれない。けれどそれは自然の摂理がそうであったように、まだこの自分の気持ちすら手探りでしか確かめる事の出来ない二人にとって、それはまだ手の届かないものだった。

二人は食後のコーヒーを飲みながら店の雰囲気、美味しかった食事、そして今夜のこの二人だけの思い出の余韻に浸っていた。

「どうだった？　この料理は」

「すごく美味しかったです。特に最後の薔薇の形をしたアイスクリームなんて、食べるのがもったいないくらいでした」

「そおか？　俺の分も美味しそうに食べちゃったじゃん」

「それは岸崎さんが、そんなに美味しいんだったら半分あげるよって言ったからじゃないですか」

「そおだったっけ」

「そうです！」

「まあでもこんなに美味しそうに食べてくれれば誘った甲斐があったよ」

「いえ私こそ、こんな美味しいお店教えていただいて良かったです」

「いえいえ、どういたしまして」

「いえいえいえ、こちらこそどういたしまして」

二人は顔を見合わせ、ぷっと吹き出した。それは食事中的ワインに少し酔ったせいなのかもしれない。明らかに潤一と幸子の間には食事前のぎこちなさが無くなっていた。そこには潤一の軽い冗談に幸子が真面目にうつむいてしまう事などもう無く、冗談には冗談を言って返せるように成っていた。その光景はきっと誰が見ても会社の先輩、後輩の仲だとは思わないだろう。ましてやこの料理が二人にとって初めてのデートだったとは。

潤一は壁に壁に掛けられた時計を見た。時間はもう十一時半に成ろうとしていた。それは本当にあっという間だった。さっきあったばかりだと言うのに、気が着けばそれはもう帰らなくてはいけない時間に成っていた。勿論潤一としてはこのまま帰らないでいる事は出来た。幸子も多分その事に反対はしないだろう。けれど潤一は、「もうこんな時間だ。そろそろ帰ろうか？」と言った。

何故ならそれは潤一が初めて女の子に感じた、この子を大切に思っていたいと言う気持ちだったから。

潤一は会計を済ませ幸子と一緒に店を出た。夜の街は相変わらず様々な人達でごったがえしていた。

肩を寄せ合う恋人達は勿論のこと、酔いの中でささやかな希望にしがみつくOL達や、千鳥足で背負わされた人生を重そうに歩く中年達。

そしてアコースティックギター片手に、何も無い明日を歌う若者達がそこには居た。

幸子は店を出てからずっと「食事代、少し出します」と言って、その小さな可愛らしい財布を開けていた。それもそのはず、食事代は二人合わせて二万六千円にも成っていたのだから。勿論幸子よりも多少多く給料を貰っていた潤一にとっても、それは決して安い食事代ではなかった。けれど潤一は今日は自分が誘ったのだし、今までのお礼をしたかったのでと言って、その好意を断った。それに今までがそうだったように、食事代は男が出すものだと思っていたから。

幸子もそこまで言われるとその言葉に甘えるしかない。「御馳走さまでした」と心地良いお辞儀をした。

潤一も「いいえ、どういたしまして」と、その心地良いお辞儀に答えた。

十一月にも成れば、その夜の寒さも冷たさに変わるものだった。そしてその冷たい夜風は二人の間や、二人の洋服の隙間をすり抜けて行く。だから二人はほんの少しだけ近づいた。洋服の肘と肘が軽く触れ合うくらいに。それはとても恋人同士とは呼べるものではなかったけれど、今の二人にとってはそれが全てだった。きっとそこに”好きなんだ””好きです”と言う言葉を重ねる事が出来たとしたなら、その二人の間には何一つ遮るものも無く二人は近づく事も出来たのかもしれない。けれど二人にとってそれが大切なモノであればあるほど、そんな言葉一つだって臆病に成ってしまうモノだった。

潤一は大通りでタクシーを止めて、送って行くよと言い、タクシーに乗り込みながら、幸子に家は何処か訪ねた。

幸子は簡単に家の近くの目印に成る、大きな公園の名前を運転手に言った。そしてタクシーは行き場所を確認しながら走り出した。

幸子のマンションは潤一のマンションの反対の方にあった。潤一のマンションが山手の丘の上にあるのに対して、幸子のマンションは野毛の山の上に建っていた。そしてその間にはランドマークタワーがある桜木町や、いつでもにぎやかな伊勢佐木町、そして二人が通う会社がある関内や、中華街、元町と言った横浜の顔があった。

要するに二人のマンションはそんな横浜と言う横浜を挟んだ、山越に建っていた。そしてタクシーは野毛山動物園を越えて、少し奥だった路地を抜け、見晴らしの良い彼女のマンションの前で止まった。

「いやあ随分高そうなマンションだね」と潤一は言った。

「いえ、そんなこと無いんですよ。割と駅から遠いのと、きつい坂がある事で、余り値段が高いと人が入らないみたいで」と幸子は少し慌てるように言った。

実際の所、それは事実だった。バブルの頃ならともかく、今は値段

が下がらないと誰も見向きもしないのが現状。それでも人が入ればいい方で、入らない所はいつまでも人が入らないまま、その建物だけがやけに巨大に寂しくそびえ建っている。要するにそういったバブルが生み出した産物と言うものがこの街には幾つもあった。

「そうなんだ。でも良いところだと思うよ」

と潤一は言った。実際潤一は本当に良いと感じていた。

「ええ良いところなんです。見晴らしも良いですし、日当たりも良いんです」

「そっか・・・」「そうなんです・・・」

そうなんです・・・。二人の会話はそこで終わってしまう。もう少し一緒に居たかった。もう少しお喋りをしていたかった。けれどそれを伝える言葉も見つからなかった。結局なにも言えないままに、「今日は本当に楽しかったです。どうもありがとうございました」と言う明日の約束すら出来ない言葉しか口にすることが出来なかった。潤一も何かを言おうとしたけれど、それを上手く言うことが出来ないままに「いえいえこちらこそ。それじゃまた」と言う言葉で終わらせた。けれど本当の別れ際に「あっちょっと待ってて貰えますか？」と、その何もない空間を遮ったのは、何か言いたいとずっと思っていた幸子の言葉だった。そして幸子は慌てる様にその少し豪華そうなマンションの入り口の中に消えて行った。それから三、四分位経って再びその入り口に戻ってきた幸子の手には、さっきまで持っていたハンドバッグの変わりに、ビニールの手提げ袋にきちんと包まれた、一つの可愛らしいクマのプーさんのイラストの付いた鉢植えがあった。

「あのこれカーネーションの鉢植えなんですけど、まだ花は咲いていないんですけど、もし良かったらと思って。上手く行けば今度の春には綺麗な花が咲くんです。あっても大変ですか？　そうですよね。花が咲いてからプレゼントするのが普通ですよ。ごめんなさい私ったら」

相当急いで持って来たのだろう。幸子は肩で息を切らしながら、その一つ一つをまとまりも無く一人でしゃべっていた。

けれどそんなまとまりの無い気持ちが今の潤一には一番伝わりやすい気持ちで、一番嬉しい気持ちでもあった。

「そんな事ないよ。ありがとう。大切に育てるよ」と潤一は微笑みながら答えた。そして二人は今度こそ本当のお別れを言った。けれどそれはさっきのぎこちないものとは違い、笑顔のおやすみだった。そしてそれはまた今度一緒に食事に行こうと言う、明日への約束を交わしての事でもあった。

幸子はタクシーのテールランプが見えなくなるまで見送った。そして潤一もそんな幸子の視線を、少し嬉しい気分ですらいつまでも背中に感じていた。それは一人、誰も居ない暗い部屋に帰って来ても続いてい

た。

潤一は部屋の暖房を入れるとすぐに幸子から貰ったその小さな鉢植えを、バルコニーの一番見晴らしの良いところに置いた。そしてそこからは横浜の夜景が見えた。パイブリッジもマリントワーもランドマークタワーも見えた。けれど潤一の目に映っていたのは、野毛の山の上に微かに見えるマンションだった。

マンションには幾つかの明かりが見えた。潤一には一体その中のどれが幸子の部屋のものかは分からなかったけれど、そんな事はどうでも良かった。そこには確かに幸子がいる、さっきまで見せていたあの頬を少し赤く染めて、楽しそうに微笑んでいた幸子が。それだけで潤一は暖かい気持ちに成れた。潤一にとってそんな気持ちは本当に久しぶりの事だった。あんなに美味しいと感じた食事や、あんなに別れ際に淋しいと感じた気持ち、そしてこの何とも言えない開放感。何だかそんな何処にでもあるものが、今まで自分には無かった様に感じていた。それは本当に無かったと言うよりも忘れていただけだったのかもしれない。けれどそれは確実に潤一の心の中で今、花を開いた。一輪のわすれな草と、そう一人の神崎幸子と言う女性によって。

そして次の日からの潤一の生活は変わりだした。まず変わったことは朝と晩にバルコニーに出て、幸子から貰ったその可愛い鉢植えに水をやりながら、遠くの高台の上に微かに見えるマンションを眺める事だった。それは時には朝霧や雨で良く見えない事もあったが、天気の良い日にはくっきりと見える事もあった。さすがに二十五にも成ってマンションに向かっておはようとか、おやすみと言う類の言葉を言う事は無かったが、言いたい気持ちはあった。現に一回だけ言った事があったが、やはり恥ずかしくなりそれっきりでやめてしまった。勿論仕事もバリバリやった。元々仕事は出来る方だったが、その能力をフルに使いだした。同僚の仕事にも助言を言うように成ったし、苦手だった企画部とも積極的に意見の交換もした。とにかく職場で一番変わった事は笑顔の数が増えた事。それははたから見ても明らかに分かるものだった。課長の斉藤はそんな潤一を見て「おっ岸崎。この頃随分張り切っているな。さては彼女でも出来たな」と冷やかし半分で言った。同僚達も色々な良いアドバイスを受けたり、気さくに笑う潤一に初めは戸惑っていたが、二、三日もするとそんな潤一にも段々成れて、元々あった潤一に対する信頼度もさらに向上した。

そんな中、笑顔の数が増えた潤一を一番嬉しく感じたのは、やはり幸子だった。

あの二人だけの食事の前の潤一は、何となくいつもイライラしているようだった。そしてそれ以上に疲れていると言う感じがしていた。

それは潤一の事をいつも気にしていた幸子が一番分かっていた。その頃は何とかしてあげたいと思っても、ただ遠くで見守る事だけで何もしてあげられなかった。勿論今だって何でも器用にこなす潤一に対して、不器用で何一つ上手くこなせない自分が、手助けなんて出来とは思ってはいない。けれどあの食事の時から言葉だけは交わせる様に成った。話を聞いてあげる事だけは出来る様に成れた。自分は余り人を楽しませるのが下手だから、面白い話しは言ってあげられないかもしれない。けれど何か愚痴が言いたそうな時は「どうしたんですか？何か愚痴が言いたいんですしたら、私に言って下さい」と言えそうな気がした。実際にはそれは言えないのかもしれない。けれどあの日を境にそれは言えそうな気持ちに変わった。そして実際、あの日を境に潤一との会話は多くなった。それは食事のお礼から始まり、幸子がプレゼントしたカーネーションの事やお互いの趣味の事まで、色々な話が出来るようになった。勿論忙しい時期、忙しい二人にとって、社内で二人っきりでゆっくり話す機会はなかなか無かったが、それでも潤一は潤一なりに、幸子は幸子なりに休み時間などを削って話をした。そしてこの狭いオフィスでは、そんな二人が特別な関係じゃないかって言う噂はすぐにでも流れる。そして直接幸子に聞く同僚もいた。

「ねえ、ねえ、幸子。ひょっとしてあんた岸崎さんと付き合っているの？」

勿論そんな事を言われても幸子には、そんなこと無いよ。と言うしかない。実際付き合っていたわけでも無かったし、自分だけが特別だと言う気持ちも潤一が相手では、余りにも自分がずうずうしく思えてしまう。勿論最近の潤一を見ていて、もしかしたらと言う気持ちが全く無かった訳ではない。けれどそれがもし自分だけの勘違いだとしたら、潤一に多大な迷惑を掛けてしまう事になる、それだけは避けたかった。

正直言ってあの食事があるまでは余りそう言う事を意識したことは無かった。実際花にしても自分と潤一の所だけお揃いの花があれば誰だって、おやと思うはずだった。けれど幸子にとっての潤一は幾ら背伸びをしても手の届かない憧れの先輩であり、頼りになる先輩だった。当然そこには対等なんてものは何も無く、こんな噂なんて想像も出来なかった。だからこそそんな事は余り考えずに感謝の気持ちを純粹に表す事が出来た。けれど第三者の口からそんな事を聞かされるとその無防備な気持ちは変わってしまう。自分だけがどうこうなるのなら構わない、けれど潤一に根の葉の無い噂が立つのは避けたかった。何故ならこの手の企業体では、その手の噂がこの先のサラリーマン生命に悪影響を及ぼす事があるからだった。

実際幸子と潤一の営業部の佐々木部長も、その手の噂が原因で今の

ポスト止まりで終わってしまったらしかった。ある人は上司の愛人に手を出したのがどうやら原因じゃないかと言う者も居れば、たまたま社内の会議室か何処かで、その行為をしている所を見られてしまったんじゃないかと言う者も居る。結局の所それはあくまでも噂であって、その正確な真相は誰一人知っているものは居なかった。けれど社内恋愛に対して必要以上に詮索する佐々木を見ていると、どうやらその噂もあながち嘘とも思えない気もする。それにそれが仮に噂だったとしても、企業において社内恋愛の噂が良い方向に転んだためしは無く、いつだって悪い方向に転ぶものだった。

だからこそ幸子はそんな噂を耳にしてから出来るだけ迷惑を掛けない為にも、潤一に自分から話掛けるの控えるようにした。勿論話したい事は山ほどあったし、聞きたい事も山ほどあった。上を見ればきりが無い。けれどそれが原因で潤一に迷惑は掛けられないし、そして何より今の関係が壊れてしまうような事だけは成りたくなかった。

けれどそれに比べて潤一はあの日を境に、まるで今まで感じる事の無かった感情を取り返すかの様に幸子に接していた。潤一にとって自分の立場と言う物は確かに保つべき物だった。けれどそれは自分が自分らしくあって初めて意味を持つ物の様な気が最近し始めていた。ちょっと前までは上があるのなら上に行くのが当たり前様な気がしていた。そしてその為ならば自分らしくなんて物は無くてもいいし、その為に人を犠牲にする事なんて当たり前様にさえ思っていた。けれど幸子と言う一人の女性と出会ってから、そんな気持ちは変わって行った。

潤一から見て幸子は本当に必死と言うか、今という時をとてとても大切に生きている様に見えた。純粹に人を信じて、誰か困っている人が居れば何とかしてあげようとし、それでいて見返りを求めるわけでもなく、嬉しい時は笑い、悲しい時は悲しむと言う、誰もが当たりの事だと思っていることを当たり前にする幸子が特別に見えた。

それに比べて自分の今までの人生は一体何だったんだろうと思えた。確かに過去にいろんな事があった。けれどだからと言って自分をごまかして一体何の意味があると言うのだろう、確かに上を目指してはいた。けれど自分が目指していた上と言う場所には一体何があったと言うのか。こんな曖昧な気持ちで仮にその場所に辿り着いたとしても、きっと今と何も変わる事の無い場所があるだけなんじゃないかと思えた。こんなスカした自分での限り。だから潤一は本当の自分らしさを取り戻そうとした。人になんて思われても構わない、たとえそれが情けないような事だとしても。悲しい時は人目も気にせず泣けばいいし、嬉しい時は笑えばいい。話したい時は話せばいい。そん

な誰もが当たり前にする事を当たり前にする、それが自分なのだし、それが今自分が出来る全てなのだから。だから潤一はあの幸子との食事以来、まるで人が変わったかのように社交的に成った。そして潤一にとってそれは本当に久しぶりに体験した、人の輪の中に自分もいるんだという気持ちだった。そしてそんな社交的に成った潤一を殆どの人は歓迎をした。

「岸崎さん、最近話し易くなったよな」

「そうそう、なんだか人が変わったみたいに」

「でもやっぱ、ああいう姿見ると俺達も仕事ががんばらないって気に成るよな」

「成る成る、俺なんか全然数字がたって無かったから今度の決算マジでやばかったけど、この前いいアドバイスして貰ったから何とか成りそうだし」

「ホント岸崎さん様様って感じだよ」

「ホント、ホント」

社内ではこんな会話まで飛び出す程だった。けれど少数ではあったが、そんな社交的に成った潤一を暖かく迎え入れない者も居た。

潤一はここ最近の疲れた体を癒すかの様に、スーツも脱がずにソファに深く腰を掛けていた。手に持ったビールはすでに炭酸が抜けていて、泡と泡が繰り出す音は、その沈黙の中に消えて無くなりそうに成っていた。窓の外は今にも雪に変わりそうな冷たい雨が、当てもなくシトシトと降り続いていた。潤一は手に持ったその泡の抜けたビールを一気に飲み干して、大きな溜息を付いた。けれどその溜息や今この体に残る疲れは、三週間前に一人っきりのオフィスで付いた溜息や疲れとは明らかに違うものだった。

全ては順調だった。仕事の面でも前から自分が暖めていた企画も通りそうで、納得の行く仕事が出来そうな兆しも見えていたし、決断を渋っていた大口の契約も、幾つか競合他社を振り切って年内に決める事も出来た。そして問題の幸子との関係も、あの日以来仕事が忙しくて食事には行けなかったが、決して悪い関係では無かった。だからそれはどちらかと言うと疲れと言うよりも、むしろ充実感だったのかもしれない。勿論細かい事を言えば色々あったが、そんな事は今までの結果すら出して来たものの、何一つ充実したものが無かった日々には比べればものの数では無かった。何もかもが自分の描いたものに近づいていたし、それにそんな何かを自分で描くと言う事に潤一は喜びすらあった。しかしそれが上手く行けば行く程、何故か何かわだかまりの様なモノも感じていた。そしてその理由は潤一が一番わかってた。

それは形はどうであれ肉体関係を持ち続けていた彩子と香織に対す

るモノだった。一体このままでいいのだろうか？ 潤一は冷蔵庫から冷えたビールをもう一本取り出して封を開けながら考えてみた。

確かに彩子と香織とは肉体関係があった。けれどその関係は世間で言う彼氏とか彼女と言ったものでは無く、どちらかと言うとお互いの恋愛には干渉しないと言う間柄の様なものだと思えた。だからと言ってこのまま何も無く新しい第一歩が踏み出せるとは思えない気もした。

思い起こせば自分の今までの恋愛の形は一体どうだったんだろう。果たして始まりと終わりのハッキリした恋愛をした事があったのだろうか？ けれど幾ら思い出そうとしても思い出せなかった。高校、大学、就職とその度に女も変わっていった。けれどそのどれ一つとっても告白した覚えも無ければ、さよならを言った覚えも無い。今思えばそれは凄く失礼な事だった様な気がするが、その頃はそれが当たり前のようにしか感じられなかった。自分が求める女も、自分を求める女も、そんな付き合い方を求めているんじゃないかと。そしてそれで何一つ問題も無かった。勿論全てが本当に何も言わずに消えて行ったかと言うとそれは嘘になった。留守電に一言さようならとメッセージが入っていた事もあれば、食事に誘ったらあっさり今度結婚するからもう電話しないでって言われた事もあった。けれどそれはやはりみんなが言うような恋愛の別れと呼べるものでは無くて、ただの区切りとしてしか考えていなかった。

ならば今回も彩子や香織に何事も無かったかの様に、さよならを言えばいいのだろうかと思潤一は思った。しかし今までがそうだったからと言って今回も後腐れ無く終われる保証なんて何処にも無かった。もしかすると今回に限ってだけ話がこじれるような事だってあるかもしれない。そしてもし仮にそんな事に成ったのなら、きっと本当の意味で自分の描いたものは上手く行くはずもない。そう考えると何だか今の気持ちに純粋に喜んででもいられなくなった。

今頃幸子は一体何をしているのだろうか？ 潤一はそう思って時計を見た。時計はすでに真夜中の2時を過ぎていた。寝ているのだろうか？ 普通に考えればそれが当然の事だった。潤一は幸子の寝顔の事をほんの少し考えてみた。あのまだあどけなさが残った可愛らしい寝顔で夢でも見ているのだろうか？ それともこの前好きだと言っていたローマの休日のビデオでも見ているのだろうか？ 考えても答えは見つからなかった。潤一はバルコニーに出て遥か遠くに感じる幸子のマンションの明かりに目をやった。やはりその明かりのどれが一体幸子の部屋の明かりかは分からなかったが、今は前に見た時よりもぼやけて見えた。そしてそれはやはり自分でも感じている様に、後ろめたさから来るものだった。とにかくやらなければならない事がある。もう暦も十二月に成っていた。このまま年を越す訳にはいかない。潤一は明日

にでも早速、彩子と香織にきちっとした意志表示をしようと心に決め、残りのビールを一気に飲み干した。

その頃幸子もやはり潤一と同じように、遠くの夜景を窓越しに見ていた。けれど幸子にはその目に映る明かりの一つが潤一のマンションだとは思ってもいなかった。ましてやその窓越しに潤一が自分のマンションを見ていたとは。そして幸子の頭の中には潤一と同じように何とも言えないわだかまりがあった。

幸子は潤一と違って清算しなければいけない人間関係は無かった。けれどやはりこのまま何もなく、あるがままを受け入れられない理由もあった。それは田舎の両親の事だった。

母はともかく父は跡取りの事を考えているみたいだった。この間あった母からの電話でもそれは明らかだった。

「一体いつになったら帰って来るんだい。母さんは東京育ちだったから、あなたの気持ちも何となく分かる気がするんだけど、お父さんはほら農家の出身だろ。だからお前の気持ちが理解できないみたいでねえ。いつもいつもお前のこと気にしてるんだよ。だからお前の気持ちも分かるんだが、何とか今している仕事にけりを付けて跡取りでも探してはくれないかね？。もうお父さんも若くはないし、それに持病のリウマチがまたいつ悪くなるかも分からないだろ。だからお前に戻る気があるのなら、何とか早く戻って来てはくれないかい」

親にそう言われてしまうと一人娘だった幸子は何も答えられなかった。母が幸子の気持ちを分かっていたように、幸子も両親の気持ちが痛い程わかっていて。目を閉じれば両親の優しい笑顔が思い浮かんでくる。時々怒る事もあったが、いろいろな縫いぐるみを買ってくれたり、いろいろな所に連れて行ってくれた父。そしていつも父に怒られた時は慰めてくれたり、いつでも自分の味方でいてくれた母。何よりも大切に想っていたかった。だからこそそんな母の言葉をむげには出来ない。けれど今の幸子にはそれに答えてあげる言葉が見つからなかった。

もしかすると一月前、あの潤一との楽しかった食事をする前だったら、それは答えをきちんと母に言えたのかもしれない。確かに何人かの友達には会いづらくなるかもしれないが、きっと分かってくれたはずだし、会社だってやっと仕事が出来ようになった人間が辞めてしまうのはマイナスなはずだが、補充は幾らでもいた。辞める前の日までは色々あるかもしれないが、辞めてしまえば次の日から何事も無かった様に、いつもと変わらない一日が始まるものだった。だからきっと一月前にその電話をもらっていたとしたなら、幸子はきっとそんな母の気持ちに答えていたのかもしれない。でもその電話を受け

たのは一ヶ月前では無く、潤一との遠かった距離が限りなく近くに感じてしまった後の事だった。

幸子は「ごめんね、今すぐには答えられないけどお父さんとお母さんの事は考えていない訳じゃ無いから、だからなるべく早くどんな形にしろきちんと答えを出すから、お父さんにあんまり無理はしないでって伝えておいてね、それにお母さんもあんまり無理しないでね。じゃあまたこっちから電話するから、お休み」と言って一方的に電話を切った。そしてその電話の余韻は三日経った今でも残っていた。

電話ではどんな形にせよ答えを出すからとは言ったものの、実際の所はその答えの出し方なんて見当もつかなかった。勿論潤一にこの事を相談する訳にはいかない。仮に相談出来たとしても一体なんと説明すればいいのか、田舎の両親がどうしても跡取りが必要だから、帰って来いと言うんです。私は一体どうしたらいいのでしょうか？ とでも言えばいいのか。けれどそんな事を言えばきっと対外の男は困ってしまうはず。それはきっと潤一とて同じ事。だったら尚更言えるはずはない。だから自分だけで答えを出さなければ成らなかった。しかしそれは考えれば考えるほど答えのない袋小路に迷い込んでしまう。そしてそれは考えれば考えるほど、潤一と言う存在抜きでは答えが見つからないモノだった。

幸子は壁に掛けられた少し大きめなピーターラビットの壁掛け時計に目をやった。時計の針は二時半を回った所だった。幸子は溜め息をついてもうこんな時間かと思った。本当にここ三日間は時間が経つのが早く感じられた。けれどそれは楽しいときに感じる早さとは明らかに違うものだった。幸子は潤一の事を考えてみた。けれど自分が思った様な潤一が描けなかった。それは仕方ない事だろう、この三日間は本当に考える事が多かったのだから。けれどそれは今日で終わりと言うものではなくて、もしかするとこれから永遠に考えなければならない事なのかもしれない。しかし今はこれ以上考えてもきりが無い、幸子は明日の事もあり、今夜は眠ることにした。眠りに落ちる前にふっと潤一の事を考えてみた。けれどそれはやがてたまった疲労と共に深い眠りの中に落ちて行った。潤一が丁度同じ時に自分の事を考えていたとは知らないままに。そして次の日から、そんな二人にとてつもなく慌ただしい日々が待っていた。

翌日の十二月一日は朝から二人にとって慌ただしい幕開けとなった。今朝になって急に輸入元のイタリアの家具屋（フォルナセッティ社）から納期の遅れのFAXが届いていたのが事の発端だった。そしてそれによって今朝から第一課では緊急会議が始まっていた。

「とにかくだ。今この時期に納期が遅れればどう言う事になるか言わ

なくても分かるな。とにかく輸入先に問い合わせをしているが、向こうは夜中と言うこともあってなかなか連絡が取れない。取れ次第また会議を開くが、事によっては誰かイタリアに飛んでもらうかもしれないが、その時は頼んだ。それと吉田と野島は茨城の倉庫に在庫の確認を大至急取ってくれ、もし電話でちががあかないようだったら、直接行って来てくれ。他のみんなは十二月二十日までに納期指定されている顧客に連絡を取ってくれ。それと岸崎は俺とここに残って輸入元と連絡を取るのを手伝ってくれ。分かったか。それじゃみんな急に大変な事に成ったがよろしく頼むぞ！！」

「はい！」

みんな課長の号令と共に自分の仕事に就いた。しかしもしこれが本当の事だとしたら、大変な事になると潤一は思った。特にこの時期は何処の業者も、年明けのイベントの為に家具やインテリアを注文していた事もあり、もしそれまでに納品が出来ないなんて事態に成ったら返品や発注取り消しどころの騒ぎだけでなく、損害賠償まで発展する恐れもあった。

潤一は課長と何度もイタリアの輸入元に電話を入れたが、まったく応答が無かった。

「やっぱり向こうは夜中だから連絡取れないですね」

潤一は受話器を置いて課長に言った。

「そうか、まあ連絡は直に取れるだろう。しかし取れたからと言って、向こうがそう簡単にこっちの要望に応じてくれるかが問題だな」

「まあそうですね。たぶんどうせアメリカ辺りの業者が大量に発注が何か掛けてきたのが原因だと思いますが」

「まあ向こうとしては日本の市場なんてアメリカに比べれば大した事ないからな」

「ええ、けれど寄りによってこんな時期に重ならなくても」

「まあな。しかしそうは言っても、うちとしてもこの時期に納期が遅れる訳にはいかないからな」

課長の言う通り遅れる訳にはいかなかった。

「ところで今回の件は、営業部単位では動かないのですか？」

潤一は周りを見渡して言った。確かに潤一の言う通り、この件で慌ただしく動いているのは第一課だけだった。他の二課、三課は何事も無かった様に日常の業務をこなしていたし、営業部の部長の佐々木に至っては、のんきにお茶なんかをすすっていた。

「まあいつもの事だよ。これは第一課の問題だ。輸出入に問題があるのならともかく、イタリアの家具屋の問題は第一課だけで解決しろって事だよ」

「そう言う事ですか。でもあれですよ。売り上げを上げればにこに

こするのに、問題が起こればこんな扱いですか？　そもそもこの営業部だって第一課で成り立っているようなものなのに」

潤一は皮肉をたっぷり込めて部長に聞こえる様に少し大きな声で言った。けれどそれは確かな事だった。第一課で成り立っていると言うのは大げさかもしれないが、営業部全体の売り上げと人数は7割近くが第一課だった。なのにこう言う時だけは課ごとに責任を取らせるのが当たり前になっていた。

「まあまあそう言うな。しかたないさ。他は他でそれなりに忙しいんだから」と課長の斉藤は潤一をなだめるように言った。

「それより最悪の時は岸崎、お前に行ってもらうことに成るかもしれないがいいか？」

「ええその時は。二年前に仕事で一回行ってますから場所も分かってますし、向こうのオーナーとも一回会っていますから」

潤一は二年前に視察で行ったイタリアを思い出してみた。

ミラノ、ローマ、ナポリ、素敵な町は沢山あった。実際は仕事で行ったので余りゆっくり見ることは出来なかったが、その所々の印象は今でも残っていた。その中でもローマは特に印象深かった。

ミケランジェロのフレスコ画が壁面を覆うシスティーナ礼拝堂や、ルネッサンス絵画が充実した絵画館のあるヴァチカン美術館を始め、海神ネプチューンの像があるトレヴィの泉、そしてそこから少し小高いクイレーナの丘を眺めると、クイレーナ宮がまさに天空の城の様に優雅にそびえ建っている。そして忘れてはいけないのがなんと言ってもローマの休日でもお馴染みのスペイン広場だろう。素朴な作りのバルカッチャの噴水が奏でる愛らしい水音に身を委ね、百三十七段のスペイン階段にたたずむと、何とも言えない気持ちに成ったものだった。出来る事なら幸子とゆっくりイタリアを旅行でも出来たらいいのだろうと潤一は思った。きっとローマの休日が好きで純粋な彼女なら、オードリー・ヘップバンの様にこの町に溶け込めるはずだと思えて仕方が無かった。潤一はふっと幸子の方を見た。

けれど現実の幸子はローマの町にではなく、この混沌としたオフィスの中で、形振りかまわずに問い合わせの電話に対応していた。潤一としてもそんな一生懸命頑張っている幸子を見るとこの問題を何とか解決したいと思える。そしてこのあくせくとした日常からほんの少しでもいい。幸子を何処か静かな場所に連れ出してあげたく成った。

「課長。もし仮に僕が行く事に成ったら、誰か一人一緒に連れていっても構わないでしょうか？」

潤一は課長の方に振り返って言った。

「ああ勿論構わない。本当は俺と一緒に連れてあげたいが、俺はここに残って色々指示しなきゃ成らないから一緒には行けそうにも無いか

らな。他に一体誰がいいかな？」

「まあその事は僕が考えておきます。だから僕に任せておいてください。それより先に何とか相手先に連絡取りましょう」

そう言って潤一は電話をかけ始めた。そして課長の斉藤も、まあ潤一に任せておけば安心出来ると言う事もあり、全てを任せることにした。

結局向こう側と連絡取れたのは、日も傾きかけた夕方の四時過ぎだった。

その後茨城倉庫に行った吉田と野島が戻り次第、会議室で緊急会議が開かれた。

「吉田、野島、本当に茨城までご苦労だったな」

斉藤は慌てて戻って来た二人に言った。

「いや本当参っちゃいましたよ。なんせ在庫の数だけでも結構あるじゃないですか。それも名前と家具がはっきりしなかったので、だから一応イタリア製の家具だけ全てピックアップしてきました。えっとこれがリストと、それとデジカメで写真も撮っておきましたのでこれも」

そう言って吉田は斉藤にリストとデジカメを渡した。

「いやこれだけやって来てくれれば充分、充分。まあお疲れの所申し分けないが早速会議を始めよう。あっ神崎君。これを至急コピーしてみんなに配ってくれないか」

「はい」

「じゃあだいぶ遅く成ってしまったが、会議を始める。まず始めに報告する事は、相手先の連絡の件だな。じゃあ岸崎報告を頼む」

「はい。それじゃ報告します。ええ一応、相手先のフォルナセッティ社とは連絡は取れましたが案の定、曖昧な返事とオーナー不在と言う理由で状況がはっきりしないと言うのが現状でした。それと一応うちのフランス支店にも連絡を取ったのですが、やはり輸出入の件ならともかく、納期遅れの事と成るとなかなか動きが取れないとの事でした。一応今後も連絡を取って交渉する覚悟ですが、電話だけで話がまとまらない事だと、最終的にはイタリアまで行ってでも交渉する事はやむ得ないかと思えます。一応今の段階ではまだ何とも言えませんが」

確かにそれ以外言いようが無かった。

「まあ今岸崎が言った事が大体の現状だ。ただまだハッキリしたわけでは無いので、もう少し電話交渉してどうするかを決めたいと思う。じゃあ次は吉田と野島に報告してもらおう」

「はい。それじゃ報告します。神崎さん、そのコピーした資料をみんなに配ってもらえますか。ええ今神崎さんが配っているのが茨城倉庫に在ったイタリア製の家具とインテリアのリストです。物は多少傷ん

でいる物も在りましたが殆ど大丈夫でした。とりあえずリストの横に印がある物が傷んでいた物です」・・・・・・・・

その後各自の報告と在庫の確認の上で代替品に代えられる物と、どうしても間に合わせなくては成らない物のリストが作られ、そして全ての作業が終わった時には十二時近くにまで成っていた。

「いやあやっと終わりましたね。課長」

潤一はみんなでまとめ挙げたリストをプリントアウトしながら言った。

「ああ何とかリストだけは出来たな。いやあみんなご苦労だった。後はこれを俺と岸崎で相手方に交渉するだけだな。後は俺たちに任せてみんなは今日の所はもう帰っていいぞ。電車の無い者はタクシー券を神崎に言って貰ってくれ。本当に今日はご苦労だった」

斉藤はそう言って潤一と早速相手方と交渉に入った。しかしそれはやはり想像以上に難解だった。まず相手との交渉はその殆どが英語で行われるのだが、こちらの英語が悪いのか相手の英語が悪いのかノイズの入った国際電話では思うように会話が成り立たない。斉藤も潤一も英検一級と言う肩書きを持ってはいたが、このような場面に出くわすと必ずと言って感じるのは、全く日本の言う肩書きや資格と言うものは意味を持たないと言う事だった。直接会って話をするのならともかく、ただでさえ聞き取りにくい国際電話ではそれは尚更聞き取りにくい。それに加えて相手の片言の英語と、イタリア語の混じった言葉では余計に会話が成り立ち難いものだった。

斉藤と潤一が四苦八苦しているとそこに幸子が現れた。

「あの一応みんなにタクシー券を配りましたが、あと他に何かやることはありませんか？」

「あっ神崎君か。いやご苦労だったね。それじゃ君ももう遅いから今日の所は帰っていいよ」

「でも二人だけじゃ大変そうだし、私は家が近いからもう少し手伝っても大丈夫なんです」

斉藤も本音を言えば色々手伝って貰いたい事はあった。

「そうか、そうだなそれじゃ何を手伝って貰おうかな」

斉藤と幸子はオフィスを見渡してみた。机の数は全部で十八あった。そして電話もそれに付随して同じ数だけあった。しかしまだ幾つかのメモを残した幸子の机、それと幾つもの書類が散乱している課長の机、そして必死にWHY? を繰り返し交渉を続けている潤一の机以外は、まるで油ぎれでピクリとも動かない機械の様に静まりかえっている。そしてその中でも一番窓側の中央に、まるで意味の持たないオブジェの様に場所だけを有しているのが、佐々木部長の机だった。

幸子は資料が散乱している課長の机の上に目をやった。そこには幾

つかの会議資料と、幾つかの報告書があった。そしてその横には相手先に送る資料をイタリア語に換える為に使うのだろう。イタリア語の辞書が置いてあった。

そうやって見渡してみると差し当たって、これだと言うものが無いような気がした。けれどよく見てみると幾つかの単語がイタリア語に書き換えられている資料がある。それはついさっきまとめ上げられたリストだった。幸子はそれに飛びつく様に言った。

「あっ課長。さっき作り上げたリストをイタリア語に直すんですね」

「ああ、向こうにFAXするためにイタリア語に直していたんだが、なかなか分からない単語があつてな」

「それ私にやらせてもらえませんか？ 私一応大学でイタリア語を専攻していたので、多分出来ると思うのですが」

「えっ君はイタリア語を専攻していたのか。なんだそれなそれと早く言ってくれよ。あっそうだ岸崎の所で一緒に交渉に当たってくれないか。なんせ相手は片言の英語とイタリア語が混じっているから聞き取り難くて」

斉藤は潤一の方を向きながら「なあ岸崎。神崎君イタリア語が出来るといふんだ。代わって貰うか？」と言った。そして潤一は肩と顎に受話器を挟み、片手で頼むと言う合図を二人に送った。

幸子に代わってからは会話はスムーズに成った。しかしそれ以上にやはり交渉の方は手こずった。結局幸子の協力の元に相手に送るリストを制作しFAXした時には、日本時間で午前三時を過ぎた頃だった。

「もう今日はこれ以上交渉しても無理だな」

そう言ったのは斉藤だった。

確かにこれ以上この状態で交渉しても無理だと言うことは、一緒に交渉に当たった、潤一と幸子もよく分かっていた。

「ええそうですね。まあ後は今日送ったFAXの返答が明日どう返って来るかって所だと思います」

「本当そうですね。いい返事が返って来るといいんですけどね」

まあ今日の交渉の内容から考えれば、いい返事が返って来る確率は五分も無いような気がした。しかしそれはやるだけの事はやった三人の中ではきっと誰一人言葉に出来ない言葉だった。

「まあ、何はともあれ結果は明日だよ明日。今日の所は早く帰ってって時間じゃないけど、もう帰って寝よう。そして明日結果が出てから考えよう。それでいいな」

「ええ僕は構いません。実際の所それしか無いみたいですし」

「じゃあ今日は終わりって事で。それより岸崎、もし仮に明日の結果が余り芳しく無かった場合、お前が現地に行って交渉する事に成るが、その勝算はあるのか？」

それは実際の所、一番の問題点だった。斉藤にしてみれば最後の切り札が残っているかないかでは大きな違いがあった。しかし潤一はそんな斉藤の心配を取り除く様に言った。

「まあ、実際は行ってみなくては何とも言えないですが、一応それなりに考えてはあります。勿論勝算もあります。だからそれはとりあえず僕に任せて置いてください」

「いやあそれを聞いて安心した。まあ駄目だと言われてもお前に頼るしか手だてが無いけどな。とりあえずでも今日の所はそれを聞いて何とか眠れそうだな。まあお前達も今日の所はゆっくりともいかないけど休んでくれ。また明日もあることだし」

そう言って斉藤は帰り支度を始めた。それに続く様に潤一と幸子も帰り支度を始め、それが全て終わって入り口のドアを閉める時に潤一は斉藤に尋ねた。

「ところで課長。もし仮に行くことに成ったとしたら一体いつ出発する事に成るんですかね」

斉藤は入り口のドアをロックしながら潤一の問いに答えた。

「ああそうだな。とりあえず明日の返答次第だけど、行くなら早い方がいいだろうな。まあ明日の明後日だろ、そうだな明々後日ってところだろ。そうだ一応明日にでも旅行会社に手配をかけておくか。もし行かなく成ったらキャンセルすればいいことだしな。じゃあ早速手配をかけさせておくよ。でもそうだ、ところでもう一人連れて行きたいって言っていたがそれは誰かもう決めたのか？ 吉田でも近藤でも坂口でもいいぞ。まあうちの独身男性なら急な出張でも多分大丈夫だろうしな」

そう言って斉藤はロックの最後のボタンを押した。扉の鍵はウィーンガチャンと電子的な音をあげ閉ざされた。そしてドアの横のロック確認ランプが赤く点灯した。そうなるとガラス張りに見える部屋の中のオフィスは、もうさっきまでの目まぐるしく動き回っていたものとは違い。まるで静かなる暗い夜の海の底に沈んだタイタニック号の様に、その全ての機能は停止され静けさだけが広がっていた。

「課長。その件何ですが」

潤一の声はその間に広がる静寂の中ではドキッとする程に響いた。

「ん、どうした。決まったのか」

「いえ、決まったと言うより今思いついたのですが、ただ本人の意見も聞かなければ成りませんし」

「なんだそんな事なら大丈夫だ。俺が明日にでも確認を至急取ってやるから。まあ会社命令だから多少は強引に成ってしまうかもしれないがな」

「いえそれは明日じゃなくて、今この場で確認は取れると思うんです

が」

「えっ今？」

潤一の突然のその発言。斉藤には一体どう言うことなのか理解が出来なかった。今この場でと言われてもここにいるのは自分と岸崎と、今エレベーターの前でエレベーターのスイッチを押そうとしている神崎という女性社員だけだった。自分は今日行けないと言ったはずだった。実際スケジュールの問題は無かったが、自分と岸崎が一緒に行動した場合はこっちの指示をするものが居なくなると言うこともあり、どう考えても賢明な処置とは思えない。では他に誰が。まさか夜中の3時を回ったこの時間に誰かに連絡を取るつもりなのだろうか？ しかしそれならば今この場じゃなくて明日早くにでもいいことだろう。そう考えれば尚更潤一の言っている意味が分からなくなった。

「なあ岸崎。俺にはいまいち分からないんだが、今この場でって一体どう言うことなんだ。まさかこんな夜中に誰かに連絡をとれって言うことなのか」

「いえまさかこんな夜中に誰かに連絡を取ってくれなんて言って無いですよ。僕が言っているのは、この場で確認が取れるって言っているんです」

「おいおい、俺は言ったはずだぞ。俺とお前と一緒にイタリアに行くのは賢明じゃ無いんじゃないかって」

「ええそれは僕だってそう思っていますよ。だから課長は僕の居ない間はこの場の指示をお願いします」

斉藤はますます分からなく成り始めていた。

「するとどう言うことなのかな。今この場に居るのは俺とお前と神崎だけなんだぞ。それで俺じゃ無いって事は、神崎しか残らないじゃないか」

「そうですね」

「そうですねって、お前まさか」

「そうです。今さっき思いついたんですが神崎さんに頼めないかと思っ

て」
さすがにその潤一の答えに斉藤も驚いた。しかしもっと驚いたのは何を隠そうエレベーターの前で今開かれようとしているドアを見つめていた幸子本人だった。

「まあ急に思いついたんで課長もびっくりされたでしょうが、よく考えると結構いい案なんです。まずイタリアという国は、まあイタリアに限った事では無いですが、女性を立てるお国柄なんです。だから野郎ばかりで交渉に行くよりも女性を連れて行った方がきっと交渉はスムーズに行くと思うんです。それに彼女はイタリア語が話せると来たら、それは尚更交渉には欠かせないんじゃないかと思ひまして」

確かに潤一の言うことに間違いは無かった。ただそれは斉藤にとって考えてもいなかった事だけに、すぐに返事が出来ない事でもあった。「まあ確かにそれはそうだが、本人にも聞いてみない事には何ともなあ」

そう言って斉藤は幸子の方を見た。幸子としても斉藤同様考えても見なかった事を急に言われて正直言って理解が出来てはいなかった。「ええと、私はなんて言っているのか。いや本当急にな事なんでどうしたらいいのか」

しかし潤一の「本当急に言われてビックリしているとは思うかもしれないが、もし差し障り無ければ引き受けて欲しいんだ」と言う言葉にただ頷くしかなかった。

「ええ私でしたら大丈夫ですけど、ただ本当急な事なんで」

潤一はそんな驚いている二人とは違い、冷静に事を進めて行った。「ねえ課長。本人もOKと言っているのだから何とかやらせてもらえないでしょうか？」

そこまで言われると斉藤としても、もう何も言えなかった。確かに急な事だけに驚いてはいたが、冷静に考えれば何一つ問題は無かった。男性社員と女性社員が二人だけで出張に行くことも、過去を見れば決して無かった事では無かったし、内勤の女の子を使うと言う点も今回の重要性和必要性の点でも致し方無いことでもあった。

「まあ本人もいいと言う事ならいいだろう。まあ内勤の問題も俺が内勤を手伝えれば済むことだしな。神崎君」

「はい何でしょうか」

「まあそういう事に成ったが、一つ頼むよ」

「はい頑張ります」

幸子もさっきまでの驚きは無くなっていた。冷静に考えれば何一つ悩む事なんて無く、それどころかそこには自分が望んでいたものがあつた。

まず昔から一度でいいから言ってみたかったイタリアに事情はどうであれ行けると言うこと。そしてなんとそれが憧れだった潤一と一緒にということならそれは尚更のことだった。けれど今の幸子にとって一番の喜びは、憧れの潤一の手伝いが出来ると言うことだった。それはだいぶ前から望んでいた事だった。少しでもいい、何か自分の出来る事で潤一の力に成れる事は無いかと。けれど今までは手伝いどころか、足手まといにしか成っていないんじゃないかと思うことしか無かった。けれど今は違う、明らかに潤一は自分を必要としてくれていた。そう思うと何とかこの出張を成功させたいと言う気持ちが沸いてくるものだった。

タクシー乗り場ではタクシー待ちの人達が、いつ来るか分からないタクシーを当てもなく待ち続けていた。課長は家が遠いと言うこともあり、近くのビジネスホテルに泊まると言うことで会社を出てすぐに別れた。潤一と幸子はいつ来るか分からないタクシー乗り場で、当てもなく待ち続けている人の後ろに、やはり当てもなく並んでいた。

「いえ、でもビックリしましたよ。岸崎さんが急に私の名前を口にした時は」

そう切り出したのは幸子の方だった。

「迷惑だった？ 急にそんな事言われて」

「いえ迷惑だなんてそんなこと。たださっきは急に言われてよく考えずに、いいですよなんて言ってしまったんですが、本当に私なんかで大丈夫なんですかね」

幸子のその言葉には不安があった。

「大丈夫も何も是非君のその素晴らしい能力をお借りしたいんだ」

「素晴らしい能力ですか・・・」

幸子としては素晴らしい能力と言われてもピンと来るものが無かった。

「そう素晴らしい能力。あれっひょっとして気づいて無いの？」

「気づいてるもなにも、私にはそんな能力初めから無いですよ」

「そうかやっぱり気づいていないのか。ホント残念だな。そんな素晴らしい能力を持っていながらそれに気づいていないなんて」

残念と言われても、やはり幸子には自分に能力があるとは思えない。けれど潤一にそう言われると、とても嬉しい気持ちになるものだった。

「でもこんな私に一体どんな能力があるというのですか？」

幸子のそんな素朴な質問に潤一は少し間を置き、ゆっくりと話し出した。

「うんそうだな。言葉で表すととても難しいけれど、例えばさっきもそうだったけれど、君にはイタリア語を話すことが出来る。俺だって簡単な言葉なら話せるかもしれないが、君に比べればそれはまるで相手には成らない。これも立派な能力の一つだと思うし、そしてなんととっても君には人をなんかこう暖かい気持ちや、頑張ろうと言う気持ちにさせる能力、いや能力と言うより魅力があるんだ。今日だってきっとみんなも君の仕事ぶりを見て励まされた人がいると思うよ」

「そうなんですか？ 勿論そう言ってもらえると、とても嬉しいんですが、そんなこと言われるの初めてなんで・・・」

「本当に？ そうか、それじゃみんな君の良さに気づいていないんだね。でも安心してくれ俺が言っているんだから間違いは無いよ。とにかく今回の出張は君の力を借りないと成功しないんだ。だからもっと自分に自信を持てよ」

そう言って潤一は幸子の小さな肩をポンと叩いた。そして幸子もそんな潤一に笑顔で答えた。とにかく今自分が潤一の為に何か手助けが出来る。そしてこんな自分を今潤一がどんな形にせよ必要としてくれている。本当に自分の望んでいた事が今現実になりつつある。そう思うとその笑顔の奥に溜まった涙も零れてしまいそうに成って来る。幸子は少し顔をそらして潤一に言った。

「私は今まで駄目人間だとずっと思っていました。けれど頑張ってみます。迷惑かけるかもしれませんが、よろしくお願いします」

潤一もそんな幸子を気遣う様に、少しおちゃらけるながら言った。

「いえいえこちらこそ不束者ですが、よろしくお願いします」

そして潤一は目の前に止まったタクシーに優しく幸子をエスコートした。

次の日からの二人の生活は目まぐるしいものだった。結局FAXの答えは思っていた通り、納得のいく答えは返って来なかった。課長はその結果を確認すると正式に二人に出張を言い渡した。ただ実際はビザの申請などの手続きが思ったより時間がかかり、予定していた日程よりも二日遅い五日後の十二月七日に出発が決まった。そしてとにかく二人の任務は、良い返事をもって来ることだった。

潤一と幸子はその決して長いとは言えない五日間を資料集めと計画と、出入国の手続きに当てた。正直言って潤一と幸子にはその地道に立てた計画に勝算があるのかは分からなかった。

実際課長の「一応一週間の滞在ビザを申請したがそれで足りるか？」と言う質問にすら潤一は「ええ多分大丈夫ですよ」と答えるのが精一杯だった。とにかく行ってみなければ何も分からないと言うのが本音だった。だからこそこの日本にいる間に出来るだけの事はしなければならぬ。出来るだけ多くの資料を集め、そして出来るだけ多くの戦略を考えなければならぬ。

それだけにその間の潤一と幸子は、自分たちも想像すらしていなかったほどに一緒にいる時間が増えた。けれどそれは決して少し前に想像していた楽しいひと時と言うよりもどちらかと言うと、恋人や仲の良い仲間では無く、機械的でビジネスパートナーと言う割り切った関係だった。けれどそんな忙しい日々の中でも心の奥底では、やはりお互いがお互いの存在を確かめ、そしてその中に信頼を深め合っていた。

第一課の方もその間は忙しいものだった。初めは課内でもこの出張に選ばれた者が元々噂があった潤一と幸子だけにそれなりの噂も流れ出した。けれどそんな噂も二人が課の為に一生懸命仕事をしている姿を見れば、いつしかその忙しい程の日々の中に消えていった。潤一と

幸子がそうであった様に、第一課の者達もこの五日間は課長の斉藤を中心にそれぞれの役目をこなし、何とか大きな問題も起こらずに何とか出発前日まで辿り着く事が出来た。

「おい岸崎、神崎、準備が済んだんならお前達は今日はもうあがっていいぞ」

斉藤は時計の針が五時を回ったの確認して言った。

それを聞いて潤一と幸子はまだ手伝いたいと申し出た。実際他のみんなは今日も夜遅くまでやるつもりでいたし、まだ営業から帰って来ていない者もいた。けれど斉藤は「とにかくお前達には明日からやらなければ成らないことがあるんだ。だから今日は早く帰ってしっかり休養を取れ」と言った。

勿論それは斉藤の口から出た言葉であったが、第一課みんなの気持ちだった。第一課全ての者が今日まで一生懸命頑張ってきたのが意味のあるものになるか、それとも全く意味の無かったものに成るかは明日からの潤一と幸子の行動次第で決まってしまう。そう思うと潤一も幸子も無理は出来なかった。潤一と幸子は明日は会社に寄らずに直接成田空港に行く事もあり、全ての準備を整えて希望を受けながら会社を後にした。

外は冬場と言っても五時半に成るか成らない時間では、まだうっすらと暗くなり始めたばかりだった。

「いよいよ明日からだな。やるだけの事はやったんだ、後は精一杯やるだけだよ」

潤一はこの冬場の空と同じように不安になりかけている幸子を勇気づけた。

「ええそうですね。みんな頑張ったんですから私が不安に成ったら駄目ですよね・・・」

そうは言ってみたものの、幸子の気持ちは不安でいっぱいだった。

「なあ神崎。不安な気持ちは分かる。だから不安になるなどは言わない。けどもっと自分に自信を持てよ。自分を信じるよ。だって俺達この五日間一生懸命頑張ったじゃないか。俺はお前のその頑張りを信じているんだ。だからお前が自分の事を信じられないと言うことは、パートナーの俺のことも信じられないと言うことなんだぞ。

俺のこと信じられないか？」

「いえ、そんなこと」

幸子は大きく首を振った。

「だったら自分をもっと信じる。そして何があっても俺のことを信じてくれ。いいな！」

潤一は本当にそう思って言った。きっとこの先二人には色々な事が

ある。けれどどんな事があっても、自分を信じて欲しいと思った。

そして幸子もそんな真剣な潤一を信じたいと強く思った。そして自分の事も信じたいと思った。今まではどうであれ、今日の前に好きな人が居て、その人が自分を信じてくれと言っている。もう幸子には何一つ迷う事など無かった。幸子はその潤一の言葉に、精一杯の気持ちを込めて答えた。

「はい！」

「よおし、いい返事だ。それじゃあその勢いで今夜は朝までパアっと飲むか」

「それはダメです。今夜は早く帰ってゆっくり休まなきゃ」

「よおし、分かっているよ。じゃあ今日は早く帰るか。それじゃ俺はここからタクシーに乗って帰るからまた明日な。迎えに行くからちゃんと起きて待ってるよ」

「はい待ってます。それより岸崎さんこそ遅れないでくださいよ」「はい、はい。じゃあお休み」

潤一は幸子に別れを言ってタクシーに乗り込んだ。けれど潤一は運転手に行き先を聞かれ、それに答えた行き先は山手の自分のマンションでは無く、山下町の少し外れに位置するクリスタルと言うショットバーだった。

クリスタルには潤一は過去に何度か行った事があった。店の雰囲気はとにかく豪華な装飾品で飾られた造りで、来る客もそれに見合っただけの金持ちか、それなりの芸能人がその大半を占めていた。基本的に潤一はその店の雰囲気が余り好きではなかった。確かにイイ女はそれなりに居たが、その大半はそこに来る金持ちか芸能人が目当てで、この場所にはそれ以外の目的は余り無いような気がした。なのに何故潤一は何度となくそこに行って、今日もまたそこに行こうとしているのかと言うと。過去にそこに何度か一緒に行った女の子がそこが好きだった事と、そして今夜も来る事を知っていたからだった。

潤一が店に着いた時は、まだ店を開けたばかりなのだろう。客は潤一以外誰もいなく、従業員も何人かは外の掃除をしていた。

潤一はとりあえずソルティードッグと簡単な食事を注文した。本当ならばさっき幸子が言っていた通り、今日は早く戻ってなるべく早く寝て、ここ何日かで溜まった疲れをとりたかった。けれど潤一には明日からの出張の前にやらなければ成らないことがあった。その為にここに来たのだ。

潤一は目の前に出されたチョリソを口にし、ソルティードッグを一気に半分ぐらまで飲み干した。そして店も七時を廻る頃には客が少しずつ入りだし、本来の雰囲気に成り始めた。そうなると今の潤一は

段々居づらくなってくる。けれどだからといって帰る訳にいかない。今帰れば今までいた意味がなくなる。潤一は3杯目の飲み物をバーテンダーに頼んだ。その間一人の女性が隣に座っていいかと聞いてきたが、今夜は人を待っているからと言って断った。一昔前の自分ならきっと断ったりなんて事はしなかったのだろうと思うと、何となく複雑な気持ちに成った。潤一は目の前に置かれたバーボンを一気に飲み干し「もう一杯頼む」とバーテンダーに言った。そして四杯目の飲み物が置かれると同時に、お目当ての女性、彩子がドア越しに現れた。

彩子は店に潤一が居ることに気が付くと隣に座って、店オリジナルカクテルのルビーを頼み「久しぶりね。でも珍しいわね、潤一がここに一人で来るなんて」と潤一に言った。

「まあな。お前と一緒に来る以外、この店になんて来たことが無いからな」

「そうね。潤一はもっと自然な色彩が多い店が好きだものね」

「まあな」

彩子はバーテンダーの心地良く奏でるカシャカシャと言うシェイクの音に耳を澄ましていた。その姿はこの世の全ての美を想像させた。

体の滑らかなライン、細い足、大きすぎず小さすぎずの胸、そして整った小さな顔がその全てのパーツを統一していた。潤一としてももうこの体を抱くどころか、触れることすら出来ないのかと思うと少し寂しい気もした。けれどそれはもうここに来る前から決めていたこと。潤一は思いきって切り出した。

「なあ・・・」

けれどその先の言葉は喉に詰まる。それを察したのが彩子の方から聞いてきた。

「ねえ、潤一が一人でここに来たって言うのは、私に何か言いたいことがあるんじゃないの？」

彩子はバーテンダーの作りたてのルビーに口を少し付けた。真っ赤なルビー、そしてそれを口にする美女。その光景はまるで聖女の血を飲むドラキュラの様だった。けれどそれは皮肉じゃなくて、何一つとっても非の打ち所が無い美貌の彩子だから成り立つのだろう。もしこれが幸子だったなら、きっとキャロットジュースを飲むウサギとでも成るのだろうと潤一は思った。

「ああ。けどなんて言っているのか」

「あら珍しい。潤一にそんな言いにくい事があるなんて」

「そうか？ 俺にだって色々あるんだ」

「そうね。私の知らない事だって沢山あるわね。でも私は大丈夫よ。なんて言われても悲しくないから。成れているのよ。そう言うことに」

彩子は全てを知っていた。潤一はそこまで言われるともう何も言え

なくなる。

「悪いな」

「あら、そう言うことは一ヶ月半も連絡の無い人に言うものじゃなくて、恋人に言うものよ。でも本当に意外だわ。潤一はもっとクールな人だと思っていたから。まさか潤一の口からそんな言葉を聞くなんて」

本当にそれは一月前だった。あの夜あのオフィスであのワスレナ草を見なければ、きっと今もこの場所で彩子とそれなりに楽しい会話でもして居たのかもしれない。けれどあの夜潤一は確かにワスレナ草を見て忘れかけていた事に気が付いた。そしてその夜一人の女性によって、この何もかもが不確かな世の中で唯一感じた、確かなモノがあった。

「まあな。確かに昔の俺だったらきっとこんな湿っぽい事は言わなかったかもしれないな。けれど今は違うんだ」

「いい子だと思うよ」

「えっ」

突然の彩子の言葉に一瞬驚いた。

「あらそんなに驚かなくてもいいんじゃないの、第一課の神崎さんでしょ？ 潤一のお目当ての子は」

そこまで知られているのなら潤一も苦笑いをするしか無かった。

「お前は何でも知っているんだな」

「ひょっとして潤一って隠し事下手なの」

「そうかな」

「そうよ。みんなも知っているんじゃないの？ 明らかにここ一ヶ月の潤一は別人みたいだったもの」

「そうか、全然気づかなかったな……。でもいい子なんだ。純粹で優しく、俺にないモノをいっぱい持っているんだ」

「そうね、私も余り仲が良いって訳じゃないけど、うちの企画部の中村とは同期で仲が良いみたいで、よく昼休みとか遊びに来て話をしているのを見たりしていると、とてもいい子だと思えるわ。まあいい子かどうかは別としても、少なくとも私たちに無いモノを持っているって事は確かね」

確かにそうだと思った。けれどそれがそうだとしたならば、今までの自分は一体何だったのだろう。親が求める事をやり、会社が求める事をこなして、それなりに結果を出してきた。時には天才だなんておだてられ、時にはエリートだなんてかつがれて、気が付けばこんなところまで来たと言うのに、それなのに何一つ大切なモノを手に入れることが出来なかった自分がここには居た。そう思うと潤一はやりきれない気持ちにすら成った。けれど潤一が彩子の言葉で一番気に成った事はそんな事では無く、企画部の中村、そう香織と幸子が仲が良いと

言うことだった。

勿論仲が良い友達がいると言うことは良いことだった。けれどそれが自分と肉体関係があった女性であり、自分はまだその女性ときちっとした形で終わらせていなかった事に問題があった。

「中村ねえ・・・」

潤一は溜め息混じりに呟いた。そしてそんな潤一を見て、彩子は言った。

「ねえ潤一。もし違っていたら謝るけれど、ひょっとして貴方中村と何かあったのかしら。時々あの子貴方らしき人の事を自慢げに話しているの。昨日何処どこのホテルに泊まったかの、昨日プレゼントをもらったのって。私もこういう性格でしょ、だから分かっちゃうのよね。それが潤一じゃないかって。けれどももしそうだったら、それはちょっとまずいんじゃないかしら。あの子は私と違ってちょっと危険なところがある子よ。だからすんなり、いいわよ貴方の事は忘れるわ、なんて事にはいかないと思うんだけど」

彩子の言葉は全て正しかった。潤一もそのことは何となく感じていた事だった。初めて食事に誘った時のあのスリルがあって楽しそうですと言う言葉を聞いてから、ほんの少しこの子は今までの女の子とは何処かが違うと思っていた。けれどその頃の恋愛に何も求めていなかった潤一は、それ程その事を深くは考えてはいなかった。ただその日その日に誰かが自分の欲望を満たしてくれるのなら。

けれどそれは昔の話であって今は違う。今は彩子が言ったようにそれは大きな問題と成って潤一に降りかかって来ていた。

「ああそうだな。けど今思うと俺って最低だよな。お前と関係を持っていたながら中村とも関係を持っていて、そしてしまいには他の女が好きになったから、もう終わりにしてくれなんて」

「ううん。そんなに自分を悲観しないで。私だってそれは同じ。潤一と肉体関係がありながら、他の男にも抱かれる。勿論それがいいことだとは思ってはいない。けれどそうしないといつも不安に成ってしまうのよ。私にとってそれが唯一安らげる時なの」

彩子は少し俯きかげんにそう言った。そして潤一にとってそんなしおらしい彩子を見るのは初めてだった。

「ああそうだな。俺もきっとそう言うところあった様な気がするよ。けれどやっぱりそれは虚像でしか無かったんだ。だから幾ら誰かがそばに居ても、幾ら誰かの温もりに触れて居ても、そこに愛がなきゃきっと本当の安らぎはいつまでも来ない気がするよ」

「そうね。私もそろそろいい年だから真剣に考えないといけないわね」

「そうだよ。俺達もなんだかんだ言ったって、もう二十五を越えてんだからな」

「ほんとそうね。気が付いたらもうこんな歳になっちゃって。それより潤一、時間は平気なの？ 明日から貴方イタリアに出張なんでしょ」

潤一は彩子に言われて腕時計を見た。

「ああそうだった。明日はめちゃくちゃ早いんだ。じゃあ俺行くよ。本当今日はありがとう」

そう言って潤一は店を出ようとした。そして入り口のドアを今開けようとした時、後ろの方から呼び止める声がして潤一は振り返った。

薄明かりの店内。幾つかのテーブルには幾つかのカップルが楽しそうに今宵の宴を楽しんでいる。そしてその先のカウンターにはさっきまで自分の居た席があり、その横にはポツンと寂しそうに座っている一人のいい女が居た。

「ねえ潤一。貴方は私が他の男と同じ様に付き合っていたと思っていたでしょう」

「えっ」

「でも私は私なりに貴方のことが好きだったのよ。他の人とは違って、貴方は私の中では特別だったの」

「あやこ・・・」

「ごめんね。こんな事言って。別にだからどうしろって訳じゃないの。ただ・・・ただ最後に言って置きたかっただけ。だから頑張ってるね」

「ああ。ありがとう。俺もお前に会えて良かったよ」

「また今度落ち着いたら一緒に飲みましょう。その時は祝福してあげるから」

そう言って彩子はまたカウンターの方に向き直した。そして片手でバイバイとでも言う様に手を軽く振っていた。潤一はそんな彩子にじゃあなと手を振って店を出た。

店を出て心地いい気分で歩く潤一。そして店に一人ポツンと取り残された彩子。そんな二人は対象的だったのかもしれない。

彩子はバーテンダーにおかわりを頼んだ。そしてバーテンダーは何も言わずに注文されたバーボンをストレートにグラスに注ぐ。その間店の中には雰囲気の良いプラターズのオンリーユーが流れ、それなりの品の良い笑い声が所々に聞こえていた。

きっとその店に居た誰一人カウンター越しに座っている一人のいい女が、肩を少しふるわせていた事には気が付かなかったのだろう。それはさっきまで一緒に居た潤一でさえ。ただ唯一気が付いているとしたら、黙って彩子の前に白いハンカチを添えたストレートのバーボンを置いてくれたバーテンダー、ただ一人だけだった。

その頃潤一はタクシーに乗って家路に着こうとしていた。家まではたいした距離では無かったが、その間タクシーの中での潤一は心地良

い気分だった。その理由はハッキリしていた。それは何もかもが上手くいっていると言う事よりは、彩子の意外な気持ちだった。確かに大切なモノを失ったが、それ以上に大切なモノを手に入れた様な気がした。よく考えれば初めて彩子と出会った頃は二人とも、友情だとか愛情と言うモノなんて下らないと言っていたが、本当は一番欲しかったモノだったのかもしれない。ただ寂しさを誤魔化す為に意地を張っていただけだったのかもしれない。だから同じ寂しさを持った二人が出会ったのかもしれないと潤一は思った。けれど今はもう、そんな彩子の為に何もしてあげられない自分が居た。せめて何か自分に出来ることがあるとしたら、彩子との思い出を大切にすることくらいだった。そして自分が出会ったこの愛と同じ様に素敵な愛に出会えるように祈ること位だと思った。潤一はタクシーの窓越しに流れゆく夜の町並みを眺めながら、そんな事を考えていた。けれどそんな心地良い気持ちも、ある一言を思い出したときに消えた。

それは彩子がさっき口にした「あの子は私と違ってちょっと危険なところがある子よ。だからすんなり『いいわ貴方の事はは忘れるわ』なんて事にはいかないと思うわ」と言う言葉だった。確かに香織は彩子の言っていた通り、危険なところが多い気がした。彩子はどちらかと言うと余り他人の私生活にこだわらなかった。けれどそれに比べ香織の方は、すごく嫉妬深いところがあった。ここ一ヶ月の間も何件も留守番電話に香織からの逢いたいと言う内容のメッセージが入っていたが、潤一は会いたくない気分と仕事の忙しさのせいで、そのメッセージに答えていなかった。会社の廊下ですれ違っ事は何度かあったが、お互いの関係を隠していた二人は挨拶意外の言葉を交わすことはやはり無かった。勿論いつまでもこんな中途半端な関係を続ける訳にはいかない事は分かっている。早めにハッキリさせるしかない、少なくとも出張の前までには自分の気持ちをハッキリ伝えなければいけないと思ってはいた。けれど気が付けばそれは実行されないまま、出張前日まで来てしまった。そしてその大きな理由がやはり香織に危険なところがあったからだった。

元々香織には色々な噂はあった。例えば昔に付き合っていた彼氏の浮気がばれて、浮気相手の家に入り込んで行ったとか、何人もの男をだましてみつがせていたとかそういう類のことだった。けれど少し前まではそんな噂は、美人の香織に何処かの誰かが僻んで流しただけの事であり、仮にもしそれが本当だとしても自分は浮気をすると言うよりもそれを分かって肉体関係を持った訳だし、騙されるほど尽くす気も無かったので、余り深くは考えていなかった。けれど実際別れるとなると、香織に対してその類の噂の多さが逆に気になるものだった。

潤一は運転手に断って煙草に火を付けた。車窓から見える夜の町並

みは先ほどから変わらないきらびやかさがあつた。けれど潤一の気持ちはさっきまでの清々しさは無く、どんよりと重たいものがあつた。やはりハッキリさせなければいけないと思った。これ以上このままの状態を続ければ、全てが意味の無いものに成ってしまう。それはさっきの彩子に対しても言える事であり、何よりも幸子に対しては何が何でも壊れてしまいたく無かつた。潤一は家に着いたら早速香織に電話を入れよう。そして何が何でも自分の気持ちを伝えようと決め、煙草の火をドア越しに付いていたその小さな灰皿で消した。

タクシーは元町の先の急な上り坂を登り、幾つかの角を曲がり、山頂付近に建った豪華なタイル張りのマンションの前で止まつた。そして潤一は運転手にお金を払い車を降りた。

外灯が幾つも連なる大きな玄関。そしてオートロックの自動ドアを抜けると軽く雑談を楽しめるロビーが広がり、その脇を横切るとガラス窓の付いたエレベーターがある。潤一はエレベーターの6階のボタンを押した。ドアは品の良い音をあげて閉まる。そしてウィーンと言うワイヤーの音と同時にエレベーターは動き出し、目の前のガラス越しの景色は、2階3階4階と同じ風景を繰り返す。もし違うところがあつたとしたならばドアの反対側の壁に書かれた2フロアー、3フロアーと言う文字だけだつた。そしてその繰り返しと呼べる景色の中、潤一は複雑な気持ちに成る。それはある部分では早く6階に着いて早く電話を掛けてスッキリしたい気持ちと、いつまでもこのままこの景色を繰り返していたいと言う気持ちだつた。勿論スッキリ出来るのとなら今すぐにも電話はしたい、けれど電話をしたところで彩子の様に良い終わり方が出来るとは限らなかつた。そう思うと電話をすることすらおっくうに成る。だからこそこのままこの風景が続いて欲しいとさえ思つてしまう。けれどそんな事は機械の故障でもない限り起こることは無く、現実の扉は潤一の心とは裏腹に品の良い音をあげ開かれた。

潤一の部屋は6フロアーと書かれた壁を右手に折れ、ピロティーとでも言うのか、長椅子が置いてある少し広いスペースの所を左手に折れて真っ直ぐ行つた突き当たりの所にあつた。そして潤一はその背折り通りと言うべき道順をいつもの通りに歩きだす。6フロアーと書かれた壁を右手に折れ、ピロティーの所を左手に折れそのまま真っ直ぐ行けば部屋だつた。いつも通る廊下、目を瞑つたつて歩ける道だつた。けれど潤一の足は6フロアーと書かれた壁を右手に曲がつてすぐの、ピロティーの所で止まつていた。いつもと何一つ変わらない廊下。けれどピロティーの所に置かれた長椅子には一人の女性が俯いて座つて居た。時々はその長椅子には中年の女性が二人で噂話に華を咲かせて

ることもあったし、女子高生が友達と何かの悩み事を相談しあっている事もあった。けれど年頃の女性が一人俯いて座っていた事は、少なくとも潤一が入居して初めて見る光景だった。廊下の明かりは霽囲気の良い丸形蛍光灯で、その所々の暗闇を消していた。そしてその明るすぎず暗すぎずの光を灯す蛍光灯の明かりは、そこに座っていた女性が香織だと気付くには、十分すぎる明るさだった。

香織は足音を聞いて顔を上げ、目の前に立って居るのが潤一だと確認すると待ちくたびれた様に言った。

「今まで何処に行っていたんですか？ 会社は随分前に出たはずなのに」

けれどそう言われても潤一には質問の答えと違う答えしか出ない。

「えっ、あっ、あれ。お前何でここに居るんだよ」

「何でって、電話してもなかなか捕まらないし、明日から出張でしょ。だから家まで来ちゃった」

「来ちゃったって。そもそもどうやって入って来たんだ。入り口は鍵が無いと入れないはずだぞ」

「そんなの簡単ですよ。誰かが入る時にさり気なく一緒に入っちゃえばいいのですから」

香織はそう言って、悪戯っ子の様な微笑みを浮かべた。

ひと昔前の潤一ならきっとそんな悪戯っ子の様な微笑みも可愛らしく見えたのかもしれない。けれど今の潤一にはそんな反省の色も無い香織の微笑みに嫌悪感すら覚える。

「お前なあ。勝手に人の家に来るなよ」

「勝手になって。まあいいわ。それより明日からイタリアですって。いいわね。お土産は何をねだろうかしら、グッチの最新のバッグがいいかな。あっそれよりブルガリの指輪にしようかな」

そんな事を言いながらはしゃぐ香織を見ていると嫌悪感は更に増す。

「お前何か勘違いしてるんじゃないか。俺は仕事で行くんで、遊びに行く訳じゃないんだ」

「それはそうですけど。けどなんか岸崎さん冷たいんじゃないんですか。一ヶ月位も電話は無いし、出張に行ったら寂しく成るんじゃないかと思って逢いに来たのに、まるで来ちゃ困る様な態度だし、そりゃ隣に大原さんでも居るって言うのなら別ですけど、どうやらそういう訳でもないみたいだし」

「別に俺が言いたいのは誰かにばれるとかばれないとかそういう事を言いたい訳じゃないんだ。それに彩子にばれて無いと思っているのか？」

「えっ」

さすがの香織もこの事実は知らない様だった。そして潤一はさらに

続けた。

「知ってたよ。彩子は俺達の間を」

「それで岸崎さんは大原さんに何て？」

「何てって、ありのままを言ったさ。俺は彩子とも付き合っていないながら香織とも付き合うイヤな男だって」

「そうですか。でもそこまで言ってしまったのなら私ももう隠す必要は無いんですね」

「隠すも何も別れたよ。今さっき」

「えっ」

潤一の確かに言った。今さっき別れたと。少なくとも香織の知っている範囲では、潤一が付き合っていたのは自分と彩子だけだった。普通に考えればそれはそれで喜べる事なのかもしれない。けれどなぜか潤一のそのぶっきらぼうな言い方に、香織は素直に喜べない気がした。

「でもどうして。私が言うのも何なんですけど、何かあったんですか大原さんと」

潤一はそんな余りにも突然の連続を聞かされ、少し呆気にとられている香織に呟く様に言った。

「何も無いよ。何も無かった……。だから別れた」

その言葉は香織の心の中で不協和音と成って木霊した。

潤一が口にした何もない。何も無かった……。と言う言葉はあまりにも非現実的な言葉のはずだった。なのにそれは何故か自分の中で現実味を帯びていた。けれど何故？ と自分に問い掛けてみてもその答えは見つからなかい。どうして？ と自分に問い掛けてみてもやはりその答えは、目の前の潤一の冷めた眼差しの中に吸い込まれるだけだった。何故なら香織はまだ、この言葉がまさか自分にも当てはまるものだと思ってはいなかったからだった。

「そうですか。でもだったら私は喜んでいいのですよね。これで岸崎さんは私だけのモノに成ったと言うことなのですから」

その言葉を聞いて、やはり香織は分かっていると潤一は思った。潤一は出来ることなら何も問題なく整理出来ればと思っていた。けれど香織にはやはりハッキリと言わないといけない気がした。勿論彩子の様に上手く行くとは思ってもいない。しかしこの場できちんと言わなければ言うチャンスは無かった。潤一は一呼吸しハッキリと言った。「あのな。本当に悪いと思っているが、お前とも今日で終わりにしたいんだ。勿論全て俺のわがままだと思う。けれどこんな関係いつまでも続けたく無いんだ」

それは香織にとって思いもしない言葉だった。

「どうしてですか？ 私には分からない。なんで別れなきゃならないの？」

「どうしてって、こんな関係いつまでも続くわけないだろ。それにその方がお前にとっても良いと思うぜ」

けれど香織は首を振った。

「私は構いません。私は今のままで十分です。なのにどうしてそんな事言うの」

香織は完全に取り乱し始めていた。それは普段冷静な香織を知っていた潤一が一番分かっていた。けれどだからと言ってそれをどうする事も出来なかった。何故ならそれは自分から切り出した別れと言う言葉から始まったものだったのだから。

「本当に悪いと思うけど、俺は嫌なんだ。俺も昔は確かにこんな何も無い関係がいいと思っていたよ。けど今は違う。今はこんな関係は嫌なんだ」

「どうして？　ねえ一体何があったんです」

「何も無いよ。ただ何かある前に自分の気持ちをハッキリさせたいだけなんだ」

「うそ！　何も無いなんて嘘でしょ。あっ分かった。好きな人が出来たんでしょ。だれ？　一体何処の誰なの」

香織はもはや見境が成っていた。そこには普段の大人しく話す香織は無く、ヒステリーを起こしピロティーいっばいに響く大きな声で話す香織がいた。けれど逆に香織が取り乱せば取り乱す程、かえって潤一は冷静に成ってしまう。そして冷静に成った潤一はある一つの事で迷っていた。それはここで本当の事を言った方が良いのだろうかと言う事だった。

さっきも彩子が言っていた様に、香織と幸子は同じ営業所の同期入社と言うこともあり仲が良かった。それは時々二人が一緒に話したり、一緒にお昼を食べたりしているのを何度か見かけた事があったので潤一も知っていた。けれど何故かそこにはどうしても本当の友情と言うのが感じられなかった。確かに幸子との会話に出てくる香織は、友達の様を感じられた。けれど香織との会話に出てくる幸子は、なんだかとても友達と言う存在じゃ無い様な気がした。勿論それは二人の捉え方の違いなのかもしれない。けれどそれにしてもそれはあまりにも食い違いが多かった。幸子は香織の事をすごく優しくて頼りに成る友達と言っていたの対し、香織は幸子の事をまだまだ世間知らずの子供ねと言っていた。勿論友達だから言える事もあるだろう。けれど友達だからこそ言わない事もあるはず。潤一は本当の友情と言うモノは知らなかったけれど、上辺だけの付き合いについては嫌と言うほど知っていた。そしてそんな潤一の間から見て、やはり香織の中の幸子は友達と呼べるにはほど遠い寂しい存在だった。

「それは言えない。本当にこの事は俺のわがままだし、悪い事かもし

れない。でもそれは言えないんだ」

潤一は言えないとキッパリと言った。しかしそれで香織がすんなり頷く訳も無かった。

「どうして言えないの。ひょっとして私の知っている人なの？ そうなのね」

香織はまるで潤一の心の中を覗き込む様な目で潤一を見つめた。普段の潤一ならそんな事をされても何一つ表情を変えないでやり過ごす事も出来たのだろう。けれど今の潤一にはその自信が無かった。香織のいつもと違う表情、そして決して口には出来ない事、そんな物が潤一を不安にさせている限り、香織のその目線に自分の目線を合わせ続けることは出来なかった。そして香織はそんな潤一の動揺の中、一つの結論に達した。

「ねえ、まさか幸子じゃ無いですよ」

潤一は返事をしなかった。心臓は今にも破裂しそうな勢いで鼓動し、目はまともに凝視すら出来なく成ったが、それでも潤一は黙っていた。全てをありのままに言ってしまえば、きっと楽にでも成れたのかもしれない。けれど潤一はこの事で幸子に迷惑はかけたく無かった。この事はあくまでも自分と香織の問題であり、幸子の問題では無かったし、仮にその通りだと言った所で良いように転がる気はしなかった。だから潤一は黙る事にした。けれど香織はそんな潤一の心を見通してか、やっぱりと言う顔をした。

「まさか噂が本当だったなんて。ねえどうしてですか？ あんな子の一体何処がいいんですか？ 私は許せないです」

そこまで言われても潤一はうんとは言わず、話題を逸らそうとした。「なあ香織。さっきから言っているが本当にお前には悪いと思っている。けれどこの問題は俺が誰を好きに成ったとか成らなかったとかそういう事じゃなくて、俺達の関係に問題があったんだ。そりゃお前にも言い分はあると思う。けれどそれで責めるのなら俺を責めて欲しいんだ。付き合った事も、今こうして別れを告げているのも全て俺のわがままなんだ。だからこの事で第三者は関係無いんだ」「関係あるんです！ 岸崎さんに関係無くても私には関係あるんです。大原さんみたいな人にならともかく、あんな子に取られて私の立場はどうなるんです。恥ずかしくて会社にも行けないですよ。とにかく私は許せません！」

香織はそうとう悔しいのだろう。怒りを露わにしていた。けれど潤一としても、幸子の余りにももの言いように腹が立った。

「なあ、お前は神崎の事をあんな子、あんな子って言っているが、一体自分は何だと思ってるんだ！ 俺から言わせれば今のお前の方が最低だよ」

「そうですね。私は最低でしょうね。でも嫌な物は嫌なの。あの子に取られるなんて絶対に許せないのよ」

潤一はもう何も言う気が起きなくなった。こんな事をいつまでも繰り返していても、きっと香織には分からないのだらうと思ったが、最後に一つだけキツチリ言って置かなければいけない事があった。「もう辞めよう。これ以上お前と話しても仕方ない。とにかく俺はもうお前とは上手くやっていけないということだ。何とか良い終わり方が出来ればと思ったが、それもどうやら無理なようだ。こんな所でそれもこんな形で何なんだけど、もう終わりにしよう。俺も明日早いからもう行くから。じゃあ」

そう言って潤一は香織に背を向け歩き出した。そして香織はそんな潤一の後ろ姿に向かって呟いた。

「どうなっても知らないから・・・」と。

それが一体どういう意味なのかは分からないけれど、そんな事を言われた潤一は足を止め振り返り、クールな眼差しでたった一言だけ口にした。

「もし仮に神崎に何かして見ろ。その時はそのままその言葉をお前に返すよ」

そして潤一はまた歩き出した。もう何も聞こえなかった。もう何も言う事も無かった。そしてもう振り向くつもりは無かった。言う事は言ったしやる事はやった。とにかく一つの事は確かに終わった。後は前を向くだけだった。そして明日からの出張の目的が終わった後で全てを話そう。それを彼女が一体どう受け止めるかは、もはや問題では無かった。とにかくこれでやっと彼女と向き合えると思える事が、潤一にとって何よりも重要だった。そしてその為に今日ここで全てを終わらせたのだから。

潤一は二つの犠牲とたった一つ希望を握りしめながら、その目の前の大きな扉を開けた。

出発当日、幸子はベッドサイドに置かれたミッキーマウスの目覚まし時計を見つめていた。時計の針は朝の七時十分を指そうとしていた。そしてそれは潤一との約束を十分過ぎた時間だった。

幸子は少し不安になった。勿論十分位の遅刻で飛行機に間に合わなくなる事はない。一応全ての段取りを三十分から四十分位多めに計算をしていたので、大体全体で一時間三十分位の余裕はあった。だからこの十分の遅刻が二十分、三十分となった所でそれ程たいした問題ではない。むしろ幸子が気にしていたのは時間の問題では無く、遅刻自体の方だった。

少なくとも幸子が知っていた範囲では潤一が連絡も無く時間に遅れ

た事は殆ど無かった。過去に一度だけ会社に無断遅刻をした事があった。理由は車に引かれた子猫を病院に連れて行ったと言う事だった。勿論会社の人達は誰もが冗談として受け止めていた。そして潤一も冗談だよ。冗談に決まってるだろ。本当は昨日飲み過ぎて寝坊しただけなんだ。と言って笑ってその事を終わらせたが、幸子は本当の事を知っていた。それは偶然だった。まだ幸子も入社したばかりで、潤一ともそんなに会話を交わした事も無かった頃だった。

たまたま朝の通勤の時に目の前を会社の男の先輩が歩いていた。幸子はそれに気づき、会社の先輩に挨拶をしようとしたその瞬間だった。二人が歩いていた歩道の横の車道で、キーーと言う車の急ブレーキ音がした。ビックリして幸子は車の方を見た。黒いタイヤの後を残し斜めに止まった白い車、そしてその前に横たわった小さな子猫。車に子猫が引かれてしまったのだ。ああかわいそうと幸子は思った。きっとそこに居た誰もがそう思ったに違いは無い。けれど幸子を初め、誰一人としてその事実を第三者の目でしか見ては居なかったのだろう。斜めに止まった車の運転手でさえ車が無事だと分かると、何事も無かった様に走り去って行った。そしてそこに居た人たちもその事実さえ否定して歩き出そうとした時に、一人の男の人が歩道に飛び出してその子猫を抱き上げた。猫の方もまだ息はある様で、その小さな体で大きく息をしていた。そして男の人の方もまだ子猫が息をしているのを確認するや否や、手を大きく挙げてタクシーを止めた。止まったタクシーの運転手は初めのうちは血が出ているその猫を乗せるのを拒んでいた様だったが、男の説得に負けて仕方なく走り出して行った。それがその朝に偶然幸子が出会った出来事の全てだった。そしてその会社の先輩に当たる人が何を隠そう、今七時十分を過ぎようとしている時計を見ながら待っている潤一だった。

少なくとも幸子知っている潤一の無断遅刻は、これ一回きりだった。それ程に遅刻をしない潤一が今現実に遅刻をしている。そう考えると何かあったんじゃないかと思わずには居られなかった。それにもう一つどうもさっきから嫌な胸騒ぎを感じていた。

三十分前までは幸子の頭の中は違った事でいっぱいだった。大体の準備は既に終わっていて、後は化粧をして潤一を待つだけだった。もともと幸子は化粧を余りする方では無かったので、それ程時間のかかる作業ではなかった。けれど幸子は一時間前から鏡の前にずっと座ったまま鏡の中の自分の顔を見つめていた。鏡の中には髪を整えて軽くファンデーションを塗り、眉を少し書き足し、口紅を薄く塗った普段より少し大人びた幸子が居た。勿論身だしなみは十分だった。けれど幸子は大きな溜め息をついた。どうしても化粧でごまかせない物がその溜め息の理由だった。それは朝起きて洗面所で顔を洗い、歯を磨い

ている時に気が付いた。

普段の洗面台の鏡の中に写る色は、肌の色の肌色と歯ブラシの柄のピンク、そして歯磨き粉の白と後ろのドアのクリーム色だけのはずだった。けれど今朝の鏡の中には普段のそれとは明らかに違う二つの赤色があった。左目を瞑ると鏡の中のそれも同じように、左側の一つが消える。右目を瞑ると鏡の中のそれもやはり同じように右側の一つが消えた。きっと両目を瞑れば自分には見えないけれど、鏡の中のそれは完全に消えるはずだった。理由はハッキリしていた。昨夜幸子は潤一と別れ、早めに食事を取り、昔よく徹夜で勉強したイタリア語と英語の教科書を軽く読み直した後、布団に潜り込んだ。そして目を閉じて明日からの為に早めに眠るつもりだった。けれどそれは一時間経っても二時間経っても実行出来ない。出来ないどころか時間が経てば経つほど目が冴えて来てしまった。明日からの事を考えての早めの睡眠なのに、明日かの事を考えれば考える程、それは不可能に成った。不謹慎な事かもしれないが、行きたかったイタリアに行ける。そしてなんと一緒に行く相手が潤一と来れば、二つの一生の願いを神様が同時に叶えてくれたと思ってしまうのは仕方が無いことかもしれない。結局その緊張と興奮に負けて、殆ど朝方までイタリア語の復習とイタリアの地図を見て過ごした。けれどやはり朝になって目の真っ赤な自分を見ると、なんとしても寝れば良かったと後悔した。

仕方なく幸子は何回か目薬をさして少しでも良くなる様に祈った。けれどそれは約束の時間の三十分前に成っても直ることはなく、全ての化粧を整え終わった幸子の悩みとなった。

確かにそれは三十分前まで幸子の頭の中は、その事でいっぱいだった。けれど三十分を過ぎた頃に、幸子の頭の中をガラリと変える出来事があった。

幸子は鏡ばかり覗いてもそれは仕方が無いことだと気が付くと、一時間以上も座って居た鏡の前を離れ、荷物の最後の確認をする事にした。まあ荷物と言っても、実際にはこれを必ず持っていかなければいけないと言う物が具体的にあった訳では無かった。大切な書類関係は潤一が持っていたし、仮に何か忘れても向こうで調達出来る物が殆どだった。幸子も海外旅行には一回だけだけ行ったことがあり、海外旅行に必要な最低限の物も知っていた。一応簡単な確認を終え、部屋を一通り見回しもう必要な物は無いか考えて見た。

いつもと何一つ変わらない部屋。それはこの部屋に引っ越しして来た時から見慣れた光景だった。けれど一回り見回して見ると、何かが違っていると直感した。ベッドとタンスとテレビと本棚、その位置は変わってはいなかった。確かに明らかに変わっている物はあった。それは部屋中の花瓶と言う花瓶に花が一本も刺さっていない事。けれどそれは

幸子が自分で一週間の留守を考え、昨夜大きめのバケツに移した事だったので今更疑問に思う事では無かった。なら一体何が違うのだろう。その答えが見つかったのは実家に電話を入れようと思いついた時だった。

幸子はイタリアに行くと言う事は、決まった次の日に実家に連絡はしていた。けれどその時はまだ一体いつからいけるかは分からなかった。いつ行くかはまた決まったら電話を入れると言って電話を切った。それから忙しい日々だった事もあり、日程が決まっても連絡を入れる事を忘れていたの思いだし、今日から行って来るねと電話を入れようとした。幸子の部屋の電話は、部屋のタンスの上にあった。それは立った位置から見ると、それなりに存在感のある物だったが、ジュータンの上に座った状態で見るとそれは逆に死角となった。だからさっきは気が付かなかったけれど、今立ち上がり電話機の前に立つと、それはハッキリと分かった。

「あっ留守電が入っている」

思わず声に出して言った。そして声に出した後に、夕べ早く寝るのに途中で電話で起こされてはまずいと思い、呼び出し音量を切りにしていた事を思い出した。実は最近悪戯電話が多かったのだ。その殆どが何処でどう調べたのか、聞き覚えの無い男のイヤらしい声で、そしてそれは大概夜中の二時三時と言う時間帯に掛かって来ていた。だからこそそんな電話で起こされたく無かったので夕べは音量を切っていた。そして案の定その用件はやはり夜中に録音されていた。

電話のディスプレイには2：15・・・1ケンと表示されている。そしてそれは大概悪戯電話をされる時間帯だった。

けれどだからと言って、それが100%悪戯電話だと言う確信は無い。時々だったがそれ位の時間帯に友達から電話を受ける事もあった。まあ何はともあれ聞いて見ればその答えはハッキリする。幸子は電話機の再生ボタンを、たいした期待もせずに押した。

・・・ヨウケンハ、イッケンデス・・・。

「・・。」 それは本当に長い沈黙だった。時間にして一分位続いているのだろうか。聞こえる物はただ緊迫した息づかいと、後ろに聞こえる微かな街のノイズだけの、本当に嫌な雰囲気メッセージだった。普通に考えればそれは直ぐにでも悪戯電話だと思うのだろう。けれど幸子はその沈黙の中に何か言葉では表す事の出来ない、嫌な雰囲気を感じた。

電話の相手は女だと直ぐに分かった。それは何がどうしてと言う事では無く、女の直感がそう思わせた。そしてその沈黙の中にある嫌な雰囲気が、恨みや嫉みの類の物だと言う事も分かった。しかし分からない事は、それが一体誰がどんな理由で自分に宛てた電話なのかが分

からなかった。勿論掛けた相手が電話番号を間違えて、たまたま自分の所に掛けて来た可能性もある。それならそれでいいと幸子は思った。少なくとも自分には誰かに恨まれる様な事は思い出せ無かったし、嫉まれる程何かを手に入れている事も無い気がした。だから単なる間違い電話に違いないと思おうとした。けれど冷静に考えればそれは違うと言うことに気が付く。自分の留守電話の対応メッセージは確かに「はい、神崎です。せっかく電話をいただいたのですが、ただいま留守にしています。戻り次第、折り返し電話いたしますので、ピーと言う発信音の後でお名前、電話番号を入れてください。・・・ピーー」と言う形でしっかりと名前を言っているはずだった。そう考えるとそのメッセージはやはり、紛れもなく自分宛に届いた物だった。

では一体誰が何のために？ 幸子は考えた。一体、人に憎まれる様な事をしたことがあったのだろうか？ 勿論自分の中ではその答えはNOだった。昔から余り争い事や、奪い合いと言う事が苦手だった事もあり、そう言う類の事はいつも自分から避ける様にしていた。だから幸せも掴めない代わりに、誰かを不幸にする事も無かったはず。けれどだからと言って本当に誰も傷つかなかったのかと言うと、きっとそれは100%NOとは言えないのかもしれない。何故なら今までもそうだった様に、誰かが誰かを傷つける事なんて、いつだって誰も知らない所で起きていたモノなのだから。

幸子は親との電話を切った後も、その事が気になっていた。そしてその頃に成ると、幸子の中で一つの事がクローズアップされていた。それは潤一の事だった。もしも仮に誰かに嫉まれるとしたら、きっと潤一の事じゃないかと言うのが、幸子の辿り着いた結論だった。

それならばつじつまが合う。潤一は幸子と違って、社内の中でも人気があった。だからそれだけ好意を抱いている女性社員もいるはず、と言うことはその中の誰かが、自分と潤一が二人だけで出張に行く事に対してヤキモチを妬いていて、夜中に悪戯電話をしてきた事も十分に考えられた。けれど電話を切ってしばらく経つと言うのに、未だにハッキリと感じるあの嫉みに籠もった沈黙、それはちょっとやそっとの感情じゃ無いことは鈍感な幸子でも分かる。するともっと深い関係の、そこまで考えて幸子はハッと自分が余りにも潤一の事を知らなかった事に気が付いた。

一体潤一には今お付き合いしている人が誰かいるのだろうか？ こんな事すら幸子には分からなかった。一体自分は今まで何をしてきたのだろうか。この出張は確かに仕事で行くと言う事だけど、もしかしたらと言う気持ちが全く無かった訳では無かった。もしかしたらこの出張の目的が終わったその後で、良いことが起こるんじゃないかと思っていなかったと言えば嘘になる。けれどよく考えれば自分は潤一に恋

人がいるかどうかとも知らないのだ。それにあの夜潤一はイタリア語の話せる自分をパートナーに選んだだけであり、もし仮に自分がイタリア語を話せなかったとしたならば、今この場で潤一を待つことも無かったのかもしれない。そう考えると今まで少し浮かれていた自分が恥ずかしく思えた。それに冷静に成れば成るほど潤一と自分の立場の差がハッキリと立ちふさがる。仕事は出来て社内でもみんなから尊敬されている潤一と、何も取り柄のない自分とを、一体どうして重ねる事が出来るのだろう。確かに潤一はあの夜、君には素晴らしい能力があると言ってくれた。それからなるべく自分を悲観的に思わないように努力していたが、こんな悪戯電話をもらってしまうとやっぱり、自分には潤一と対等の立場に立つのは許される事では無いんじゃないかと思ってしまう。そしてそう考え始めるとその思考はまるで坂道を転がり落ちる様に、どんどん悪い方、悪い方に向かってしまう。そして最後に辿り着いた時には、きっと潤一の恋人から自分宛に届いた警告なのかもしれないと言う所まで来てしまっていた。

そして時計の針は既に潤一との約束の時間を過ぎていた。そうになってしまうともはや幸子の心は、窓の外の澄みきった青空の様には成れず、どんよりとした気持ちになった。少なくとも潤一は無断遅刻をしない人だった。なのに今潤一は連絡も無く遅れている。あんな留守番電話が無ければきっと道でも混んでいるのかなと、思うのかもしれないが、あんな留守番電話を貰った後では、何かあったんじゃないかと思ってしまう。幸子は不安だった。そして心配だった。それは時計の針が一分、一秒変わると共に増していく。そしてやがて五分が過ぎ、十分が過ぎ、十五分が過ぎた。けれど潤一からの連絡は一向に無い。ただ時間だけが宛てもなく過ぎていった。そして十五分を過ぎた頃から幸子は電話をするべきかどうか迷っていた。まだ一度も掛けたことの無い潤一の電話番号。初めて潤一から聞かされた時は胸も踊る気持ちだった。けれど今は電話の先から女性の声でも聞こえて来るのではないかと不安になる。だから何度かダイヤルを押しても、どうしても最後の一つが押せなかった。押すことが怖かった。幸子は溜め息を付いて窓の外を見た。

窓の向こうに広がるバルコニーには、とても冬だとは思えないくらいの日差しが差し込めていた。そしてその日差しの中に幾つかの鉢植えが並んでいる。種を蒔いた鉢植えは隣の仲の良い若い夫婦が水をあげてくれると言う事で、昨日のうちに隣のバルコニーに移していた。だからそこにあったのは、何も入っていない鉢植えだけだった。そしてその中の一つ、クマのプーさんのイラストの入った鉢植えに幸子の目は止まった。

確かそれは三つで千円と言う特価の時に買った物。だからそれは全

部で三つあった。

その中の一つは昨日隣に預けた物で、もう一つが今日の前にある。そして残りの一つが初めて潤一と食事に行ったあの夜、潤一に手渡した物だった。幸子は今でもあの夜のことが、まるで昨日の出来事のように思い出せた。本当にあの日は奇跡が起こったのだ。そしてあの日の出来事は夢なんかじゃなく現実に起こって、そして今もそれは続いていた。幸子は何だか潤一を信じられなくなっていた自分が嫌になった。確かに潤一は言ったはずだった。何があっても俺を信じてくれと。そして自分は信じると言ったはず。だったら何も考える事なんて無いし、ましてや不安がる事なんて尚更無い。そう考えると気持ちは落ち付いた。そして今度こそダイヤルを最後まで押す覚悟で受話器を上げた。

二人が乗る真っ黒なボディーのマツダRX-7は、後部座席にトランクに詰め込みきれなかったポストンバッグを乗せて、丁度浦安を越えた位の所で軽い渋滞にはまっていた。そして車のカーステレオからは季節外れのビーチボーイズのナンバーがFMの電波に乗って流れていた。

「本当今日は遅れちゃってごめんな」

潤一は改めて言った。

「いや、いいんです。それは別に。でも理由が何だか笑ってしまうと言うか、嬉しいと言うか、本当こちらこそ大切にしてもらってありがとうございます」

結局潤一が幸子の家に辿り付いたのは、幸子が潤一の家に電話をかけ始めた時だった。そして遅れて来た理由はこうだった。

家は間に合うように出て来たが、行く途中で幸子から貰った鉢植えを行き付けの花屋に一週間預けて来ようと思って、花屋に寄ったのまではよかったけれど、花屋の開店が7時だった為に遅れてしまったと言うのが理由だった。

幸子としてもそう言う理由なら怒るよりも逆に嬉しく成った。

けれど潤一は目が赤いからずっと下を向いているとは知らず、下ばかり見て自分の顔をまともに見てくれない幸子が、怒っているんじゃないかと思い誤り続けた。

幸子もそんなに謝られても困りませんと潤一に言ったが、潤一のものし許してくれるのなら俺の目を見てくれよと言う言葉に、仕方なく顔を上げた。そして向き合うあった二人は思わず吹き出した。幸子の目は確かに真っ赤だったが、それ以上に潤一の目も真っ赤だったのだ。

「いやあ、でも君の目が真っ赤だった時は、どうしようかと思ったよ」

潤一はギアをローに入れながら言った。

「岸崎さんだって真っ赤だったじゃないですか」

「まあね。でもどうせお互い眠れなかったんじゃ、飲みに行っても、行かなくても一緒だったな」

「本当にそうですよね。私あんなに興奮して眠れなかった事なんて学生の時の卒業旅行以来ですよ」

幸子は少し照れくさそうに言った。

「そうか、俺なんか小学校の遠足以来の事だけ。まあでも良いように取れば、これで時差ボケの心配は無くなったと言う訳だ」

「そうですね。そう考えると眠れなかったのもあながち無駄と言うわけでも無かったんですね」

「まあね、物事なんて考えようだよ。例え嫌な出来事だって考え方ひとつで、いい出来事になるもんなんだ」

そう言って潤一は昨日の夜の出来事を思い出してみた。香織の人を見下したあの言い方、そして憎しみを持った形相、今でもそれはハッキリと思い出せた。本当に嫌な出来事だったと今更ながら潤一は思った。けれど大概の嫌な出来事は、考え方を変えればいい出来事になる。例えばその時は嫌でも、いつかそれがいい思い出に変わるといった様に。

けれど昨日の出来事だけは何故か永遠にいい思い出に変わる事は無い様な気がした。例えこの先、隣で季節外れのビーチボイズのナンバーを聞きながら体を揺らしている幸子と、何事もなく平和に愛を育んで行けたとしても、それだけは変わらないんじゃないかと潤一は思った。あの「どうなっても知らないから」と言った時の憎しみが籠もった、あの目だけは忘れる事が出来そうに無かった。

幸子は相変わらずビーチボイズの曲に合わせてハミングをしていたが、潤一の少し不安そうな視線を感じて、大丈夫ですか？ と心配そうな顔をした。

潤一はそんな心配そうな幸子に、「うん、大丈夫」と言って微笑んだ。

幸子も潤一の笑顔を見て安心したのか、前を見て「あっ渋滞抜けましたね」と言った。

どの車も今までの息苦しかった道からやっと広い道に出た事もあり、水を得た魚の様に生き生きと走り出して行く。潤一はその光景を見て今の自分と同じ気がした。

詰め込むだけ詰め込まれ、走らされたロードレース。伝えたいことが山ほどあったのに、伝える事の許されなかった日々。そんな息苦しかった日々も今日からは違った。全ては終わり、新しい第一歩を幸子と歩んで行ける、そして幸子としっかり向き合う事が出来るんだ。そ

う思うと潤一の心もビーチボーイズの様に波に乗って行けそうな気がした。

そして潤一は「さあ行くぞ。しっかりつかまっているよ！」と言うと、その自由なハイウエイを幸子に乗せて走りだした。

飛行機は多少の時間の遅れはあったものの、ほぼ予定通りの時刻に成田国際空港を飛び立った。

初めのうちは潤一も幸子も、ワインを飲んだり、たわいもない会話で盛り上がっていたが、中国大陸を横断する頃には疲れが溜まって居たのだろう。どちらからともなく寄り添う様に眠りに着いた。そしてそれは本当に久しぶりに感じた安らぎだった。

もう二人の間を遮る物は何も無い。空かし合いの日々も、心を閉ざし続けた日々さえも、今は遠い過去の無の産物にしか成りえなかった。もはや安らぎの前では全ては意味の無いモノであり、全ては優しく二人を包むモノだった。そして潤一はそんな安らぎに包まれながら、少し懐かしい夢を見た。

それはまだ潤一が裏切りや絶望を感じる事の無かった頃の夢だった。

「いいかい。絶対に人に言っちゃダメだよ」

「うん」

「じゃあ、目を開けていいよ」

「わあ、綺麗なお花畑」

「やっと見つけたんだ。だからここはまだ誰も知らない。ここは僕と君だけの秘密の場所なんだ」・・・・・・・・・・・・・・・・

「ねえ、何をしているの？」

「ちょっと待ってて、もう少しだから」

「ねえ、もう振り向いてもいい？」

「ダメ。もうちょっとだから、ほら出来た！」

「まあ、綺麗な首飾り。これを私に？」

「そうだよ。君の為に僕が一生懸命作ったんだから」・・・・・・・・

「ねえ潤君、キスしようか？」

「えっ」・・・・・・・・・・・・・・・・

「僕たちずっとこのままでいようね」

「うん」

「ねえ、ずっとだよ・・・」

「うん」

それは断片的な夢だった。そしてその断片的な夢は記憶となって現れた。永遠の愛、そんなモノが存在すると思っていたあの頃。そして裏切り、崩壊はやがて訪れる。信じたいから信じたのに、裏切られた時は切ない程に苦しかった。そして悲しい程に悔しかった。もう何も信じられない位傷ついて、もう何も信じないと心に決めて乗り越えたあの時。そして心の扉はあの時の思い出を閉じこめたまま重く閉ざされた。

けれど潤一は無意識の中でその扉を開けようとしていた。

潤一は少しうなされる様に目を覚ました。そしてそこには現実があった。

潤一は汗を拭き、喉の乾きを癒す為にスチュワーデスにミネラルウォーターを頼んだ。飛行機の振動の中に伝わる幸子の鼓動。

現実の潤一の隣には小さく寝息を立てて眠っている幸子が居た。飛行機の騒音に混じり聞こえてくる微かな寝息と、肩越しに感じる安らかな温もりは潤一にとって、この何もかもが不確かな世の中で唯一感じる事の出来る、確かなモノだった。

窓の外から朝日だか夕日だか分からないけれど、金色の光が二人を優しく包み込む。そして幸子はその光の中、小さな温もりを確かめる様に眠っている。それはまるで汚れの知らない天使の様に潤一には思えた。例えもし仮にこの先に不幸と言うモノしか存在していなかったとしても、幸子を信じたい。そして守って行きたいと思った。そして潤一は幸せそうに眠る幸子の頬に、優しく口づけをした。それは過去の思い出を乗り越える勇気と、未来の大切な思い出への約束だった。幸子は口づけをされて一瞬微笑んだ。勿論本人はそんな事をされたなんて夢にも思っていなかったが、気持ちは十分に伝わっていた。

潤一はスチュワーデスが持ってきたミネラルウォーターを飲みながら、窓の外を見つめていた。しばらくすると幸子も目を覚まし「わあ、綺麗な空ですね」と言った。そして潤一はそんな幸子に「やっぱり君が持っていたんだ。俺の心の鍵を。それはとても大切なモノだから、絶対になくさないでね」と言った。

飛行機はミラノで若干の時間調整を経て、定刻の現地時間十七時二十五分にトータル十五時間と言う長い時間を掛けて、ローマのフィウミチーノ空港に着いた。

初めて見るイタリアは想像していた以上に、幸子に感動をあたえた。

「わあ、素敵ですね」

「素敵って。まだ空港に着いただけじゃないか」

潤一は手荷物をカートに乗せながら言った。

「でも分かりますよ。この雰囲気は」

潤一も二度目とは言え、確かに幸子の言うように、このイタリアには独特の雰囲気があると思った。

二人は入国手続きを済まし、今日はそのまま空港の近くのホテルに直行した。そしてチェックインを済ました後、ホテルの中にあるピッツァ専門店で食事を取った。

「やっと着いたって感じだな」

潤一はメニューを頼み終えてから言った。

「そうですね。何だか空港に着いてからずっとドタバタしていたので、やっと少し落ち着いたって感じですね」

「ああ、本当ひっちゃかめっちゃかだったからな。でも明日もまた朝早くから列車で移動だから大変だぞ」

「ええそうですね。明日はナポリまで行かなくては行けないですからね。だからローマの夜もとりあえず今日限りって事ですね。ああ、そう考えると今日もまた眠れない夜に成りそうです」

「大丈夫、大丈夫。飛行機の中だってあんなにぐっすり眠ってたから」

「まあ、岸崎さんっていじわるですね」

「ごめん、ごめん。でも本当に気持ち良さそうに眠っていたよ」

「そうなんですよ。私もあんなにぐっすり寝むったのは、久しぶりですよ」

二人はイタリアに着いてホッとしたのか、本来の目的も忘れ新婚旅行にでも来た気分だった。そして出された料理を残さず綺麗にたいらげた。

「本当に美味しかったですね」

「そうだね。ずっと機内食だったから尚更美味しく感じるよ」

「でも明日からは、美味しいなんて言ってもらえなくなりますね」

「まあな。でも美味しい食事があるから、人は頑張れるんだと思うよ」

「じゃあまた美味しい食事をする為に頑張りましょう」

「そうだね。じゃあ今回の役目が終わったら、ローマで一番美味しいレストランに連れて行ってあげるよ」

「本当ですか。じゃあ頑張らなくちゃ」

潤一と幸子は食事の余韻をもう少し味わっていたかったが、やはりここに来た目的、そして日本で待っている仲間達の事を考えると、二人だけいい思いをしている訳にはいかなかった。

「そろそろ部屋に戻って、明日に備えて休もうか」

「そうですね。なんだかんだ言っても、飛行機の中ではゆっくり休めなかったですし、慣れない土地で体でも壊したら大変ですからね」

二人はエレベーターを7階で降り、豪華な絨毯の敷かれた廊下を2

0 m程歩き、そして互いにお休みを言い合い、別々の扉を開けた。

部屋の中はシングルと言うこともあって、それ程広い物では無かったが、その所々に飾られた装飾品がそんな部屋を、落ち着く空間に変えていた。

潤一は取りあえず簡単に荷物の整理をして、会社に国際電話を入れてみた。現地時間で午後十一時、時差が八時間ある日本なら、翌朝の七時と言う所だろう。案の定電話は呼び出し音を意味もなく続けているだけ。さすがに八時半開始の会社に七時に来る者はいなかった。仕方ないので先にシャワーを浴びて、十二時を廻るの確認してから電話を掛け直した。

「はい、アートインターナショナルです」

国際電話独特のノイズに混じって聞こえて来たその声は斉藤のものだった。

「あっ課長ですか。岸崎ですけど」

「おお岸崎か。無事にイタリアには着いたのか？」

「ええまだローマですが、何とか無事に。だから一応報告だけでもと思ひまして」

「そうか。それは良かった。まあ明日から大変かもしれないが、何とか頼むぞ。それと困った事があればいつでも連絡してこい。こっちで出来る事は何でもやれる体制は作って置いたからな」

「はい」

正直言って斉藤のその気持ちは、異国の地に居る潤一にとって何よりも心強いものだった。潤一はそもそも入社以来、余り上司や先輩と言うものを尊敬したり、頼りに思ったりしたことが無かったが、この斉藤だけは別だった。斉藤には他の上司とは違って、余り自分だけがいい思いをしようと言うことは無く、出来るだけ部下を尊重した行動をとっている気がした。正直言って潤一がこの若さでこれだけの重要な任務を任されたことも、斉藤の下で無ければまずあり得ない事だっただろう。けれど企業と言うものは皮肉なもので、斉藤の様に部下を思いやる者は、課長と言うポスト止まりで、その全てのサラリーマン人生が終わってしまうものだった。

潤一は明日からの日程を簡単に説明し、電話を切った。時計の針は十二時十五分を指していた。何はともあれ、勝負は明日からだった。この全ての計画は自分が立てたもの、イタリアに内勤の女性社員を連れて行くと言う大胆な計画。仮に失敗でもしたならば、一番迷惑を掛けるのは、今しがた心強いエールを贈ってくれた斉藤だった。何としてもそれだけは避けたいと潤一は思った。そしてその為には何としてもいい返事を貰って来なければならない。潤一は明日からの為に、ワ

インを一口飲んで眠りに就くことにした。

その頃幸子はベッドの上であることを考えていた。それは潤一が飛行機の中で言った「やっぱり君が持っていたんだ。俺の心の鍵を。それはとても大切なモノだから、絶対になくさないでね」と言う言葉だった。

一体どういう意味だったのだろうか。聞いた時は寝起きだった事もあり、余り意味も分からずにうなずいた。けれどよくよく考えてみるとその意味は複雑だった。やっぱり私が持っていた？ 心の鍵？ 考えれば考えるほどその答えは分からなくなる。けれどその言葉の一つ一つと、あの時の雰囲気を見ると、それは決して自分にとっても悪い意味では無い事だけは分かった。とにかくそれはきっと大切なモノなのだ。そしてそれは絶対に無くしてはいけないモノなのだ。幸子は目を瞑り自分の胸に手をあてて考えてみた。そしてそこには潤一の汚れない純粋な気持ちが確かにあった。

翌朝は七時に二人はホテルを後にした。何としても午前中にナポリに辿り着くためだ。

ナポリまでのアクセスは、フィウミチーノ空港駅から直行列車でローマ市内のテルミニ駅に出て、そこから約二時間の時間を掛けて、ナポリ中央駅まで列車に揺られる事になる。潤一はとにかくスリが多いからと言って幸子から貴重品を預かり、そして幸子の手を引きながらその一つ一つの行程を迅速にこなした。

初めのうちは幸子の手が、初めて手を握った緊張によって少し堅くなっていたが、時間と共にやがてそれは柔らかく、暖かいモノに変わっていった。そしてそれが完全にフィットした時には、二人はナポリ行きの列車に揺られていた。

「ごめんね。何だか慌ただしくしちゃって」

潤一は荷物を網棚に乗せ終えてから言った。

「いえ、私こそ足でまといだったんじゃないですか？」

「そんな事ないよ。しっかりと俺に付いて来てくれたよ。本当はゆっくり色々説明してあげたかったけど、これだけの荷物持って駅でのんびりしていると、スリの格好の餌食に成るから急いだんだ」

「悪い、悪いとは聞いていたのですが、そんなに治安が悪いのですか？」

「そうだね。昼間の町中でも人が多い所は特に悪いね。とにかく日本人は狙われやすいんだ。だから大切なモノは絶対に手でしっかりと握んでいないとダメなんだ」

「そうですか。大切なモノは手にしっかりとですか・・・」

幸子はそう言って自分の手を見てみた。そこにはさっきまで潤一の大きくて、暖かい手の温もりが確かにあった。

列車はローマの町を離れ、田園地帯を走っていた。そして車窓には素朴な風景が広がっていた。

「なんかいいですね。こういう所を見ていると落ち着きますね」

「ああ、そうだね」

潤一も幸子と同じ事を考えていた。元々千葉の九十九里に近い大網に住んでいた潤一にとって、この車窓に広がる素朴な風景は思い出の風景に似ていた。

「神崎の田舎って、確か青森だったよな」

「ええそうです。本当何にも無いところなんですよ」

「そうか。二回ばかり青森にある、うちの会社の北部倉庫に行った事があるけれど、なかなかいい所だったけれどな」

「北部倉庫って青森市内にある所ですよ。市内はまだいいんですけど、私の実家は市内から電車で一時間以上行った所ですから」

「そうか。でも何にも無いって言ってもそれなりにいい所もあるんだろ」

「ええまあ。とにかく私の実家もそうですけど、リンゴ畑がありますね。それと小川があって、そうそう昔は良くその小川で遊んだんですよ。私はこう見えてもカエルとかドジョウとか平気なんです。だから昔は良く男の子達と一緒に捕まえに行ったりしたんです。それと家から学校に行く途中に少し小高い丘があって、春になるとそこに花がいっぱい咲くんです。タンポポだとかコデマリとか。私それが楽しみでいつも学校帰りは寄り道しちゃって、親によく怒られてました。それとですね・・・」

幸子は本当に楽しそうに話をした。そしてそんな幸子を見ていると潤一も楽しい気分に成るものだった。

「一度行ってみたいな。君の田舎に」

「えっ」

潤一のその言葉は幸子にとって意外な言葉だった。

「今度仕事が落ち着いたら一度案内してよ。君の田舎を」

「え、ええ、いいですけど。でもいいんですか、私の田舎なんかで」

「いいんだ。そんなに楽しそうに話す君の田舎って言うものを見てみたいから」

「じゃあ春になりましたら」

「そうだね。春になったら」

列車は小川を超え、幾つかの農家が左から右へと過ぎて行った。遙

か遠くには限り無い地平線が広がり、その先には雲一つない真っ青な空があった。そして春になったら……。そんな二人の約束は、そんな何もかもが漠然と存在する景色の中ではまるで、現実のものとは思えない約束に感じられてしまう。けれど潤一にとっては、あの飛行機の中で見た、過去の記憶の断片を乗り越える為の約束。そう、これからの未来に唯一自分が残せる、幸子との大切な約束の一つだった。

列車は予定通り十一時前にナポリ市内に入った。その頃になると、窓の外から入ってくる風は、港町ナポリらしい地中海独特の乾いた潮風に変わってた。

幸子は列車のスピードが一段階遅くなった事に気が付くと、潤一に言った。

「もうすぐですね」

「ああもうすぐだよ」

それから列車は少しずつスピードを落として、そしてナポリ中央駅内に滑り込む様に入っていった。

ナポリ中央駅はローマの玄関口のテルミニ駅ほどの大きさは無かったが、それなりに大きな駅だった。そしてローマと明らかに違うものは、その駅にいる人たちの熱気だった。

どちらかと言うとローマはイタリアきっての観光地と言うこともあり、色々な人間で埋め尽くされていたが、それに比べてこのナポリにはその様な複合的な人種は無く、太陽と海の町ナポリを象徴するかの様に、情熱と熱気でその多くを埋め尽くしていた。

潤一と幸子は取りあえず荷物をホテルに預ける為に、先にホテルに向かった。

ホテルはナポリ中央駅からウンベルト1世通りを、ニコラ・アモーレ広場を抜けて西に約2キロ位行き、トレド通りを左に折れ、更に2キロ位行ったサンタ・ルチアの海岸沿いにあった。そして潤一と幸子はホテルで早めのチェックインを済ませてから、ホテルの最上階にあるレストランで昼食を取る事にした。

窓の外からはサンタ・ルチアの海岸が見渡す事が出来た。そしてその海岸の手前に見える建物を指さして幸子が言った。

「あそこにある建物は何ですかね？」

潤一は幸子が指さす先を見て「卵城の事だね」と言った。

「タマゴジョウ？」

「そう卵城。正式には確かCastel dell'Ovo、通称卵城って呼ばれているんだ」

「そう言われれば何となく卵に似ている様にも見えますね」と明らか

に卵に見えない城を見ながら幸子は言った。

そんな幸子の純粹さに、卵城と呼ばれる理由を知っていた潤一は思わず笑ってしまった。幸子も潤一に笑われてさすがにやっぱり違うと言うことに気が付くと顔を真っ赤に成った。

「まあ、卵に見えない事も無いが、卵城と呼ばれている理由は違うんだ。あの城が何故卵城と呼ばれているかと言うと、昔あの城を造る時に基礎に卵と一緒に埋め込んだんだ。そして当時の人々はその卵が割れる時、城共々この町も崩れ落ちると信じて大切にしたと言うのが名前の由来に成っているんだよ」

「そうなんですか。でも岸崎さんって本当に何でも良く知っているんですね」

「そんなことないよ。前に来た時にフォルナセッティ社のオーナーのバッジョ氏に聞いた話なんだ。あっそうだ今後の事もあるからバッジョ氏の事を簡単に話して置いた方がいいな」

そう言って潤一はフォルナセッティ社の設立の話しやバッジョ氏の事を話し始めた。

フォルナセッティ社は1958年に元々はローマに設立された会社だった。初めは小規模で国内だけの受注生産と言うやり方をしていたが、そのセンスの良さと丁寧な作りが認められ世界各国から注文が入る様に成り、1975年にバッジョ氏の生まれ故郷のここナポリに本社を移し、本格的な大規模な輸出専門の家具屋として生まれ変わったのがフォルナセッティ社の大体の流れだった。そして一代でここまで築きあげたバッジョ氏は、このナポリと言う港町をとっても愛していた。確かにこのナポリには、ローマの様な豪華な気品さも無ければ、ミラノの様に斬新なきらびやかさも無かった。けれどこの町には情熱があり人の優しさがあった。そして何より誰もが人生を楽しんでいた。それは田舎から都会に出てきて生活をしてきた潤一と幸子には、よく分かった。ナポリの駅を降りてからこのホテルに来るまでの間に感じたことは、この町にはローマでは感じる事の出来なかった生活感を感じる事が出来た。そしてそんなナポリをフォルナセッティ社のオーナー、バッジョ氏はとても愛していると言うことが潤一の知っているバッジョ氏の全てだった。

「私もその気持ちが何となく分かる気がします」

幸子は潤一の話聞き終わってから言った。

「きっとそんな気持ちが、あれだけ魅力的な家具を作り出すんだろかな」

「そうですね。うちの会社の応接室の家具を初めて見た時のあの落ち着く雰囲気、このナポリに来ると分かった気がします」

「まあ何はともあれ、バッジョ氏に会っていい返事を貰わなければな」

「そうですね」

潤一と幸子は食事を済ますと部屋で着替えをして、少し小高い丘の上に建つフォルナセッティ社に向かった。

フォルナセッティ社は、先ほど駅から来たトレド通りを戻る様に行き、エンリコ・ペッシーナ通りの坂をそのまま上り、国立考古学博物館が見えて来るとそこを右に折れ、100m程行った所のカヴール広場の前に、ナポリの町を見渡す様に建っていた。

タクシーを降りて潤一は腕時計を見た。時計の針は一時半を過ぎたばかりだった。とりあえず二人は受付に行き、バッジョ氏に仕事の件で会いに来た事を告げた。

受付には良く日焼けをした大柄の女性と、真っ青なアイシャドウをしたブロンドヘアーの小柄な女性が二人居た。初めは潤一と幸子の事を怪しい二人組だと思って素っ気ない態度をとっていたが、潤一が日本から仕事で来た事を説明すると納得したのか、丁寧な態度でバッジョ氏の不在を英語で説明し始めた。受付の話の聞くとこう言う事だった。

まだこの時間はシエスタ（昼寝）の時間と言う事で、バッジョ氏は今は家に居ると言うことだった。そしておそらくこちらに来るのは二時半過ぎじゃないかと付け加えた。潤一は午後の予定を聞きながらアポイントとって、また来ると言ってフォルナセッティ社を出た。

「お昼寝の時間じゃしょうがないですね」

幸子は潤一の後ろ歩きながら言った。

「まあそうだね。日本に残って居るみんなの事を考えるとお昼寝どころじゃないだろうと思うけど。やっぱりあくせく働く日本を見ると、日本の企業にもこう言うゆとりがあった方がいい気がするね。まあでも何はともあれ焦っても仕方がない、時間潰しでもするか」

そう言って潤一は国立考古学博物館に向かった。

博物館に入ると、思っていたよりも中はヒンヤリとしていた。そして潤一と幸子は博物館内に展示してあるギリシャ、ローマの美術品を、歴史を辿るように眺めて約束の時間まで過ごした。そして博物館内の時計が三時になるのを確認すると、またフォルナセッティ社に向かった。

今度は受付の女性二人は、潤一と幸子を確認するとすぐに笑顔で対応してくれた。そして内線電話で何かやりとりをし、二人を応接室に案内してくれた。

応接室は丁度フォルナセッティ社の3階部分にあり、窓からは素朴なナポリの町と、その先に広がるナポリ湾が見渡せた。そしてそこから左に目をやると、ヴェスヴィオ火山が午後に日差し照らされて、茶色い肌地が光を反射させていた。そしてナポリ湾の先にはうっすらと

ではあったが、カプリ島が真っ青な海の上に浮かび上がっていた。潤一にとってその光景は二度目だった。前に来た時はまだ新人だったから、余りゆったりした気持ちでこの風景を見渡す事は出来なかった。けれど微かな記憶を頼りに思い出して見ると、この窓から風景は勿論、今幸子と居るこの応接室の家具や飾りも何一つ変わっていない事に気が付く。このゆったりとした空間、まるで時間の流れの概念を根本的な所から否定するかのよう感じた。そしてまさにこれこそがバッジョ氏の求める空間だった。

受付嬢は二人にカプチーノを出して部屋を出て行った。そしてそれから五分位たった頃だろうか、バッジョ氏がとても今年で七十歳に成るとは思えない程しっかりと足取りで現れて、そして片手を上げて「Buon giorno!(こんにちは)」と日本からの突然の客人にニコやかなに挨拶をした。

潤一と幸子も挨拶をし、そして突然の訪問をバッジョ氏に説明をした。初めて来た本場イタリア、そして苦虫を噛んだ様な深みのある少し怖い表情のバッジョ氏、イタリア語で訪問の説明をする幸子の声は少し震え、冷や汗すらうっすらと滲み出てくる。潤一も英語でその説明を補足するが、余り英語に詳しくないバッジョ氏には潤一が簡単な会話程度のイタリア語くらいしか話せないのと同様、殆どと言って意味が無い。だから可哀想かもしれないが、何としてもここは幸子の力を信じるしかなかった。そしてその事は潤一にとって、ここイタリアに来るずっと前から心に決めていた事だった。潤一は資料の端に日本語で「自分を信じて、落ち着けば大丈夫だから、頑張ろうな」と書いた。それを見て幸子も少しホッとしたのか、一呼吸置いてから落ち着いた口調に成った。そしてそれぞれの説明を終え、後はバッジョ氏の返答を待つだけと言う所まで何とか辿り着いた。

幸子は全て説明をし終えて、初めて落ち着いた気持ちでバッジョ氏の顔を見た。そうするとさっきまであんなに怖いと思っていた顔も何処となく優しく見えた。確かに顔には白髪混じりの無精髭が口の周りを覆っていたし、目元もイタリア人独特の掘りの深さがあった。けれどその表情や掘りの奥に見えるしっかりと目には、このナポリに来た時に感じた、人情と言うか人の優しさと言うか、今を生きる情熱が感じられた。そしてそんなバッジョ氏は、幸子と潤一に優しく「大体言いたい事は分かった。わざわざ日本から来られたと言う事は余程の事だと言う事も分かった。しかし、少しだけ時間を頂きたい。昔ならともかく、今はワシー人の意見だけでは、すぐにどうこう出来る問題じゃ無くなっているのだから。本当に会社が大きくなると言うのもつまらないものだよ。まあでもたいして時間は取らせないよ。明日までには出来るだけ答えを出すつもりでいるので、それまで待っていて欲し

い」と言った。そして付け足す様に「それとMrジュンイチ、君は一度ワシに会っていると言っていたが、もしかして二年ぐらい前の事か？」と云った。

「ええ二年前に一度この場所でお会いしています」

「そうか。やはり二年前の青年だったか」

「と言うと何か」

「いやいや、二年前に出会った時の君は、ビジネスこそ出来るが、何処となく冷めた目をしていると言う印象があった気がしてな。けれど今の君はとても優しい目をしている。きっとあの時一緒に来られた上司の育て方が良かったのかな、それとも今回一緒に来られたMissサチコが良かったのかな」

バッジョはそう言って幸子と潤一を交互に見た。そして潤一と幸子もそう言われてお互いの顔を見合わせた。

「Mrバッジョ、そう言って貰えると光栄です。まあその件をして言うなら、やはり今日のこの商談を一生懸命頑張った。彼女のお陰だと思えます」

「やはりそうか。ワシもそう思っていた所だよ。本当にMissサチコの頑張りにはワシも心が動かされるよ」

潤一とバッジョ氏のやり取りを聞いて幸子は少し照れた。本当に説明をしている時は無我夢中で、自分でも何を言っているのか分からない時もあった。けれど今こうしてホッとした一時を送れるのは何を隠そう、潤一の真面目な顔で説明をしている時に、言っている事と違う、頑張ろうぜと言う落書きだった。

潤一と幸子はその夜、ホテルのやはり昼食をとった時と同じレストランで、今日のとりあえずの健闘をシャンパンで乾杯をする事にした。

「本当に今日は頑張ったな。きっと上手く行くよ」

潤一はそう言ってシャンパンをグラスに注ぐ。

「そう行ってくれるといいんですが」

「まあ、油断は禁物だけど、大丈夫だろ。あれだけ笑顔の多いバッジョ氏を見るのは初めてだし、それに随分君の事を気に入っていたみたいだったしね」

「ホント信じられないですよ。私はてっきり怒っているのかとずっと思っていました」

「まああの顔で見つめられれば、誰だってそう思うよ」

「でも本当にいい人でしたね」

「そうだね。でも前に来た時はあんなに優しく無かったよ。やっぱ神崎の一生懸命さが伝わったんだよ」

「一生懸命さですか・・・」

「そう。一生懸命さだよ。まあ何はともあれやるだけの事はやったんだ。後は明日の結果次第という事で今日の健闘に乾杯をしよう」

「そうですね」

そう言って幸子はシャンパングラスを手に持った。そして潤一が乾杯！　と言うと、幸子も乾杯と言った。

その日の夜は二人ともなかなか眠れない夜だった。食事が終わった後、潤一は幸子を変な意味じゃなくて、自分の部屋に誘って色々な話をしたい気分だった。けれど食事の時に言った様に、まだハッキリした返事を貰っていなかった二人にとって油断は禁物だった。もしかしたらと言う事も100%無いとは限らない。そうなった時の事も部屋で対策を練らなくてはいけない。潤一は食事を済ますと、本当の祝福は明日にしようと言って別れた。幸子も同様、本当に心の底から祝福をあげるには、まだハッキリとしたものが足りなかった。そして二人は別々に部屋でそれぞれの思いにふけていた。

幸子は部屋の窓から見える灯台の明かりを見つめながら、曖昧な溜め息をついた。そしてその溜め息には色々な意味がこもっていた。

イタリアに来てまだ間もないと言うのに、それはもう明日の結果次第で終わりを告げようとしていた。別に色々な所に観光をしたいと言う訳じゃ無かったが、二人でイタリアに行くこと決めてからの生活が、あまりにも充実し過ぎていたせいなのだろうか。それが明日のバッジョ氏の言葉一つで終わってしまうというのが少し寂し気がした。勿論その後にはいい事があればいいのだけど、日本に帰った後に待っているものは、今まで変わらない生活と、親に対する大きな決断だけだった。そしてその事を考えるとやはり気が重くなる。しかしほんの少しではあったが、その後に繋がるかもしれない、潤一と交わした約束もあった。例えばそれはこの出張の目的が終わったら、ローマで一番美味しいレストランに連れて行ってくれると言う事や、来年の春には自分の生まれ故郷の青森と一緒にいくと言う事だった。けれどそのどれ一つとっても、もう一度口にするが怖いものばかりだった。もしかすると口にした途端に、その約束は消えて無くなってしまふんじゃないかと。ただそんな約束とは呼べない約束の中に一つだけ今でも分からないものが一つあった。それはやはり飛行機の中で言われた[大切なモノだから絶対に無くさないでね]と言う言葉だった。

本当にあれはどう言う意味だったのだろうか。昨日の夜からずっと考えていたけれど、その意味は未だに分からない。もしそれが無くさないでいられるモノなら、無くさないでいたいと幸子は思った。今思えばあの時の潤一の目は何となく寂しそうだったし、何となくその言葉

だけが頼りと言う感じで、誰かにすがっている様にも思えた。不思議な事だけど、あの時の潤一は何となく純粋な子供の様で、自分にすがっている様に感じた。だからこそ何とか自分に出来るものなら、潤一の言うその大切な心の鍵を無くさないであげたいと思った。何故ならそれだけが唯一自分だけで叶える事の出来る、潤一と交わした大切な約束だったのだから。

潤一もまた幸子と同じように灯台の明かりを見つめていた。窓の外からは、地中海から流れる優しい潮風が入って来る。そして潤一は良く冷えたビールを飲みながらその風に身を委ねた。ローマの夜は冬だった事もあり、何処となく冷たさがあったが、ここナポリはたかだかローマから列車で数時間と言う距離なのに、まるで別世界の様に暖かかった。だからこそ、その冷たいビールが喉の乾きを心地よく満たしたしてくれた。乾いた暖かい風、そして良く冷えたビール。ここ数日間の疲れを取るにはそれは十分なモノだった。まあ何はともあれ、明日になればその全てに答えを出す事が出来る。そう考えれば尚更そのビールは美味しく感じた。そして潤一はそんな見えかけた明日にホッとしたのだろう。ぼんやりと見える灯台の先に、今までの自分の人生を思い浮かべて見た。

飛行機の中で見た過去の断片的な夢。それは今思えば自分の唯一青春と呼べたモノだった。まだ当時中学生だった潤一は、勉強の他にもやりたい事や、叶えたい夢が沢山あり、そしてその頃はまだ友と呼べる仲間が居て、恋と呼べる愛もあった。家は特に教育、教育と言う家庭では無かったが、何処の家でもそうであった様に、とにかく良い高校、良い大学、そして良い就職を望んではいた。けれど学校での潤一は、今の様に何をやらせてもそれなりの結果を出せるというものでは無くて、どちらかと言うと好きなものはトコトンやるが、嫌いなものはあまりやらず、生活態度も時々には授業をサボる事もあれば、時々には教師に逆らう事もあると言う、決して両親の望む様な中学生とは呼べるものでは無かった。しかし今になって見れば、そんな中で潤一は潤一なりに大切なモノを学んでいた様な気がした。その頃の潤一にとっては、良い高校、良い就職が大切な事では無くて、自分が将来何をしたいかが大切で、親や教師に逆らう理由もキチッとしたモノがあった。誰かが決めたルールを歩く事が大切じゃ無くて、イバラの道を自分で切り開く事が大切だった。そんな誰もが当たり前にならず事を、潤一も当たり前に出ていた。けれどそんな当たり前の事がある出来事によって当たり前じゃ無くなり、そして気が付いた時には大切なモノすら無くなっていた。

潤一はそこまで思い出して、ビールを一口飲んで深呼吸をした。正直言ってそこまでの事なら今までも何度となく思い出す事があったが、いつもそこまで思い出して、後は曖昧なまま終わらせていた。

理由はハッキリしている。そのある出来事を思い出す事が怖かったのだ。その出来事は潤一にとって一番傷ついた出来事であり、そして一番悲しい出来事だった。だからこそいつもそこまで思い出すとその先に進む勇気が無くなる。もうあの出来事は永遠に自分の心の奥に閉じこめたままで、永遠に思い出す事は無いんだと思ってしまう。本当に出来る事なら思い出さずに済ませたかった。

けれど今までならそれで何となくやり過ごして来たが、今夜の潤一にはそれを思い出して、そして乗り越えなければならない理由があった。

潤一は幸子の事をほんの少し思い浮かべて見た。そこには可愛らしい笑顔があり、優しい笑顔があった。そしてそのどれ一つとっても偽りのモノは無く、全てが潤一にとって純粋なモノだった。潤一は最後のビールを一気に飲み干し、目を瞑って、そして過去の断片を繋ぎ合わせる事にした。

桜木恵美子。彼女の事を思い出すと、未だに潤一の心は痛みを感じた。

恵美子は潤一の住んでいた町に中学一年生の時に東京から引っ越しに来た、とても可愛い女の子だった。

その頃の中学の仲間は、男も女も生まれた時からずっと同じ顔ぶれだった事もあり、恵美子が転入して来た時は、誰もが今まで周りに無かったその都会育ちの清楚な女の子らしさに恋いこがれた。そして潤一もやはりみんなと同様、そんな恵美子の事をすぐに好きになった。しかし当時の潤一はまだ色気も何も知らず、今の様にモテるタイプとは違って、その恋心はなかなか叶うものでは無いと思っていた。それに比べて人気者の恵美子はいつだって潤一にとって高嶺の花だった。けれどそんな対照的だった恵美子を潤一はあるきっかけで勇気を出して誘い出す事にした。それは課外授業で写生会をやった時だった。

各自色々な場所に行って自分の好きな絵を書くと言う事もあって、潤一はみんなに内緒で見つけた自分だけのお花畑に恵美子を誘う事にした。

そこは潤一の学校のすぐ裏にある森を抜けた所にあった。その森自体は大概地元の子供ならば一度は入った事がある森だったが、変質者が時々出没すると言う噂と、正規ルートを通らなければ道に迷いやすいと言う事があって、余り奥まで足を踏み入れた者は居なかった。だからこそ潤一の見つけたそのお花畑は、潤一だけの秘密の花園だった。

潤一はみんなが森の手前で写生場所を取りあっている中、恵美子にこっそり「ねえ桜木さん。凄く写生にいい場所があるんだ。もし秘密を守れるなら教えてあげてもいいよ」と言って恵美子を誘った。恵美子は相手が潤一だったからかは分からないが、潤一が思っていたよりもすんなり「秘密は守るから、案内して」と言った。そして二人はみんなに分からない様に森の奥に入って行った。

いつも通る道、他の人はともかく潤一にとっては目を瞑っても通れる程慣れた道だった。潤一と恵美子は途中途中に咲いている花や、景色をを見ながらその慣れた道を歩いた。そして森の幾つかの分かれ道を抜けて、もう少しでいつものお花畑に出ようとした時に、潤一は恵美子に目を瞑って欲しいと言った。

最初のうちは恵美子も余り口の聞いた事の無かった潤一と、そして少し暗くなった森の中と言う事もあって不安がっていたが、潤一の人の良さや、大丈夫絶対に怖くないからと言う言葉を信じて目を瞑った。そして潤一は目を瞑った恵美子の手を優しく掴んで、ほんの少しの距離を歩いた。初めて触れた女の子の手、そしてほのかに香る女の子のいい匂い。潤一にとってはそれは、かけがえの無い体験だった。そして何より潤一にとっては、その先のお花畑を見て喜ぶ恵美子を想像する事が何よりも幸せを感じる事だった。

案の定恵美子は潤一が案内したお花畑を見て嬉しそうに「まあ綺麗なお花畑」と言った。

それからだった、潤一と恵美子が二人だけで良く、その二人だけの秘密の花園に行くようになったのは。そして潤一と恵美子はそのお花畑で色々な事を話し、そして少しずつではあったが手探りで愛を育ていき、やがて幾つかの季節と共に、お互いの心の距離を象徴するかの様に呼び名が、岸崎君から潤君に変わり、桜木さんから恵美ちゃんに変わっていった。そしてそんなある時、潤一の初めての体験のファーストキスの瞬間が訪れた。そしてそれは恵美子の一言だった。

その日はいつもの様に二人だけでお花畑に来ていた。そして潤一は恵美子の為に大きな花の首飾りを作って渡した。初めは恵美子もその首飾りを喜んでいたが、やがてふとした事から二人は無口になった。潤一も何かを言いたい気持ち心が膨れ上がっていたが、何をどう言えば良いのか分からなかった。恵美子もきっと潤一と同じ気持ちだったのだろう。二人は黙ったまま、大きな木の幹に寄りかかって座り、遠くを見つめていた。そしてそんな壊れそうな沈黙を破ったのが恵美子の「ねえ潤君。キスしようか」と言う少し震える声で言ったセリフだった。

潤一は初め少し驚いて「えっ」と聞き返したが、まだ十三歳の女の子の恵美子が、恥ずかしさを乗り越え、勇気を出して言ったその言葉

を受け入れて、自分から手を握り、そしてその震えている体を抱き寄せて、優しく恵美子の透き通る様な唇に口づけをした。

初めて触れた女の子の体、まだ発育途中の小さな胸、そして強く抱きしめると壊れてしまいそうな純粋な想い。全てが潤一の手の中にあった。やっと手にいれた幸せ、もう他には何も要らなかった。「僕たちずっとこのままでいようね」と潤一が言うと、恵美子が「うん」とうなずいた。そして更に強く潤一が「ねえ、ずっとだよ・・・」と言うと、恵美子は更に強く「うん」とうなずく。

そして信じ合う事しか出来ない無力な二人は、このお花畑にしか存在出来ない約束を交わし、永遠に離ればなれに成らない様に、強く抱き締め合った。

けれどそんな幼い二人の前に崩壊はやがて訪れた。そしてそれは潤一が親友に言った事が原因だった。

潤一は恵美子と付き合っている事をどうしても一人で抱えている事が出来ず、唯一信頼が出来ると思っていた親友のタケシだけに、絶対に他の者には言わないで欲しいと言う堅い約束のもとで言った。

潤一にとってそれは決して誰かに自慢をしたかった訳ではなく、ただ愛と言うモノを知らなかった潤一が、唯一親友のタケシだけに打ち明けた相談だった。けれどそれは潤一の約束とは裏腹に、次の日にはクラスの3分の1くらいの生徒に広まり、やがてクラスの全員を通り越し、学年中の噂になった。それが潤一が受けた一つ目の裏切りだった。

勿論思春期の世代の男と女が、淡い恋心を胸に異性と付き合う事には何一つ間違いは無かった。けれど例えばそれが恋愛に疎い小さな田舎町で、どんな小さな事にも興味を持ちたがる感受性の強い集団の中では、誤りに変わる事もあった。ましてや愛の守り方さえ知らずに、ほんの小さな出来事でさえ傷ついてしまう二人にとってそんな噂は、やっと出会った小さな愛も育てきれずに壊れてしまうには充分過ぎる程の噂になってしまう事だってあった。

それからとはとても早かった。まず二人がクラスで話しをしていると、それをはやし立てる者が現れ始めた。ひどい時には二人で学校帰りに歩いていると、それを嫉んで石を投げる者もいた。勿論潤一はそのたびに怒ったが、それは感受性の強い集団の中では無駄な抵抗でしか無く、その集団の行動は反発すればするほど、更にエスカレートするばかりだった。そしてその嫌がらせはエスカレートし過ぎて、最後には殆どイジメに近かく成って行った。

潤一は人気のあった恵美子と付き合っているなんて生意気だと言う理由だけで、知らない上級生に突然殴られた事もあれば、朝学校に行く自分の机の上にイヤらしい落書きをされている事も日常的になっ

た。恵美子の方もそれまで沢山居た友達も段々減っていき、最後には無視する集団まで現れた。そこまで行くともう潤一と恵美子の力だけでは止める事も出来なくなる。そして恵美子の涙も日毎に増して行った。もはや二人の居場所は学校の中には無くなり、秘密の花園に現実から逃げる様に追い込まれていった。

二人が唯一安心出来る秘密の花園。それが二人に残された最後の砦だった。

潤一は花園に来ると悲しい顔をしている恵美子を、自分も泣きたい気持ちを堪えて、いつもアザだらけの顔で笑えないほどつまらないジョーダンを言って笑わせた。恵美子もそんな潤一の悲しくなる程の優しさだけが心の支えだった。その頃に成ると二人は殆ど学校に行かなく成っていた。朝は家をちゃんと出て行くのだけれど学校の門は潜らず、どちらが誘う訳でも無く二人だけの秘密の花園に来た。潤一は恵美子に「僕が働ける様に成ったら、一緒にこの町を出て暮らそう」と約束をしたけれど、まだ中学二年生にも成っていない幼い二人には、叶わぬ遠い約束にしか感じられなかった。潤一が初めて口付けを交わした時に思った、もう他には何も要らないと言う気持ちが、今は皮肉な事に現実的になってしまい、本当に二人には何も残されてはいなくなった。そしてそんな二人に春先のまだ冷たい風は、悲しい過ぎるほどに冷たく感じる。潤一は恵美子の小さな体を優しく抱き締めた。恵美子も潤一だけが頼りだとも言う様に、潤一のか細い腕にしがみついた。本当にこの秘密の花園だけが唯一二人が生きて行ける場所だった。けれどやがてこの最後の砦すら二人から奪われた。

さすがに学校の方も、二人が一週間以上も無断欠席をするとそれなりに大きな問題になった。家に帰れば両親に何処に行ってたんだと追求される。勿論潤一も恵美子も、行き場所だけは言わなかった。そして何故学校に行かないのかも言わなかった。正確に言うとそれは言わなかったのじゃなくて、言えなかった。親や教師に言ってどうにか成るとは思っていなかった事もその理由だったが、本当の理由は、まだ十四歳に満たない幼い二人が恋をし合っているなんて言っても誰一人認めてなんてくれなかったし、きっと全ての大人すら二人の愛を壊してしまうモノだったから・・・。

そして家にも居場所が無くなると潤一と恵美子は家出覚悟で家を飛び出した。けれど遠くに逃げるお金すら持っていない二人の行き場所はやっぱり決まっていた。二人は秘密の花園でその夜初めて心と体で愛し合った。潤一は強く恵美子を抱き締めた。そして恵美子も潤一に強くしがみついた。本当に二人は必死だった。必死に互いを求め、必死に自分たちのその小さな愛を守ろうとした。だからこそ死にたくも

なった。けれど幼い無力な二人には、毒薬すら手に入れる術が無い。ロミオとジュリエットにさえ成れやしなかった。ただ残された道は、この春先の冷たい風が二人の体温を奪い、そして遠くの暖かい楽園に運んでくれる事をただ望むだけだった。

恵美子は潤一から貰った幾つかの花の首飾りとカーネーションの髪飾りだけを身に付けて、生まれたままの姿で潤一の腕の中で幸せを夢見た。潤一も生まれたままの姿で恵美子の愛に触れていた。そして二人の体温はやがて少しずつ現実の凍て付いた風に奪われていく。そして後もう少して、その二人が求めた本当の花園に手が届きそうになったその時に、遠くの方で幾つかの光の筋と、何人かの呼び合う声が微かに聞こえて来て、それから数分のうちに、二人は地元の消防団に身柄を確保された。潤一は幻覚と現実の狭間で恵美子を求めた。その時一瞬恵美子が微笑んでいる様子にも見えたが、その幻はすぐに消えていった。そして潤一と恵美子は別々の担架に担ぎ込まれて引き離された。潤一は必死に恵美子に近づこうとしたけれど、その力すら殆ど残ってはいなく、寝返りさえ出来ない状態だった。潤一は少し不安だった。最後に恵美子に触れた時に自分の体温も限界に近かったにもかかわらず、恵美子の体の方がほんの少し冷たく感じた事が。けれどそれを確かめる事も出来ないまま二人は、別々の救急車で自分の意志とは関係なく、別々の世界に運ばれて行った。それが恵美子との最後の別れだった。そして次に潤一が目覚めたのは、丸一日過ぎた次の日だった。

勿論目を覚ましたからといって、そこに自由は無かった。勿論隣に恵美子もいなかった。潤一はその病院で二日間過ごして、それから重い意識障害と言語障害があるという理由で、東京にある大学病院に移らされた。その間潤一は誰とも口をきかなかった。一日中恵美子に贈った髪飾りを見て過ごした。何故だか最後にその髪飾りを握っていたらしかった。だから潤一にとってあの夜の出来事、そして恵美子を唯一感じる事の出来るその少し潰れた一輪のカーネーションが全てだった。けれどその潰れたカーネーションの様に二人の愛は壊されてしまった現実も、同時にそこには存在していた。誰もが口を閉ざしている様だったけれど、恵美子が死んだ事は分かっていた。刑事らしい人が何度もその時の状況を話して欲しいと言って来ていたし、この世の中を唯一恵美子と共有していた潤一には、もうこの世の中に恵美子が居ない事は心で感じた。けれど不思議な事に悲しみは無かった。勿論喜びや生き甲斐なんてモノも無かった。正直言ってもうどうでも良かった。ただ一つの事実が無くなり、一人の恋人が死んだ。ただそれだけだった。

潤一は三ヶ月間の間、その病院でリハビリと横浜にある私立中学に

転入する為の試験勉強をさせられた。潤一は千葉の田舎の中学に戻っても別に良かった。勿論昔の様に明るい中学生活を送れるとは思っていなかったが、何処に行っただけそれは同じ事だったから、その事に対してはどうでも良かった。

けれど親にしてみればこれだけ大きな問題になってまともに潤一が居られはしないと、全寮制の横浜の学校に編入手続きをとった。本当は親も引っ越しでもしかたのだけれど、仕事の関係上それは出来なかったみたいだった。だから潤一だけが退院と同時に横浜の学校に行くことになった。それが潤一の田舎の最後の思い出だった。

潤一は酷く喉が乾いた。そして思っていた以上に苦しかった。もう既に冷蔵庫に入っていたビールは全て空に成っていた。窓の外から吹き込んでくる風は重く生暖かいものを感じる。やはり全てを思い出すべきじゃ無かったのかもしれないと潤一は思ったが、それは今全てを思い出してしまった潤一にとって無意味な言葉だった。もうかれこれあの出来事から十年以上経っていたが、それはやはり生々しい記憶として残っていた。恵美子と幸子はどことなく似ている気がしたが、重ね合わせる事は出来なかった。勿論重ね合わせる事に意味は無かったし、例えば仮に重なったとしても、過去と現在では明らかに違うものだった。とにかく今自分に出来る事は、その過去を乗り越えて、あの時に叶わなかった愛を叶える事だった。

潤一は苦しさの中で微かな期待を胸に、幸子の部屋に内線電話をかけた。[P u p u p u p u] と呼び出しのすぐ後に幸子は出た。そして潤一は夜中の呼び出しを謝り、もし大丈夫だったらビールを何本か持って来て欲しいと言った。幸子は潤一のかすれた声を聞いて、大丈夫ですか？ と心配そうに言ってから、すぐにビールを二、三本持って潤一の部屋にやって来た。そして少し顔色が悪い潤一を見て、少しベットで横になってくださいと言って、冷たい水と水で冷やした冷たいタオルを作った。潤一は幸子に言われるままに冷たい水を一口飲んでベットに横になり、冷たいタオルで頭と胸を拭いた。

「本当にごめんね。そんな心配そうな顔しなくて大丈夫だから。ちょっと悲しい事を思い出したただけなんだ。でももうだいぶ良くなったし」

そう言う潤一のセリフは言葉とは違ってどことなく力無かった。

「本当に大丈夫なんですか？ 何か私に出来る事があれば教えてください」

そう言って幸子は温くなったタオルを新しいものに変えた。

「ありがとう。でももう大丈夫だから。本当にごめんね、こんな夜中に変な心配かけちゃって」

「私は構いませんけど。もしじゃまじゃなければ、もう少しそばに居

ていいですか？ まだ顔色悪いですし、それに何だかとても寂しそうに見えますから」

幸子のその気持ちは、過去の記憶と戦っている今の潤一にとって何よりも支えだった。だからこそ何としてもここで負ける訳にはいかない。潤一は弱さも恥ずかしさもさらけ出し、幸子に手をさしのべた。そして幸子も何とか力になってあげたいと言う気持ちで、その手を黙って優しく握った。少し冷たい潤一の手、そして少し暖かい幸子の手。それは今、共に一つの壁を乗り越えようとしている二人にしか分からない気持ちだった。そして潤一は今度は幸子の手をしっかりと握ったまま、再び過去の記憶を乗り越える為の旅に出た。

次の日は、窓から差し込める朝の優しい光の中で目を覚ました。頭の上のタオルは、変えてからまだそんなに時間が経って居ないのだろう。その冷たさと幸子の優しさがほんのりと残っていた。そしてベットサイドには一晩中看病をしてくれていた幸子が、落ち着いた潤一を見てホッとしたのだろう。朝の優しい光に包まれて、疲れて眠っていた。そして潤一の手はしっかりとその幸子の両手の中に確かにあった。

潤一は幸子を優しく抱き締めて「ありがとう。やっと乗り越えたよ」と言った。

幸子はこの前同様、その潤一の言った意味が分からなかったけれど「良かった。本当に良かった」と安心して言った。そして地中海の向こうから届くその朝の光は、そんな二人をいつまでも優しく包み込んでいた。

それから二人は別々の部屋でシャワーを浴び、そして一緒に朝食をとった。潤一も幸子もそれぞれの疲れはあったものの、本当の意味で心の安らぎを求めるのは今日の結果を聞いてからと言う事もあり、それまで疲れた顔をしないように決めた。勿論潤一には幸子に大きな借りがある、けれどそれのお礼すらその結果を聞くまではお預けだった。潤一と幸子は早々に食事を切り上げて、昨日と同じ道順でフォルナセッティ社に向かった。

少し小高い丘の上に建つフォルナセッティ社から見えるナポリの町は、昨日の午後の強い日差しの中で見たものより優しく見えた。そしてバジヨ氏は相変わらず陽気に二人を迎えてくれた。潤一と幸子はその陽気に振る舞うバジヨ氏を見れば、大体の結果が予測できた。潤一は出来るだけ早く答えを聞きたくて自分の方からその話題を切り出した。

「Mrバジヨ。それでいい返事は頂けるのでしょうか？」

バジヨもそれを言われて思い出したかの様に言った。

「そうだったな。君たちはそれが一番気になると所だったな。
Mr ジュンイチ。グッドニュースだ。とりあえず昨日アメリカの業者に問い合わせた結果、君たちが持ってきたリストの3分の2は納期が遅れてもいいそうだ。だから至急それを日本に回す様にしよう。それと残りの物は、うちの支社で国内用に確保していた物を振り分けられそうだから、それで対応したい。ただ正式には今日ローマ支社で開く役員会議でこの提案が通ればの事だが……。まあでもそれは大丈夫だろう。幾らワシの力だけではどうにもならないと言っても、それぐらの力はまだまだ残っているからな。まあ大船に乗った気持ちでいて欲しい」

勿論潤一と幸子としては、例えそれが泥船だろうが乗るしか選択肢はなかった。

「本当に助かります。なんせ日本からみんなの期待だけを背負って来たものですから、いい返事を貰って来ないと帰れそうも無いもので」
「いやこちらこそ、申し訳ない事をした。私に全て話が通ってれば君たちをこんな遠い所まで来させないで済んだんだが、昨日も言ったように、このフォルナセッティは殆ど部下任せになっていてな。彼らも会社の為、会社の為と言いながらどうしてもビジネス的に、昔からの取引先よりマーケティングの豊富な企業を優先的にしてしまうんだ。けれどワシは違うと思っている。どんなに収益があるとしても、ベルトコンベアー式に作り上げた家具には魅力が無い。やはり一つ一つ丁寧に作り上げて、本当に喜んでくれる人の為に作っていかなければ意味がない様な気がするんだ。けれど若い時はどうしてもそう言う大切な事が見えなくなってしまっただけでな。この年に成って気付いた時には、もうワシの手を抜けて別のモノに成っていたよ。いや本当に今に成って思うと、汗水流して一生懸命作っていた頃が、一番充実していたような気がするよ……」

バジジョは昔を思い出す様な目で遠くを見ていた。そして顔に刻まれた一本、一本のシワが、そんな昔の思い出を物語っていた。

潤一はそんなバジジョ氏の気持ちが何となく分かった。けれどそれと同時に自分にはまだ幾らでもやり直せるチャンスもあった。

「Mr バジジョ、その気持ちはよく分かります。けれどこんな若い僕が言うのも生意気な事かもしれませんが、まだ終わった訳じゃ無いと思います。僕の知っている顧客で、ずっとフォルナセッティ、いや貴方の作った家具を愛し続けている人もいます。それにまだまだ日本にも、貴方の作った素晴らしい家具を知らない人も大勢います。正直言って僕も貴方が作った本当の家具を知らない一人なのかもしれません。だからもう一度作ってみてはいかがですか？」

潤一は自分の気持ちをストレートに言った。勿論そこにはビジネス

なんてモノは一切存在しなかった。

「私も是非見てみたいです」

バッジョはそんな二人の気持ちがとても嬉しく思えた。

「まだ終わってないか・・・」

「ええ、まだ終わってないです。Mr バッジョ、実はまだ企画段階の話なので、ここだけの話にして置いて欲しいんですが。実は僕が企画しているもので、イタリアの家具の素晴らしさを日本に広める為に、イタリアフェスティバルと言うものを、東京ビックサイト辺りで開くと言う企画があるんです。どうです、もしその企画が通ったあかつきにはビジネス抜きで、そのフェスティバルの目玉としてMr バッジョの心を込めた家具を展示されては」

潤一はイタリアに来る前から、何度か企画会議に提案をしていた事のあった企画をバッジョに言った。そしてその企画は本当に潤一が前から実現させたかった企画でもあった。

「Mr ジュンイチ、そしてMiss サチコ、君たちの言う通りだ。まだ人生終わった訳じゃ無い。歳をとるとどうも消極的になっていかな。Mr ジュンイチ、その企画が通ったあかつきには、是非出展させてもらうよ。本当に君たちは素晴らしい若者だ。こんな事で言うのもなんだけれども、今回二人に会えて本当に良かった。あっそうだ。今夜ローマでパーティーがあるのだけれど、どうかね、二人で是非そのパーティーに参加して頂きたい。その時に必ずいい返事が出来るようにして置くから」

勿論二人には断る理由は無い。

「ええ、喜んで出席させていただきます」

そして二人は七時にローマのスペイン階段の近くのホテルで待ち合わせをすると言う約束と、その時に必ずいい返事をすると言う二つの約束を交わして、フォルナセッティ社を後にした。

潤一と幸子はホテルに戻るとすぐにチェックアウトを済まし、行きと同じ道取りでローマに向かった。本当はバッジョ氏に、自分も今からローマに行かなければ成らないから、どうかね一緒に自分のセスナ機でと言われていたが、ホテルに戻って色々しなければ成らないのでと言って断った。けれど実際はホテルでゆっくりしている時間は無く、慌てるように名残惜しいナポリを後にした。

行きと同じ列車の窓は、行きと同じ景色を移していたが、その景色を見る二人の気持ちは明らかに違うものだった。

「まあ何とか辿り着いたって感じだな」

「そうですね」

「でも、こう結果が伸び伸びになると、何となくスッキリしないけど、あのバッジョ氏がああまで言ってくれたんだ。それだけで十分って気

もするよ」

「本当そう思いますね。それに岸崎さんのあの気持ちの籠もった企画をととても喜んでいましたね」

「ああそうだね」

「でも本当なんですか？ そのイタリアフェスティバルって言う企画は」

「ああ、前から何度か企画会議に提案をしていたんだけど、この前の企画会議の時に何となく行けそうな手応えはあったよ。けれどその矢先に今回のこの出来事じゃん。また再検討に成るかもしれないね。でも何としても実現させたいんだ。あのバッジヨ氏の笑顔を裏切れないからね」

そんな嬉しそうに言う潤一を見て、幸子にはうらやましく思えた。それに比べて今までの自分にはそんな仕事の中で見いだす夢が無かった様な気がした。確かに一生懸命やってはいたけれど、それは何かに向かってと言うよりも、ただ目の前の事を処理してただけで、その先に繋がるものなんて無かった。だからこそ親に戻って来て欲しいと言われると、曖昧な返事しか出来なかった。それに比べて目の前で嬉しそうに夢を語っている潤一は、まるで別の世界の人を感じられた。

「いいですねそう言う目標があるという事は。何とか実現させてください。私も応援しますから」

潤一は幸子の余りパツとしない返事に、何となく幸子の寂しい気持ちが分かった。けれどそれは自分で乗り越えなければ行けない事、ただ潤一がしてあげられる事は、「えっ、応援？ 何のんきな事言ってんだよ。確かにこれは俺が考えた企画だけど、この企画は神崎、君と一緒に叶えるんだよ」って言ってあげる事だけだった。そして同時にそれは潤一の夢でもあった。

「えっ」

「さっきバッジヨ氏と話している時に決めたんだ。君と一緒に叶えたいと。一緒に叶えてくれるか？」

「えっ、あっ、は、はい！」

今度は幸子にも心からの笑顔があった。

列車は予定通りに、三時前にローマ市内のテルミニ駅に着いた。それから二人は地下鉄でスパルニャ駅まで出て、そこからタクシーでヴェレ川沿いに建つホテルに向かった。

そのホテルは前に潤一が泊まった事がある、落ち着いた雰囲気があるホテルだった。そして幸子もそのホテルを見て、一目で気に入った。二人はチェックインを済ませすぐに町に出た。それには大きな理由があった。

電車の中で気付いた事だったのだけど、パーティーに行く約束をしたのまでは良かったが、よくよく考えると二人ともパーティーの用意を何一つ用意していなかったのだ。潤一は最悪、スーツにちょっとした小物を付けて誤魔化す事も出来たが、女性であった幸子はスーツや普段着と言う訳にはいかない。パッジョ氏主催のパーティーならばそれなりの人たちも集まるはず、幾ら急な話だとしても、それなりの格好をして行かなければ失礼になる。潤一としては自分はどうかであれ、幸子にだけは恥ずかしい思いをさせたくは無かった。だから潤一は幸子を連れて町に出た。

まず最初に二人が行ったのは、イタリアで人気があるヴァレンティノの店だった。店の雰囲気も店員の接客態度もとても良く、幾つかの素敵な服もあった。けれどどれもイタリアの女性を対象に作られた物で、日本人の幸子に合う服は見つからず、もし仮に手直しするにも最低二日はかかるという事で諦めて店を出た。最後に店員の話では、日本人の買い物客の多いミラノならともかく、ローマで探すなら、日本人に人気があるヴェルサーチや、ブラダの専門店に行った方が良いとの事だった。二人はとりあえず近くのヴェルサーチの店に行く事にした。ヴェルサーチの店は外側の素朴な造りの建物とは違い、中はさすがジャンニ・ヴェルサーチと言わんばかりに、ゴージャスな品揃えを見せていた。けれどそこに揃っている服は、似合いそうな物はサイズが合わず、サイズが合う物は似合わずと言う皮肉なものだった。仕方なく二人はそのゴージャスな店を出た。

時計の針は既に五時を廻ろうとしている。例え良い服が見つかって、ホテルでそれに着替えて行くには、最低一時間は見なければ成らなかった。だから必然的に最初の店で店員が言った、ブラダの店が二人にとって最後の願いだった。

まあ何はともあれ行くだけ行ってみよう。潤一は少し落ち込みそうな幸子の手を引いて、スペイン広場のすぐ目の前にあるブラダの店に向かった。店の前に来るとそこがブラダの店とすぐに分かる様な、モダンな造りの建物と、ショーウィンドーにはブラダらしいエレガントなドレスが並んであった。そして潤一と幸子は最後の望みを込めてそのドアを開けた。

店の中は外から見るとよりも広いスペースを持ってはいたが、今まで見た店と比べるとそれは物足りないものだった。けれどそんな中、微かな期待もあった。丁度店の中では幸子と同じくらいのスタイルをした日本人女性二人が会計を済ませ、嬉しそうにPRADAと書かれた袋を持って店を出ようとしていた。潤一はすぐに店員を呼び、今夜パーティーがあるんだ。だから彼女に合った服を至急探して欲しいと英語で言った。店員も日本人に成れているらしくすぐにOKと言い、幸

子の体のサイズを測りだし、幾つかのパーティドレスを用意した。大体どれもサイズ、センスと、問題は無かった。その一つ一つを着ては現れる幸子は、どれも自分にはもったいないと言い、少し恥ずかしそうだった。確かに店員のセンスは悪くなかった。幸子は私なんかを着ても似合わないですよ、と言ってはいるが、昔から美人ばかり見て来た潤一には、どれも幸子の良さを引き出してくれているのが良く分かった。けれど潤一はそのどれ一つにも心からこれだ！ という気持ちが湧かなかった。それは店員のセンスが悪い訳でも無ければ、幸子が洋服負けしている訳でもない。ただ潤一にはさっきから気になっているドレスがあった。それは店のショーウインドーに飾られた、淡いピンクに薄らと花柄の付いたドレスだった。潤一は店の店員に言ってそのドレスを見せて欲しいと言った。幸子は慌てる様に、あんな素敵なドレス私には似合わないですよ、と言ったが、潤一のせっかく来たんだから着てみるだけ着てみなよ、という言葉に負けて、着替える事にした。着替え終わった幸子、先に現れた店員の顔を見れば、似合っているのは間違いなかった。そしてその後からピンクのドレスに身をまとして現れた幸子は、今までのどんな女性よりも美しく見えた。決して派手すぎないエレガントなドレス、そしてそれに一步も引けをとらない幸子。店員も本当に良くお似合いですねと言う位、それは良く似合っていた。潤一は幸子の意見も聞かずに、店員にそのドレスに似合う靴もそろえて欲しいとすかさず言った。そしてすぐにそのドレスに合う靴が二、三足用意された。その間幸子は、こんな素敵な洋服私にはもったいな過ぎますよ、と言っていたが、けれどじゃあどれがいいの？ と聞かれると、返す言葉が見つからなかった。結局潤一の言う事に従うしかない。けれどそれは決して悪い気持ちでは無かった。

潤一は一通りの物が揃ったら最後に赤いバラのアクセサリーと一緒に会計を頼んだ。店の店員はショーウインドーのドレスがとても似合っていたから、その赤いバラのアクセサリーは店から是非プレゼントしたいと言った。潤一はその気持ちに素直に有り難うと言って、そしてカードで支払いを済ませ店を出た。

幸子は一体いくらだったのですか？ 日本に戻ったら払います、と潤一の後ろ歩きながら言った。

「いいよ。だって会社の経費で買ったんだから」

潤一はそんな事を言っているが、経費でなんか落ちない事を内勤をしていた幸子が一番分かっていた。

「経費でなんて落ちないですよ」

「あれ、知らないの？ 実はうちの社長から神崎の服を買う為のお金だ！ って多額のお金をこの前もらってばかりなんだ」

「それってボーナスの事ですか？」

「そうとも言うのかな。まあとにかく、俺からのプレゼントだと思って大切に着てくれよ」

潤一はそう言ってタクシーを止めた。

幸子としては、あの初めての食事の時もそうだった様に、きっとこれ以上言ってもお金を払わせてはくれないなら、素直にありがとうと言うしかなかった。

「どうもありがとうございます。とても大切にします」

「そうだよ。とても大切にしてくれ」

そして二人は急いでホテルに向かった。

二人は予定通り七時までに何とか、バジジョ氏との約束のホテルに辿り着いた。そしてパーティーは丁度そんな二人を待ち受けていたかの様に始まりだした。

会場は思っていた通り、とても広い会場だった。そしてそんな広い会場の中、バジジョ氏はすぐに見つかった。丁度主催者のスピーチを始める為にステージの上に立っていたのだ。そしてバジジョ氏のスピーチが始まった。

「ええ、みなさん。今宵はお忙しい中、わがフォルナセッティ社のパーティーにお集まり頂きまして誠に光栄です」

バジジョ氏のスピーチの内容は、今年のフォルナセッティ社の成長と、来年への展望だった。そして話も終盤にさしかかった時に、丁度潤一と幸子の方を見て、「それと、今夜この会場に日本から私の友人が二人来ているので、是非みなさんに紹介したい」と言って、潤一と幸子に手招きをした。

二人ともステージに上がると「ええ、こちらがMrジュンイチ、そしてその隣の美人な女性がMissサチコ」と紹介された。

さすがに二人とも突然の紹介に戸惑っていたが、その場の暖かい声援を受け、イタリア語で簡単な挨拶をした。そしてパーティーは本格的に始まりだした。

パーティーの最中は殆どバジジョ氏との会話で盛り上がった。そしてバジジョ氏は二人を色々な国際的知名人に紹介してくれた。そこには次世代のイタリアを背負う若手No1のファッションデザイナーも居れば、世界的に有名な建築家も居た。これもひとえにバジジョ氏の人柄なのだろう。そしてバジジョ氏を含めそれらの人々が必ず口にしたのが、ピンクのドレスを着た幸子がとても素晴らしいと言う事だった。勿論幸子はお世辞だと思っただけだが、それだけの人に言われると嬉しく無い訳は無かった。そしてパーティーも終盤を迎えた頃、バジジョ氏が言った。

「ジュン＆サチ。そうだ大切な話がまだあったな。色々心配させたが

今日の会議でやっと通ったよ。至急明日から対応させるから何とか君たちも成功させて欲しい」

やっと聞いたその答え。それは想像以上に嬉しくなった。二人はバジヨ氏に握手を求め、心からありがとうを言った。そしてパーティーが終わった後、今度落ち着いたらまたイタリアに遊びに来ると言う約束と、今日言ったイタリアフェスティバルを実現させ、必ずこのお礼はすると言う二つの約束を交わし、別れ惜しむ中パーティー会場を後にした。

やっとホッとしたと言うのが二人の本音だった。そしてそれは日本で待っているみんなの為と言うモノじゃなく、何だか自分の人生に対しての様なモノだった。

潤一は潤一なりに色々なモノを背負って来ていた。そして幸子も幸子なりに色々なモノを背負って来ていた。そしてそれは今、ローマで答えを出せた。二人はスペイン広場でそんなそれぞれの思いを噛み締めていた。けれど本当の答えはその後だった。

「でも本当に良かったな」

「ええ、本当に良かったです」

そして二人はとりあえずお酒の酔いと、熱気をローマの夜風で、少し冷やしたいと気持ちで、スペイン階段に座る事にした。

「はい、どうぞお嬢様」

そう言って潤一は白いハンカチを階段に敷いた。そして幸子はありがとうと言ってその上に座った。

花に囲まれたスペイン階段。そして小さな街灯と建物から零れる光だけに照らされているスペイン広場と、バルカッチャの噴水から流れる水音は、そんな空間をシックなものに変えていた。

そしてそんな空間に座っていると二人はとても素直な気持ちなれた。

色々言い尽くせなかった気持ちや、伝えられなかった気持ちは、今なら言えそうな気がした。けれどそんな素直な二人からは何一つ言葉は出ない。二人はただその目の前の景色に、お互いの気持ちを写しているだけだった。そして潤一はポケットから一つの小さなカードケースの様な物を取り出して見ていた。

「何を見ているんですか？」

幸子はただ興味心だけで聞いた。けれど潤一の口から飛び出した言葉は意外なモノだった。

「えっ、あっこれね。この中に好きな人が写っているんだ」

「えっ」

幸子はまさかそんな言葉が返って来るとは思ってもいなかっただけに、それは一瞬にして心を引き裂いた。

けれどそれは初めから分かっていた事だった。ただちょっとだけいい夢を見ちゃっただけなんだ。もしかしたら私にも幸せが来るんじゃないかって。

確かに飛行機の中で言ったセリフ、そして昨日の夜の出来事は自分との出来事だった。けれどそれはたまたま自分がそこに居ただけで、本当に潤一が求めたかったのは、今頃日本で潤一の帰りを待っている、その写真の中の女性だったのだろ。

ただ自分がたまたまそこに居て、たまたま幸せを夢見ちゃっただけなんだ。けれど幸せだったと思わなくてはいけない。少なくともいい夢は見れたのだし、色々な大切な思い出いっぱい作れたんだから。だから……。けれどその思い出がいいモノであればあるほど、幸子の涙は溢れ出しそうになった。そして潤一はそんな幸子の顔も見ずに、見てみる？　と言って、そのカードケースを幸子に手渡した。

幸子は正直言って見たくない気持ちだったが、目の前に出されるとイヤでも目に入って来た。

案の定、そこには写っているのは自分の写真では無かった。それどころかそこには写真は無く、薄い手鏡の様なモノがあった。幸子は泣き出しそうな声を押し殺しながら、誰も写っていないですよ、と言った。

「そおか。よおく見てみなよ。天使の様なとっても可愛い子が写っているはずさ」

潤一にそう言われて幸子はもう一度よおく見てみた。するとそこには街灯の明かりに照らされた、今にも泣きだしそうな自分の顔があった。

「見えた？　その子は俺にとって、とても大切な子なんだ。だから絶対に悲しませたくないのに、何故かそこに写っている子は泣き顔なんだ」

「……………」

「でも、笑顔にだって成るんだぜ。いいか、よおく見ていな」

そう言って潤一は幸子の方を向き、更に続けた。

「色々あったけど、やっと言えるよ。僕とお付き合いしていただいけませんか？」

この短い間に色々あり過ぎたせいだろうか、潤一のその告白はあっさりしたモノだった。けれどその告白には今までのどんなモノよりも心が籠もってあった。

いつからか、鏡の中に写っている女の子の涙は、悲し涙から嬉し涙に変わり、そして遠すぎた二つの陰が、ぼんやりと照らされた明かりの中で一つに成っていった。

その夜二人は同じ部屋に居た。そして夜中の十二時を過ぎるの待つて会社に、今日のバジヨ氏から貰った良い返事を伝える為に電話をする事にした。

潤一はふざけて、二人の恋人報告もしないとまずいのかなと幸子に聞いたが、そんな事言ったらお前達は何をしてたんだと言われるだけですよ、と幸子に言われ、それは言わない事にした。

「あっ、もしもし課長ですか。岸崎ですけどやりましたよ。オーナーの返事貰いました。それで詳しい事は明日、フォルナセッティ社からFAXが届くと思いますが、とりあえずリストの商品全部至急日本へ送ってくれるそうです」

「そうか、それは良かった。じゃあその件はこちらで後は引き受ける事にするよ。所でお前達はいつ戻ってこれそうなんだ？」

「そうですね。早ければ明日の夜、遅くても明後日の午前中にはこちらを發てると思いますが」

「まあ本当だったらのんびりして来いと言いたい所だが、こっちも年内に処理しないといけないからな、まあ焦らずなるべくでいいから早く帰って来てくれ。それとそこに神崎君はいるか？」

潤一は幸子の方をちらっと見たが、まさか同じ部屋に居るとは言えず、「いえ」と言った。

「そうか、まあちょっと本人には言わないで欲しいんだが、こっちでちょっとした事件があつてな。勿論彼女には責任は無いんだが……。まあそれは帰ってからにしよう。とりあえずご苦労だったな。神崎君にもご苦労だったなと伝えておいてくれ」

「はい、伝えて置きます。じゃあ飛行機の予約が取れたら、またこちらから連絡入れます」

そう言って潤一は電話を切った。しかし課長が言っていた、ちょっとした事件と言う言葉が気になった。そして詳しい事は分からないが、それに幸子が関係していると言う事だった。けれどとにかく今日の幸子に余り変な心配だけはかけたく無い、だから潤一は何事もなかった様に「いやあ、課長が良くやったって誉めてたよ。まあ何はともあれこれで俺達の任務は終了と言う訳だ。本当にお疲れさま」と言ってビールで乾杯をした。

次の日は、夜中まで色々な話をし合った事もあって二人とも疲れていたが、今日を逃したらローマを観光出来る日はなかったので、朝早くから二人して赤い目をしながらローマの町に出た。そしてローマと言うローマを二人で手を繋ぎながら歩いた。

トレヴィの泉でローマ再訪を願ってコインを投げれば、真実の口では二人の永遠の愛を誓い、手を恐る恐る入れてみた。そして一つのジ

ェラートを二人で交互に食べれば、一枚のピッツァを二人で突っついた。本当にROMAと言う町はラテン語で逆さまに言うと、愛と言う意味に成るように、愛が溢れている町だった。そして二人はそんな町で、まだ育て始めたばかりの愛を感じた。

幸子は朝目を覚ました時は昨日の出来事が夢だったんじゃないかと心配に成ったけれど、隣で今まで見た事の無い少年の様な優しい顔で眠っていた潤一、そして今日ローマの町を楽しそうに案内してくれる潤一を見て、昨日のあの出来事は本当だったのだと実感した。そして潤一も十年以上も失っていた愛を必死に取り戻すかの様に、幸子との思い出を一つ一つ心に刻んでいた。

そしてその夜二人はそれぞれの思いを胸に抱きながら、一つになった。

ローマで最後の夜を最高に迎えた後は、二人に残されているものは厳しい現実だった。二人は朝早く起きて、昨日の夜のうちにまとめて置いた荷物を持ち、早々にチェックアウトを済まし空港に向かった。

当然日本に戻れば愛だ恋だと言ってられない現実が待っているのは分かっていた。だからもう少しローマでゆっくり愛を育みたい気持ちも当然あった。けれど日本で二人を待っている人たちの事を考えると、少しでも早く戻って何とか良い年越しを迎えなければ成らない気持ちに成る。

潤一と幸子はトレヴィの泉で願ったローマ再来、そして真実の口で誓った永遠の愛を胸にイタリアを後にした。

二人を乗せた飛行機は夕方の四時に成田に着いたが、混雑していた税関や、夕方の湾岸線の渋滞が重なり、二人が乗った車が横浜のベイブリッジを渡る頃には既に夜の八時を廻っていた。

二人はとりあえず荷物もあれば、溜まった疲れもある事で出社は明日からと言う事にして、会社には寄らず幸子の家に向かった。

野毛の幸子のマンションの前に来ると、疲れが溜まっているにも関わらず、二人ともまだ別れたく無い気持ちが湧いてくる。もう少し一緒に居て、もう少し話をしていたかった。二人は三十分だけと言う約束を立てて、野毛山公園を散歩する事にした。

誰も居ない夜の公園、そして展望台から久しぶりに見る横浜の夜景は、静かな美しさがあった。潤一と幸子はどちらからとなく近づき、そしてイタリアで感じた温もりを確かめ合う様に抱き合う。離したくない、離れたくない、それが二人の本音なのだろう。けれど三十分と言う短い時間は、そんな二人の気持ちとは関係なく近づく。だからも

う少し延ばそうか、と言って延ばしてみても、やはりそれは必ずやってくる。そして三十分と言う時間はそんな離れられない二人を象徴するかの様に、悲しいほどに短いものだった。潤一は幸子にお休みの口付けをし、重いアクセルを踏み込んだ。

潤一は車を駐車場に止め、重い荷物を抱えてマンションのオートロックを解除した。そしてエレベーターに乗り込むと6階を押した。心地良い音で閉まるエレベーターの扉、そして繰り返される景色、それは六日前にも体験した事だった。六日前……。それは本当にイヤな出来事だった。あの香織の憎しみの籠もった顔は、忘れようにも忘れられない。そして香織が言った「どうなっても知らないから」と言う言葉は、単なる脅しだったのだろうか？ もしそうならそれに越した事は無い。しかしもし仮にそうじゃ無かったしたら、それはやっかいな事だった。やっと出会った恋を、そしてやっと辿り着いた恋を壊されるのは耐え難い事だった。もう失いたくない、もう壊れたくない、情けない事と言われても、それはどうしようもない気持ちだった。エレベーターはそんな気持ちの潤一を乗せて上がって行く。そして6階に止まりドアが開く時に潤一は忘れかけていたモノを思い出した。それはバジヨ氏の良い返事を課長に報告した時の事だった。

確かに課長の斉藤は、「ちょっとした事件があつてな。勿論彼女に責任は無いんだが」と言っていた。そしてその後を濁していたが、潤一にはそれが幸子にとって、とても悪い事件だと言う事は何となく分かった。仕事上のトラブル？ それとも業務上のミス？ 一体二人が居ない間に会社で何があったのだろうか。けれど何も知らない潤一は、考えても答えは見つかりそうもなかった。ただ何となく香織の言葉と課長の言葉がオーバーラップしてしまう。大した事で無ければ良いのだが。潤一は不安な気持ちのままエレベーターを降りた。

その頃幸子は部屋にある鏡の前に立って居た。そしてその鏡の中には、ピンク色のパーティドレスを嬉しそうに着ている幸子が写っていた。

幸子は潤一と別れた後、隣に花を預かって貰ったお礼のお土産を渡してから、自分の部屋に戻って来た。久しぶりに戻った自分の部屋はホッとさせるモノでもあったが、今までが幸せ過ぎただけには不安にさせるモノでもあった。幸子は疲れてはいたが、それ以上にやらなければ成らない事もあった。仕方なくとりあえず荷物の整理をしようとトランクケースを開けた。けれど最初に目に入ったドレスを見て、思わず着ずにはいられない気持ちになった。

初めて潤一からプレゼントされた洋服、そしてその後の告白。つい

さっきまで一緒に居たのに、それはまるで信じられない出来事だった。だからつい、本当に私なんかでいいの？　と思ってしまう。けれどそれは潤一に二度と言わないで欲しいと言われた事だった。「俺は君でいいじゃ無く、君がいいんだ。だからもうそれは言わないで」って。だから口に出しては言わなかったけれど、相手が潤一だけにそれはどうしても考えてしまう。本当に告白されたあの瞬間から、まるで長い長い夢でも見ている様な、信じられない気持ちが続いていた。そこには喜びが沢山あった代わりに、不安も沢山あった。そして潤一が居なくなった今はそれは全て不安に代わる。だから明らかに現実だと実感出来る自分の部屋では、その潤一からプレゼントされたドレスだけが唯一自分の味方。そうあの出来事が夢じゃ無かったと実感する事の出来る、確かなモノだった。

その夜二人は久々に戻った自分達のそれぞれの現実、なかなか馴染む事が出来なかった。それは時差ボケのせいもあったのかもしれない。もしくは六日間のイタリアの生活が長すぎたせいかもしれない。けれど本当の理由は他にあった。

潤一と幸子は別々の場所で同じ夢を見た。

「約束だぞ。何があっても俺の手を離すなよ」

「はい」

「俺も何があってもお前の手を離さないから」

「はい！」

「約束だぞ・・・」

「はい！！」

この先二人に何が待っているのかも知らないままに・・・。

次の日は二人とも昨日までの疲れも残らずに、割とスッキリとした気持ちで目が覚めた。もう心を切り替えて、しばらくは幸せもお預けにしなければ成らない。誰に言われるでも無く、それは二人とも共通の気持ちだった。潤一、そして幸子は自分にそう言い聞かせて家を出た。そして会社に先に着いたのは、幸子よりもほんの少し家が近い潤一の方だった。

潤一は営業部のドアを勢いよく開けた。

「おはようございます」

「おお岸崎か、おはよう。出張本当にご苦労だったな」

そう言って潤一を迎えたのは、いつも人より三十分早く入社していた課長の斉藤だった。

「いえ、そんなに大変でも無かったですよ。向こうのオーナーのバツ

ジョ氏も前回課長と行った時よりも気難しさも無かったですし」「えっ、あのバジジョ氏がか？」

「そうです。やはり女の子を連れて行ったのが良かったんですね。もう本当に神崎は良くやってくれましたよ」

「そうか、神崎か・・・」

課長のその言い方には、何か引っかかるものがあった。潤一はやはり自分の知らない時に何かあったと言う事が分かった。

「あっそうだ課長。国際電話の時に言っていた、ちょっとした事件で、一体何の事なんですか？」

斉藤は潤一にその事を聞かれて、周りを気にする様に見渡した。始業二十分前にも成るとさすがに営業部にもばらばら人が出入りしてきていた。

「まあ、そんなに大した事じゃないんだが、ちょっとここじゃなんだから、会議室に言って話そうか」

そして二人は会議室に言って話す事にした。

「えっ、そんなのデマに決まってるじゃないですか！」

潤一は斉藤の話聞き終わるや否や、怒りを露わに大声を出して怒鳴った。斉藤も想像以上の潤一の怒りを、押さえようと付け加える様に言った。

「まあ、落ち着け。彼女に限ってそんな事は無い事は、俺だって分かっている。だから至急にそれは誰かの悪戯だって事で俺も動いたよ」

「それで上層部は何て？」

「まあ、本人の留守中に起こった事だし、明らかに悪戯の可能性が高いと言う事で、一応建前上は本人は関係無いと言う結論には達したみたいだが、実際の所は分からないな」

「分からないってどう言う事ですか！ そんな事絶対あるわけ無いじゃ無いですか！！」

潤一も冷静に考えれば課長に怒鳴っても仕方が無い事は分かる。むしろ課長は課長なりに弁解してくれたのだ。けれど課長が言ったその事件の内容が内容だけに、怒りのぶつけようが他に見つからなかった。一体潤一をそこまでさせた事件と言うのはどんな事だったのだろう。課長の斉藤が言うにはこう言う事だった。

それは潤一と幸子がイタリアに出張に行ってから三日経った時の事だった。朝社員が出勤して来ると、全ての営業所に何人かの名前の入ったFAXが送られていたのがその事件の発端だった。当然そのFAXは、潤一と幸子が所属している営業部にも送られていた。斉藤は潤一と幸子が出張に出てから毎朝、FAXだけは気にしていた。それ

はイタリアと日本では時差が八時間ある為、緊急の報告はFAXで送られる場合もある為だった。斉藤はその朝もいつもと同じ様にFAX受けに目を通した。そしてそこには明らかに昨夜退社する時には無かったFAXが一枚流れていた。

斉藤はそのFAXを手に取り送り主を見た。案の定そこには横浜営業所、営業部、第一課、神崎幸子と書かれていた。斉藤はてっきりそのFAXはイタリアから送られて来たモノだと思い、そのつもりで読み始めた。

[報告書。以下の事を全社員に報告いたします]

そのFAXは堅くるしい文面で始まった。けれどその後は、その堅くるしい文面とは違い、何処どこ営業所所長の何々の愛人は何処どこ部の誰々です。と言った具合に、殆どの営業所所長や、役員、そして社長の愛人まで具体的名前を挙げて紹介されたリストがA4FAX用紙に一枚にワープロ文字で書かれていた。

斉藤はそれを読み終えて怒りを感じた。勿論それは彼女が作った物では無い事は明らかだった。ただだからと言ってこんな物が誰かの目に入れば、幾ら違うとしても噂は一人歩きしてしまう物だった。斉藤はそのFAXを他の者に読まれる前に、シュレッダーにかけた。その時はまさか全営業所に送られていると事は知らないままに。そして事が大きく成ったのは朝の朝礼が終わった時だった。

朝の朝礼も済み、各自がそれぞれの業務に就いた。そして斉藤もFAXの事を忘れかけて時に、一本の電話が鳴った。

「はい、アートインターナショナル、営業部です」

電話を取ったのは内勤の女性社員だった。

「えっ、神崎ですか？ 神崎は出張に出ておりますが。えっ、上司ですか？ 少々お待ちください。課長、ちょっといいですか？ 何かちょっと上司を出してくれ！ と言われたんで、電話に出て貰えますか？」

斉藤はいいよ。じゃあ電話回してと言って、その電話に出た。

「はい電話代わりました。斉藤ですが、どの様なご用件ですか？」 電話の主は東京本社の総務部からで、そしてその内容は斉藤が忘れかけていた、今朝のFAXの事だった。斉藤はこちらも突然の話して状況がまだ掴めない言う事と、本人は今イタリアにいるので間違い無く関係無いと言う事を丁寧に説明をして電話を切った。けれどそれはそれだけでは終わらず、その後から同じ内容の電話が次から次へとかかって来た。

斉藤は仕方なく部下の何人かに秘密厳守で説明をして、その電話に対応をさせた。そして自分は本社にキッチリとした事情を説明する為に本社に向かった。

本社の対応は厳しいものだったが、内容が具体的名前の出ていると言う事があり、警察への要請はしないで、内部調査だけで済ますと言う事でまとまった。そして本人には無関係と言う事で、本人への処分は一切下さないと言う約束の元で、斉藤は本社を後にした。

けれどそのリストの内容が的を得過ぎていたのだろう。本社の役員
の感情は相当のものだった。斉藤は一体誰がこんな悪戯をと言う気持ち
があったが、自分の部下の中では、性格の優しい神崎に好意を持つ
者は居たとして、悪意を抱く者は見つからなかったし、それにこれだけ
の的確な情報を集められる者も見あたらなかった。なら他に……。
けれどそれを考えればきりが無かった。斉藤はただこれがたまたま神
崎の名前を、名簿か何かで見た者が、特に大きな理由もなく彼女の名
前を使っただけで、そしてこれ以上この事件が発展しない事だけを祈
るしか他に無かった。そしてそれから少なくともこの三日間は何事も
無いと言うのが、斉藤が潤一に言った内容だった。

「まあ、とりあえずこの事は終わったのだ。うちの課の者も何人かは
事件の事を知っている者も居るが、みんな神崎がそんな事しない事は
良く分かっているとってくれた。だからお前が怒る気持ちは分かる
が、ここはただ聞き流して欲しい。もしお前が騒げば傷つくのは神崎
なんだから」

斉藤の言っている事は的を得ていた。確かに潤一がここで怒りを出
した所で、その怒りをぶつける相手は潤一や斉藤の知らない所で笑っ
ているだけ。そして事が大きく成れば成るほど、相手の思う壺だった。
潤一の頭にはもしかしたら犯人は……。と言うモノがあったが、証
拠が無い限りそれを追求する事は出来ない。それに確かに斉藤が言う
様に、仮に犯人が誰であろうと、この事件は終わった事。何も知らない
幸子の事を考えれば、そう思うしか手だては無かった。

会議室か戻ると、オフィスはいつもと何一つ変わらない朝のどよめ
きがあった。同僚達は潤一がオフィスに入って来るや否や、どうだっ
た？ どうだった？ と出張の事を聞きに潤一の周りに集まった。け
れど潤一はそんな同僚達に、今は笑顔で応える事は出来そうも無かっ
たので、「まあ、その事は会議の時にゆっくり話すよ」と言って自分
の席に着いた。

そしてそこから二列目の左斜め前の席に、同じ内勤の女の子と一緒
に出張の話でもしているのだろうか、楽しそうに話をしている幸子
が見えた。そしてまだ何も知らない幸子は、潤一が見ているのに気が付
いたのか、誰にも分からない様に、にっこりと笑って見せる。潤一は
そんな幸子を今すぐそばに行って抱き締めたくなった。けれどそれは
イタリアならともかく、この現実と言うオフィスでは許されない事。

ましてはあんな事件があったとしたならば尚更の事だった。ただ潤一に出来る事は、二度とこんな事が起こらない事を祈る事と、例えどんな事があってもきっと俺が守ってやると心に誓う事だけだった。

その日は潤一にとって、とても忙しい日だった。とにかく午前中の会議が終わり次第、廻らなければ成らない顧客が山の様に待っていた。だから潤一は午前中いっぱいかかった会議が終わると、お昼も食わずに外へ出た。

改装途中のレストランでは、工事の進行状況を確認して、納期の日取りを決める。そして一月オープン予定のホテルでは、搬入作業のじゃまに成らない様に、ホテルマネジャーと家具やインテリアの配置の確認をした。潤一が年内に片付けなければ成らない顧客は、大体十件位あった。けれどそれが全て会社の近くとは限らず、東京にもあれば、三浦にもある、そして一番遠い顧客は、箱根の山の上にもあった。潤一はそれを全て年内に片付けなければならない。そしてその中で品物が収まっている所は無く、今日は既に十二月十四日だった。潤一には案の定休む暇も無ければ、幸子とゆっくり食事をする暇も無かった。結局その日に潤一がオフィスに戻って来たのは十一時近かった。

オフィスは数人の営業マンが居るだけで、他には誰も居なかった。潤一は今日の整理をした。予定通り行けば明日にはバジヨ氏と約束した家具が入ってくる。段取り良くこなして行かなければ、間に合わない。潤一は今日の顧客分の予定と入荷予定を照らし合わせながら、計画を立てる事にした。そして結局その計画が全て立ち終わった時には、オフィスには誰も居なくなっていて、時計の針も二時を廻っていた。

「ふう」

潤一はひと息ついた。久しぶりにこなした通常業務。それは真新しいものこそ無かったが、やり甲斐があった。本当に自分でもおかしく成ってしまう程に充実した気持ちは、一ヶ月半前までの自分が嘘の様だった。確かにバジヨ氏も言っていた、若い時は見えなく成ってしまうと。本当にそうだったのかもしれない。一ヶ月半前までは、数字の為の結果を出していたけれど、今日感じた事は、顧客が喜ぶ為の結果を出したいと言う事だった。そして仕事上で幸子と一緒に叶えたい夢も見つかった。だからこそ幸子と合いたい気持ちを我慢して、こんな時間まで仕事が出来たものだった。

潤一は今日まとめあげた資料を机に仕舞う為に引き出しを開けた。引き出しの中はキチッと整理されていて、何処に何が入っているかはすぐに分かる様に成っていた。そして潤一が資料を仕舞おうと目を落とした時、ふと一枚の見覚えの無いメモ紙が入っている事に気が付い

た。潤一はその小さなメモ紙程度の大きさの紙を手にとって見た。そこには幸子からの、お仕事遅くまで大変ですね。しばらく会えない事もあると思いますが、頑張ってください。私も頑張ります。と言うメッセージが書いてあった。

潤一はフッと笑って、そのメモ紙を自分のパスケースに入っている幸子の写真の横に並べて入れた。そして帰り支度を全て終わらせると、最後にメモ紙ありがとう。忙しくてなかなか会えないけど、何とか時間を作るから、その時はどうぞデートに付きやってください。と言うメモ紙を幸子の机に入れて、オフィスを後にした。そして次の日からそのメモ交換が、忙しい二人の習慣に成った。

けれど相変わらず、二人にはゆっくりする時間が取れない。潤一は幸子の為にもやらなければならない事があった。そしてそんな潤一より、少しだけ寂しがり屋な女の子の幸子も、潤一の為に合いたい気持ちを我慢しなければならなかった。けれど二人には寂しさは無い、例えどんなにあくせくとした日常が繰り返されたとしても、もう大切なモノが見えなくなってしまう事は無かった。そしてそんな日々も一週間が過ぎ、十日が過ぎ、やがてクリスマスがやって来た。

今年のクリスマスは、イブが土曜日と言う事もあって、世間では大変な盛り上がりがあった。当然潤一と幸子にとっても、二人で過ごす初めてのクリスマス。特別な日にしたい気持ちはあった。だから本当なら、少しお洒落をして、豪華なレストランで食事をし、そして綺麗なブティックホテルで二人の甘い時間でも過ごしたかった。しかしその日二人は近くのケーキ屋でケーキとシャンパンを買って、潤一のマンションで簡単にお祝いし、そして恋人の甘いひと時も無いままにお互いの仕事についた。潤一は自分の仕事用の机で企画書の制作にあたった。そして幸子も潤一の部屋の小さなテーブルの上で資料の整理にあたった。それは決して大きすぎない部屋の中の事、だから、手を伸ばせば触れ合う事だって出来た。けれど二人はその気持ちを我慢して、それぞれの作業をこなした。何故ならそれには大きな理由があったから。

潤一の忙しい仕事も二十四日に成る頃には、大方の見通しがついた。殆どの納入先は納品を済ませ、後はそれぞれの開店を待つだけだった。ほんの少し納入が遅れているものもあったが、それも年内には間違いなく納入出来る段取りは出来ていた。だからこのクリスマスイブは、ほんの少しの安らぎを求める事が出来るはずだった。実際他の者は、家族、恋人、仲間とそれぞれに楽しいひと時を過ごしていたし、去年、一昨年は潤一もそれなりのクリスマスを迎えていた。けれどこの二人にとって初めてのクリスマスイブは、甘いひと時では無く、仕事と

言う一つの共同作業をこなす事に成った。そしてその大きな理由は、クリスマス明けの二十六日に行われる、来期の為の企画会議の為だった。

潤一は前にも幸子に言った通り、イタリアフェスティバルと言う企画を何度か提案をしていた。そして前回の十一月後半に行われた会議では、もう一步の所まで話が進んだ。このまま行けば何事も無くその企画は通り、早ければ来年の四月頃にはそれは実現されるはずだった。けれどその矢先に例のフォルナセッティ社の納期遅れと言う問題が起こり、社内の中ではイタリアに対しての信頼度が落ちた。そして当然会議の席では必ずこの件は、反対派の検討見直し材料として叩かれる事は目に見えていた。だからこそ二十六日の会議は潤一にとっては正念場なのだ。一体どうやってその反対派の意見を処理して、この企画の信頼度を上げれるかが、潤一の行動によって決まる。潤一はあのバジヨ氏と約束を交わしてから、そして幸子と一緒に叶えて行きたいと思ってから、なんとしてもこの企画を成功させたくなかった。潤一はその気持ちを幸子に素直に言った。幸子もそれを聞いて、是非成功させましょう、と言ってくれた。そして二人で決めた事が、このクリスマスを潰してもいいから、何とかその会議を成功させようと言う事だった。

自分の机に向かって幸子の為にも必死に構想を練る潤一。そして当日の会議は内勤の幸子は出られない為に、この部屋にいる間に潤一の為に出来るだけの事してあげたいと思って、その資料の山の整理に取り組む幸子。言葉こそ交わさなかったが、そのお互いの気持ちは手に取る様に伝わっていた。

潤一は仕事の合間に幸子の方を見た。自分の部屋の小さなテーブル、そしてその上の山積みになっている資料を、一生懸命整理する幸子。潤一はそんな幸子に心を込めて、メリークリスマスと言った。

結局二人が眠りに就いたのは、ある程度の見通しが着いた、午前四時過ぎだった。二人はどちらが言う訳でも無くベットに潜り込み、そして一瞬にして眠りに落ちた。けれど十分位経ってから潤一の眠りを妨げない様に静かに幸子は起きた。そして自分のバッグから可愛い包装紙に包まれた手編みのマフラーにクリスマスカードを添えて、そっと潤一の枕元に置いた。それはこの一週間、潤一が残業している時に自分の部屋で編んだモノだった。幸子は潤一の寝顔をしばらく見ながら、この人とずっと一緒にいて、ずっと同じ夢を見ていられたらと思った。けれど何故だかその時、こんなにそばに居るのに、それは叶わない夢の様に感じられた。幸子はそんな不安を拭い去るために潤一に少し体を寄せて眠りに就いた。そしてそこには確かな温もりがあった。

朝目を覚ますと潤一は横には居なかった。幸子は潤一が何処に行ったのか心配に成ったが、その心配は顔を上げると無くなった。ベットの先には潤一の机があり、そしてそこに潤一の後ろ姿が見えた。潤一は早く起きて昨日の続きをしていたのだ。大きな潤一の背中、そして首元には昨日寝ている間にプレゼントしたモスグリーンのマフラーがあった。幸子は嬉しい気持ちで起き上がり、おはようございますとその背中に向かって言った。潤一も幸子が起きたのに気が付くと振り返り、「これありがとう、このモスグリーンのマフラー俺に凄く似合っているね」と言い返した。幸子も潤一にそう言われて初めて意識した。勿論編んでいる時は潤一の事だけ考えて編んでいた。けれど出来上がってみると、そのモスグリーンのマフラーが潤一に合わなかったらどうしようと言う不安も出てきた。無難な紺とか黒にして置けば良かったかなとも思ったけれど、潤一にそう言われると、やはりモスグリーンで良かったと思えた。幸子はその似合っている姿を良く見てみたく成り、眠気まなこの眼をこすった。その時目に何かが当たって驚いた。一体何が当たったのだろうか。幸子は何が目に当たったのかを確認する為に、自分の手の甲を見た。そしたら一瞬そこに何が光った様に見えた。けれど左手の薬指の指先に感じる微かな重さ、そしてきらきらと光る輝きは、夢でも幻でも無く、確かなモノだった。幸子は驚いて「えっ」と声に出した。そしてそのダイヤの指輪の先には、「なあ、本当にこのマフラー俺に似合っているとは思わないか？」と鏡に向かって嬉しそうにマフラー姿の自分を見ている潤一が居た。

潤一が贈ったその指輪は、薬指にはめられてこそいたが、まだ恋に出会って二ヶ月弱、そして恋人と成ってまだ十日とちょっとの二人にとって、それは結婚や婚約と言う言葉を重ねるには不確か過ぎるモノだったが、二人の絆を深めるには十分過ぎるモノでもあった。

二人はそれぞれの贈り物を身に付けて、何とかその日中に全ての作業を終わらす事が出来た。これで何とか明日の会議は行けそうだった。潤一は幸子に是非手伝ってくれたお礼をしたいと言ったが、幸子は高価な指輪を買った事だけでも十分過ぎたし、それに手伝ったのじゃ無くて、一緒に叶える約束だったじゃ無いですかと言って、それを断った。けれど潤一としてはそれでは納得が行かなかったのも、もし明日の会議でこの企画が通ったら、お祝いを二人でしようと言う提案をした。幸子もそれなら構わなかったのも、祝いは自分持ちならOKと言う条件でその提案に賛成した。そして二人は別れた。

次の日はいつになく気合いが入っていた。会議は東京と横浜の合同企画と言う事で、東京本社の会議室で行われる事に成っていた。潤一

は二日かけて幸子と作り上げた企画書を持って、課長の斉藤と数人の営業部と企画部の人間と共に、東京本社に向かった。勿論首元にはモスグリーンのマフラーを巻いて。

会議室では二つの企画が上がっていた。一つは本社の営業部が企画した世界の輸入雑貨フェア。そしてもう一つが潤一が提案をしていたイタリアフェスティバルだった。本社の営業部が提案している企画は、世界の衣類、食品、アクセサリーと、商品幅が多い事と、個人でも気楽に見に来られて、購入し易いと言う良さを売りにしていた。それに比べて潤一の提案した企画は、イタリアに限定されていて、それも家具やインテリアが中心だった為、商品幅と購入し易さと言う点ではマイナスだった。けれど逆にイタリアに限定されている事によって、イタリアの数多くの商品層を確保出来る点と、一つの国から輸入する為、輸入経費をかなり削減出来る点があると言う事と、高価な商品をそろえる事で買い易さが無い代わりに利益率を確保出来る点があった。そしてそもそも潤一達が所属する、このアートインターナショナルと言う会社の設立理由も、高級輸入品を企業相手に提供していくと言うコンセプトで設立されていた為に、潤一の企画の方が筋が通っていた。いわばその本社の営業部が提案した企画は、横浜営業所に対するエリート集団の苦肉の策なのだ。潤一はイタリアフェスティバルのメリットを一つ一つあげて、そのエリート集団の苦肉の策を会議室から追い出していった。そして問題の今回起きた納期遅れの信頼度を指摘された。

「ええ、今回の納期遅れの問題なんですが、今お配りする資料をご覧ください」

潤一は用意して来た資料を配った。そしてその資料こそ幸子が徹夜で作った資料の一つだった。

「ええ、この資料は過去五年間のアメリカ、フランス、中国、イタリアの輸入に関する納期遅れの発生をまとめたものです。見ていただければお分かりだと思いますが、イタリアの納期遅れの発生率は四カ国のうち一番少ない事がハッキリします。アメリカに関してイタリアの四倍の発生率に成っており、イタリアの納期遅れの件を指摘されるなら、まずアメリカに対しての対応が先かと思いますが」 潤一の資料を見せられれば、誰もその先の言葉は見つからなく成った。

そして潤一は更に切り札の、フォルナセッティ社のオーナー、バッジヨ氏の協力の話をした。これはかなり効果的だった。今の大量生産型フォルナセッティ社しか知らない若い世代の人間にはともかくとして、五十代の役職クラスの間にはフォルナセッティ、そしてバッジヨ氏の名前はいわば、イタリアの高級家具の代名詞に成っていた。そ

してそのバッジヨ氏がアートインターナショナル主催のイタリアフェスティバルに協力して貰えると言う事自体が、大きな魅力となった。

その提案をした事もあって、会議の後半はイタリアフェスティバルの事だけで話が進められた。開催場所や開催期間、そしてそれに伴う具体的費用や宣伝効果。それぞれの問題を一つ一つ幸子と作り上げた資料を元に潤一は話を進めていった。そしてその会議も終盤に差し掛かった頃、潤一はイタリアフェスティバルの企画スタッフを何人が挙げた。

勿論この企画が通れば総責任者は本社の誰かがやるとしても、現場責任者は提案者の潤一になる。そう成った時に各部門を動かすスタッフはある程度、自分の信頼のおける者を選ぶ事は必要だった。潤一はもしこの企画が通るという事になったら、是非スタッフとして協力させたい名前を幾つか挙げた。第一課課長の斉藤を始め、営業部の吉田と野島の名前を挙げ、そして最後に神崎の名前を挙げた。他の者ならともかく、内勤だった神崎を営業の業務にポジション変えさせるには、それなりの理由が必要になる。潤一はその事を説納得させる為に、今回の出張の功績とバッジヨ氏との約束の件を説明しようとした。けれど潤一が幸子の名前を口にしてから、その会議室の雰囲気ガラッと変わった。その時潤一は斉藤に言われたあの事件を思い出した。その事件は実際自分が体験していなかった事と、その日から一度もその手の事件が起こらなかった事で、潤一にとってはその事件はもはや実在しなかった事に成りかけていた。しかし本社の人間にしてみればそれはまだ半月前の事であり、そして創立以来の大事件と言う事に成っていた。

潤一はそんなイヤな雰囲気の中、幸子はそんな事をする人間じゃ無い事と、どうしてもこのプロジェクトに欠かせない人材だと言う事を、出張の功績と言う報告書に乗せて説明をした。

その頃、幸子は仕事をしながら潤一の成功を祈っていた。オフィスの中は決算期と言う事もあって、午前中はひどく混み合っていたが、三時を過ぎた頃には朝からひっきりなしに掛かって来た電話も一息ついて、混み合って居た営業マンも、今はみんな外回りに出ていた。だから今オフィスに残って居るのは幸子と、もう一人の内勤の女の子、そして何故だか分からないが、朝からずっと煙草をふかしている部長の佐々木だけだった。幸子は電話が成らない合間に、潤一宛のメモ紙を書いていた。勿論書きたい内容は、企画が通っておめでとうと言う内容のモノだった。けれどそれはもしもの事を考えると書けないモノになる。だから余り当たり障りの無い内容にしようと思き始めたその時だった。自分の肩をポンポンと二回、叩く者が居た。幸子は何とな

く一瞬イヤな予感を感じながら振り向いた。そして幸子が振り向いた先には、部長の佐々木が嫌らしい笑顔で立っていた。

潤一達の会議は最後のスタッフの事を除けば、潤一の圧倒的勝利と言う形で幕を閉じた。結局潤一の企画は幾つかの改良点を解決して、何とか早ければ来年の四月頃には実現出来ると言う事に決まった。ただ納得いかなかったのが、スタッフに関しては人事部の意見も入れなければ成らないと言う事で流れた事だった。けれど潤一とすれば、それは自分が現場責任者に成れば何とか成ると言う気持ちがあったので、それでOKした。

「岸崎、本当に今日のご苦労だったな」

帰りの電車の中で潤一の肩を叩いて斉藤が言った。

「いや課長のお陰ですよ。二年前一緒にイタリアに視察に行った時、課長がイタリアの魅力を教えて下さったから、この企画が生まれたんです」

斉藤もそう言われて昔の事を思い出した。二年前と言うと潤一が入社して一年が過ぎた頃だった。そもそもあのイタリア視察も他のベテランの人間が行く予定だった所を、斉藤が将来の潤一を見込んで急遽潤一に代えたのだ。まさかその潤一がこんなにも早く成果を出してくれるとは、斉藤も今思えば無理をして潤一に代えて良かったと思えた。

「懐かしいな。なんだかんだ言ってお前を部下に持って、もう三年か・・・」

「ええ、三年ですね」

そこには二人だけにしか分からないものがあった。

「なあ岸崎、この企画何があっても成功させろよ」

斉藤が言ったそのセリフは、何処となく寂しさがある様な気がした。だから潤一はそのセリフを訂正した。

「成功させろじゃなくて、させようじゃないんですか」

「あっ、ああ、そうだったな。絶対成功させような」

「はい。勿論ですよ」

そして二人は関内駅で別れた。斉藤は今日の会議の資料の多さを見て、きっと潤一はこの土日を潰して徹夜で作ったはずだと思い、今日は会議も上手くいった事だから、早く帰って休めと潤一に言った。そして潤一も疲れがあった事もあるが、今日は早く帰って幸子とお祝いをしたかったので、課長のその言葉に甘える事にした。

課長と関内で別れてから潤一は真っ直ぐ家に帰り、そして幸子の家に電話を掛けた。勿論まだ五時を廻ったばかりだったので、幸子は家に居なかった。潤一は留守電に「君のお陰で企画通ったよ。だからお祝いしたいから、戻ったら家に電話して欲しい」と言うメッセージを

入れて電話を切った。それから潤一は、一昨日の夜幸子と一緒に眠ったベッドの上に横になり、そして幸子が昨日まで使っていた小さなテーブル見ながら幸子からの電話を待った。

潤一は気が付いた時には眠ってしまったらしく、時計を見たらもう十時を過ぎていた。潤一は慌てて幸子の家に電話を掛けたが、幸子の電話は相変わらず留守電のままだった。まさか会社で残業でもしているのかもしれないと思ったが、内勤の幸子がこんなに遅くなる事は考え難かった。きっと誰か友達と食事でもしているんだと思い、もう少し待つ事にした。けれど十一時を過ぎても、十一時半を過ぎても、一向に電話が掛かってくる気配は無かった。潤一は心配に成って幸子の家に行く事にした。

幸子の家の前の少し広く成っている所に車を止めて、近くの公衆電話から幸子の家に電話を掛けた。けれど答えは一緒に、小さなノイズの中で「はい、神崎です。せっかくお電話頂いたのですが、只今出かけています。ピーと言う発信音の後にお電話番号と名前を入れて頂ければ、必ず連絡しますので入れてください。ピーー」と言うメッセージしか流れて来なかった。

潤一は腕時計を見た。もう時計の針は十二時を廻ろうとしている。何かあったんじゃないかと言う気持ちは、家を出る時からずっとしていた。そして一分、一秒経つ毎にその気持ちはどんどん膨らんでいった。潤一はとにかく何も無い事だけを祈る気持ちで家の前で待つ事にした。

十二月の夜風は想像以上に冷たかったが、その冷たさよりも心配の気持ちが勝っていたので、冷たさは感じなかった。だから体が震えているのは寒さ来るモノじゃなくて、きっと心配から来るモノだった。そして一時間位そこに居たのだろうか。遠くの暗闇から一人の女性が千鳥足でこっちに向かって来るのが見えた。勿論それが幸子だと言う事は潤一にはすぐに分かった。

潤一は幸子に走り寄って「どうしたんだ？ こんな遅くまで」と言ったが、幸子はお酒をかなり飲んでいたらしく、「え、あ、」と言うだけだった。潤一はそんな普段と違う幸子を見て何かあった事はすぐに分かった。

「もしかして何かあったのか？」

潤一のその問い掛けに幸子は真一文字に口を閉ざし、必死に何かを堪えている様だった。潤一はもう一度言った。今度は優しさをこめて。「何かあったんだね。でも大丈夫だよ。俺が守ってやるから」

そして潤一は幸子を抱き寄せた。

さすがの幸子も、その潤一の優しさに堪えていたモノが溢れ出て来た。

「ごめんなさい。私、私・・・」

けれどそこで言葉はつまる。

「いいんだ。何があったかは分からないけれど、もう大丈夫だ。もう俺が付いているから。だからとりあえず家に入ろう」

そう言って幸子を家の中に連れて行った。

余程辛い事があったのだろう。幸子は部屋に入ってから泣き続けていた。潤一は幸子の横に座って黙ってそれを見守っていた。そして三十分くらいした頃に幸子がポツリと呟いた。

「ごめんなさい。私、岸崎さんとの夢、叶えられなくなっちゃいました」

潤一は一体何のことを言っているのか分からなかったが、その後の言葉を一つ一つ繋ぎ合わせるとその意味が分かった。けれど幸子が口にするその言葉一つ一つが、潤一の心も傷つけていった。要するに幸子の断片的な言葉を繋ぎ合わせると、こう言う事だった。 今日佐々木部長にちょっと大事な話があるから会議室に来て欲しいと言われて、会議室に行った。そしてそこで聞かされた事は、まず幸子の居ない間に変なFAXが送られた事を、まるで犯人扱いの様に説明された。勿論そんな事を言われても幸子には初耳だったし、それにそんな事した覚えも無かったので、その事をハッキリ言った。それだけでも純粋な幸子の心は傷ついたけれど、その後と言われた事の方がもっと傷ついた。

「来期、青森市内にある北部倉庫が立て替えをする事は知っているな」

確かに社内報告でそんな事が書いてあった様な気がしたが、その前に聞かされたFAX事件の事が頭にあり、余り良く思い出せなかった。

「はあ・・・」

「それで立て替えにあたって、人手が足りないだ。確か君の出身は青森だったよな」

「はあ、そうですけど」

「じゃあ、率直に言うが、来期から北部倉庫に行って欲しい。これは希望じゃ無くて、正式な異動命令だ！ 一月一日付けで北部倉庫に配属する。引継等の詳しい内容は後日連絡するから」

そう言って佐々木は会議室を出ていった。そして一人会議室に残された幸子は、すぐに言われた事が理解出来なかった。

北部倉庫？ 異動？ それは余りにも想像を超えた世界の言葉だった。けれど時間が経つに連れてそれは、少しずつ現実のモノになり、やがて全ては絶望に包まれて行った。

潤一は幸子の話を聞き終わると痛みを通り越し、怒りがこみ上げて

来た。個人的処分はしないと云ったはずの総務部。どう考えてこれは裏工作が行われているのは目に見えていた。けれど今ここでどうの言っても始まらない。今は目の前で傷ついている幸子を慰める事が先だった。潤一は幸子に「大丈夫、大丈夫、俺が明日何とかするから、そんなに悲しまないで」と言ってしっかりと抱き締めた。そして一晩中幸子の悲しみを慰めた。

次の日はやっと朝方眠りに就いた幸子を寝かせたまま、一人で会社に向かった。そして潤一が会社に着くと、待ち構えていたかの様に課長の斉藤が潤一に言った。

「岸崎。ちょっと大変な事に成った。まだ正式に辞令報告が出ないから他の者には言わないで欲しいが、神崎が北部倉庫に異動が決まった」「分かってます。でもそれは正当な異動じゃないですよ！。だから俺、人事部に抗議しに行くつもりです！！」

「まあ、待て。お前がここで問題を起こせば、どう言う事に成るか分かるな。だからこの件は俺に任せてくれ、俺としてもこの件は納得いかない事があるからな」

斉藤はそう言って潤一の怒りを制した。けれど正直言って自信は無かった。幾らこの件が正当じゃ無いとしても、これは立派な会社の方針だと言われれば、それに従うしか無いのがサラリーマンの使命だった。そしてもしもそれに逆らう事をすれば、選択肢は必然的に決まってくる。斉藤は家族の事を考えた、平凡だけど幸せな家族、それは自分が唯一大切に思えるモノだった。けれどそれと同じくらい大切に思いたいモノもあった。覚悟はあのFAXが流れた時から決まっていた。「それと、もしも俺に何かあたってしたら、後の事はお前に頼んだぞ」と潤一に言った。

斉藤が本社に事情請求を求めに向かった後、オフィスに一人残された潤一は、仕事も手に着かない程にイライラしていた。幸子の移動の話はまだ知らない第一課は、笑顔さえ見え隠れしている。そんな平和な空間にいと、息が詰まりそうに成った。本当に課長だけに任せて良かったのだろうか、やはり自分も行くべきだったのか、一体これから先はどうなって行くのか、頭の中を色んな疑問点が交差していく。けれどその出口は見つからなかった。冷静に考えれば、一度出た辞令が変更される事は、今までの例からするとあり得なかった。ただ逆に今まで例を言うなら、営業ならともかく、関東採用の内勤の女性が幾ら実家が青森だとしても、本人の希望も無しで北部倉庫に転勤させられる事はあり得なかった。やはり裏工作があったに違いない。総務部が決めた事なのか？ それとも人事部の考えなのか？ けれど幾ら人

事部が決めた事だとしても、最終的にはこの営業部の承諾が無ければ成り立たないはず、だったら・・・。

潤一は顔を上げて佐々木の顔を見た。そしてやっと答えは見つかった。

潤一は部長の佐々木に話があるんで、会議室に来て欲しいと言った。佐々木はそれを聞いて、ここでじゃ出来ない話か？ と聞き返したが、潤一のまともな話じゃ無いんで、ここじゃまずいと思いますよ、と言う言葉を聞いて、部下にちょっと岸崎と会議室で打ち合わせをして来るからと言い残し、二人で会議室に向かった。

会議室の中では、ピリピリした空気が張りつめていた。そしてその空気を潤一が先に打ち破った。

「部長、当然ご存じだと思いますが、神崎の移動の件。これは一体どう言う事なんですかねえ」

佐々木もその潤一の言い方に少しムツとした。

「それがどうした、お前には関係無い話だ」

「それがどうしただって、おかしいんじゃないですか。なんで内勤の神崎が、青森に飛ばされなきゃなんないんですか！」

「お前もサラリーマンなら分かるだろ。これが企業なんだ。向こうの北部倉庫で人手が足りないと言われれば、何処かの誰かが行かなきゃなんないんだ。それがたまたま神崎だっただけの話だ。それにうちとしても、いわく付きの者より、ちゃんとした者が欲しかったからな。たまたまそれが上手く行っただけの事だ。お前に言われる筋合いは無い。話合いはここまでだ」

佐々木はそう一方的に言って、この無駄な話し合いを終わらせようとした。しかし潤一の怒りは頂点に達していた。

「今、何て言った。おい、あんた今何て言ったんだ！ いわく付きの者より、ちゃんとした者だって、ふざけるなよ！ 彼女は何処の誰よりもちゃんとしてるよ。幾ら部長だからって言っていい事と悪い事があるんだ！」

潤一はそう言って、部長の襟首を掴んだ。

「貴様、自分が何をしているのが分かってんだろな」

佐々木は苦しい声で潤一言った。勿論潤一には分かっていた。こんな事をしたらどうなるかは、けれどどんな事があっても許せない事もある。例えそれで会社をクビになったとしても。そして潤一が右手を後ろに振り上げたその時、会議室のドアが開いて「お願い、やめて！」と言う声がした。

そこには今朝、夕べの悲しみに疲れ果てて眠っていたはずの、幸子が立っていた。

「岸崎さん、私は平気です。だからやめてください。もし私のせいで岸崎さんが会社を辞める様な事があつたら、わたしは・・・。私はそっちの方が辛いです・・・」

幸子は本当に辛そうだった。そして潤一も本当に辛かった。ただ辛くなかったのは佐々木ただ一人だけだった。

「岸崎、神崎に助けられたな。だけどこれで済むと思うなよ。お前もいずれは佐渡島にでも飛ばされない様に気を付ける事だな」

そう言って佐々木は襟元を直し、部屋を出て行った。そして広い会議室には、ただ悲しい二人だけが残された。

「ごめんな。こんな事しても何にも変わんないよな。けど許せなかったんだ」

「ううん。私こそごめんなさい。私のせいで・・・」

「・・・・・・・・」

潤一には言葉が見つからなかった。慰めの気の利いたセリフすら。勿論幸子のせい何かじゃ無かった。けれどじゃあ一体誰のせいと聞かれるとその言葉に詰まってしまう。そしてそんな中、幸子は更に続けた。

「私今朝目を覚まして、留守電聞きました。企画通ったんですね。おめでとうございます」

「あっ、でもそれは」

「分かっています。一緒にですよ。ずっと岸崎さん言ってくれてましたものね。ねえ覚えていますか、ローマに向かう列車の中で言ってくれた事。私凄く嬉しかったんです。岸崎さんに『何言ってるんだよ。一緒に叶えるんだよ』と言われた事が、私会社に入ってやっと目標が持てたんです。だから昨日部長に転勤の事を言われた時、私何も見えなくなりました。けれど気が付いたらそばに岸崎さんが居て、必死に私の事を守ってやる、守ってやるって言ってきて、私嬉しくて嬉しくて、だからお願いします。もしも私の事を想ってくれるのなら、絶対にその夢を成功させてください」

幸子はそこまで言うと、涙が溢れ出して来た。

「ああ、分かった。絶対に叶えるよ。だけどこれだけは忘れないで欲しい。これは二人の夢だと言う事だけは」

潤一はそう言って幸子を抱き締めた。

幸子の辞令は、斉藤の努力も虚しく、その日の内に正式に言い渡された。ただそれと同じくらいショックな事がもう一つあった。それはあれだけ一生懸命やってくれた斉藤も、今回の全ての責任を負うということで、仙台に本社があるアートインターナショナルの子会社、インテリアプロに配属させられる事に成ったのだ。

斉藤も覚悟はしていたものの、実際言い渡されるとそれなりにショックだった。けれど今ここで落ち込む訳にはいかず、最後まで課長として部下を支える使命が残されていた。

「神崎、本当に申し分けなかったな。俺に力が無いばかりに、何とかしてやれなくて」

「いえ、本当に課長には感謝しています。それより課長こそ私の為にこんな事に成ってしまっ、私こそ何て言っているのか・・・」

「それは気にするな。今回の事はお前は何も悪くない、それにこの事は全て俺が決めて、俺自身の考えで動いたんだ。俺はお前達の様な部下が持てた事を誇りに思っている。だからこそ、何とかしてあげたいと思ったが、やはりサラリーマンは辛いなあ」

「ええ、そうですね」

斉藤も幸子もお互い痛みは同じで、失ったモノも一緒だった。けれどその中で見つけられた大切なモノを分かち合う事が出来た。

結局年内は引継の関係や、引越しの準備やらでドタバタした日々が続いた。そして年も明け、二人が東京から飛び立つ日がやってきた。

羽田空港はリターンラッシュで人混みが溢れていた。潤一と幸子は先に飛び立つ斉藤を見送る事にした。

「本当に課長、今までありがとうございました」

潤一はそう言って斉藤に頭を下げた。

「おいおい、よせよ。恥ずかしいじゃないか」

「でも、本当に、本当に・・・」

「ああ分かっているよ、お前の気持ちは。でも俺の方こそお前に会えて良かったよ。まあしばらくお別れだが、俺の後はお前に任せたつもりでいるからな。それと神崎」

「は、はい」

「遠距離恋愛も、二人の努力があれば結ばれると言う事を覚えていて欲しいんだ」

突然の斉藤のセリフに幸子は少し驚いた。

「えっ」

けれど斉藤は知っているのが当たり前のように言った。

「おい、おい、もう隠す事はないだろ。二人が恋人同士だと言う事は分かっただぞ」

「は、はい・・・」

「俺も入社したばかりの時にいきなり、アメリカに飛ばされてな、五年だぞ、五年、その時日本に残して来た彼女が今の女房だ。それに比べれば横浜と青森じゃ近い、近い。幸せな方だよ。なあ神崎、岸崎は仕事は器用かもしれないが、生き方は一人じゃ何も出来ない不器用な

男なんだ。だからお前の力が必要なんだ。それと岸崎、お前も神崎に見捨てられない様にするんだぞ。なんせ神崎は第一課のアイドルだったんだからな」

斉藤のそのセリフは、気負いしている神崎に対しての優しさだった。「課長・・・」

「まあ何はともあれ、二人とも頑張れよ。そしてあの企画、絶対に成功させてくれよな。それじゃ時間だから行くとするか」

斉藤がゲートを抜けて、見えなくなるまで二人は見送った。その背中は少し寂しそうにも見えたが、堂々としている様にも見えた。ただハッキリしていた事は、それは自分で決めた人生だったと言う事だった。

斉藤が居なくなると、次は幸子の番だった。この旅立ちは、何日間で二人で決めたこと。だから今更、後悔は無いはずだった。

結局幸子は会社を辞める事にした。田舎にいる両親の事を考えると、そうせざるおえない結論になった。潤一は何度か一緒に暮らそうか？と言ったが、幸子としては一旦実家に戻って、色々な事を良く考えるチャンスだと言う事を主張してそれを断った。けれど本当の理由は、これ以上迷惑は掛けられないと言うのが理由だった。もしも二人が結ばれる運命だとすれば、きっとまた上手く行くはず。けれどももしも二人が結ばれない運命だったとしたなら、これが最後になる。そう思うと、やっと決めた決断も揺らいでしまう。

「私、本当にこれで良かったのですかね？」

幸子のそんな不安な気持ちは痛いほど潤一には分かった。だからこそ、ここでしっかりした態度を取らなければ成らない。

「良かったも何も、自分で決めた事なんだぞ。そりゃ俺だって離れたくないよ。けどお前の事信じているから、だから俺はそれを受け入れたんだ」

「そうですね。私が決めた事なんですよ。でも、でも・・・」

幸子は理解はしていた、けれど頭と心はいつだって違う方に向かってしまう。

「なあ、そんなに肩肘張らなくいいだよ。寂しかったらいつだって戻って来ればいいし、甘えたかったらいつでも甘えればいい。もしもお前が会いたいと言うのなら、俺はいつだって青森まで飛んで行くから。さっき課長も言っていただろ。俺達は別に地球の反対側に行く訳じゃ無いんだ。車でだって、飛ばせば十時間位で行ける距離なんだ。それにきっと離ればなれでいる時間だって、きっとそんなに長く無い。それに結果を出せた暁には・・・」

そこまで言って潤一は言葉に詰まった。言いたい事は決まっている。言う事だって簡単なはずだった。けれど二人が出会い、愛を育んだ日

々が短すぎただけに、きっとその言葉は軽いモノでしか無かった。
「ごめん、今はまだ何も言えないけれど、これだけは聞いて欲しいんだ。俺がお前を信じる様に、お前も俺を信じて欲しい。例えどんなに遠くに居ても、例えどんなに淋しい想いをしても、俺を信じていて欲しいんだ」

幸子は潤一のその気持ちだけが頼りだった。

「はい。私、信じます。私、岸崎さんの事を絶対に信じます」

幸子を乗せた飛行機が雲の中に隠れて見えなく成ると、潤一は堪えていたモノが溢れて来た。離れたくない気持ちは幸子と同じくらいあった。けれど自分がやらなければいけない事が残っていた。バジジョ氏、斉藤、そして恵美子、きっと今までの人生の中で出会えた人があるからこそ、今の自分がここにあった。だからこそ自分の人生の答えを出す為に一人横浜に残った。そしてその答えを出した暁には結婚しよう。潤一は雲の中に消えていった幸子に言った。

一月からは第一課も新しい体制に変わった。内勤の女性は大阪から来た、陽気な二十五歳の女性で、そして課長の席には、東京本社から来た、三十二歳のエリートの男が座った。けれどそれは何処でもそうであった様に、今までの斉藤とは違い、型にはまった事しか言えない男だった。最初はみんなも斉藤や幸子の方が良かったと言っていたが、月日が経つに連れて、それも慣れ、やがてはその中に溶け込んでいった。けれど潤一だけは昔の様に心を閉ざし、自分の目標だけに専念した。そんな潤一にとって心の支えは、やはり幸子からの電話だった。

幸子も初めのうちは、元気が無かった様だったけれど、田舎の生活に慣れて来たのだろうか。一ヶ月位経つと、冗談も言える様に成った。そして潤一は約束した様に、イタリアフェスティバルの企画内容は幸子と相談しながら一つ一つ決めた。その事で一緒にと言う約束が果たせるのかは分からなかったが、潤一の中でも幸子の中でも気持ちは一つに成っていた。そして着々に準備は進んで行く。スタッフは結局潤一の描いた通りには成らなかったが、もはや潤一にはそんな事はどうでもいい事だった。とにかく大切な事は、企画内容が自分の描いたモノに成るかで、それさえ決める事が出来れば問題は無かった。そしてそんな日々も三月に入る頃には先が見えて来た。

イタリアフェスティバルの開催日もゴールデンウィークに決まり、会場も東京ビックサイトに決まった。けれど逆に先が見えて来れば、やる事も同時に増えて来た。

潤一は毎晩夜遅くまで仕事に追われる、そして土日の休みすら確保

が出来ない日々になった。そう成って来ると、幸子との唯一の安らぎの電話の回数も必然的に少なくなる。初めは週三回あった電話も、やがて一回に成り、そして最終的には二週間に一回位に成った。そう成って初めて二人の距離の長さが長く感じた。潤一は会いたく成ったら会えばいい、何て言っときながら、実際は休みすら取れない状態で、会う所か電話もままならない悔しさがあった。そんな潤一にとってその八百キロと言う長さは、とても長くて遠いモノだった。けれどその長さをもっと感じていたのは、幸子の方だった。

幸子は田舎に戻ってから、今まで出来なかった家のリンゴ園の手伝いをしていた。両親は事情はどうであれ、一人娘が戻って来て、そして家族三人でリンゴ園の仕事をする事に喜びを感じている様だった。母親が言うには、父は幸子に戻ってから、人が変わった様に毎日楽しそうに成ったとの事だった。勿論幸子としても、そんな両親の嬉しそうな顔を見ると、同じ様に嬉しい気持ちが湧いてくる。けれどその反面、これからの事を考えると気が重くなった。実際幸子が一度家に戻ると決断した理由はこうだった。

幸子の中では、親孝行したい気持ちがあった。だからとりあえずこの機会に一度家に戻って、出来るだけの事をしてあげようと思っていた。けれどそれは親が望む様な、家を継ぐと言うモノじゃ無くて、ある時までと言う期間限定のモノだった。だからこそ、やっと幸子に戻って来たと喜ぶ親の顔を見れば見るほど辛く成るものだった。そんな中、幸子にとっても潤一との電話が唯一の支えだった。

潤一と話をしている時だけ、あの頃に戻れた。そしてその時だけ将来の不安も無くなった。きっと何とかなる。きっと信じてさえいれば。けれどその電話を切った後は、すぐに現実がやって来た。果たして親が分かってくれるのだろうか？ もし自分がこのリンゴ園を継がない事に成ったとしたら、一体このリンゴ園はどうなってしまふのだろうか？ それは絶対に潤一に言えない悩みだった。そしてそれは当然、嬉しそうにしている両親にも言えない悩みだった。

とにかく潤一に会いたかった。会って優しく包んで貰いたかった。ただそれだけで良かったのに、それすら今の二人には叶わぬ夢だった。八百キロと言う距離は。そんな二人を淋しい思いさせるには十分過ぎる距離だった。

イタリアフェスティバルも四月に入ると本格的に成った。イタリアの各業者から着々と品物が送られて来るし、潤一は何度も会場を下見に行って、それらの品物の配置を検討した。企業向けPRは宣伝部と合同で行い、各リストにそってそれを配布した。準備は万全だった。

後は目玉のバッジヨ氏の手作り家具が、開催に間に合うかどうか勝負だった。

バッジヨ氏とは一月に入ってからすぐに連絡を取った。バッジヨ氏もその連絡を待ってましたと言わんばかりに、すぐにOKの返事が返ってきた。そしてその時、潤一はバッジヨ氏と色々な話を交わした。暮れはバッジヨ氏のお陰で問題なく納品出来た事や、この企画もバッジヨ氏の名前が効果的だった事などを、お互いカタコトのイタリア語と英語とで話をした。けれど一つだけ言えなかった事があった。それはバッジヨ氏の「ところで、Missサチコは元気なのか？」という問いだった。潤一は言うべきか言わないべきか考えた結果、結局言わない事にした。正確に言うと言わないと言うよりも、言えなかったの方が正しいだろう。だから潤一は「ええ、勿論元気ですよ」と言った。そしてそれから何度かの打ち合わせで、バッジヨ氏と電話のやり取りをしたけれど、結局最後まで言えないままに四月を迎えた。

四月も中盤に差し掛かる頃には、最終的段階に入り始める。もう開催まで時間も無かった。全てのスタッフはそれぞれの役割をこなし、まとめに入り始める。そして潤一も、殆ど徹夜で仕事をこなし、もう潤一には愛を語る時間も残されてはいない位、忙しい日々だった。勿論幸子の事はいつも頭の中にあった。だからこそこの企画を成功させなければ成らないと思った。

バッジヨ氏の家具も、納期の確認が取れ、そして開催に合わせて、バッジヨ氏の来日も決まった。

潤一は幸子に、是非当日は会場に来て欲しいと言うと、幸子は喜んで行くと言った。答えは見えた。そしてその先に繋がるモノも感じる事が出来た。後は当日成功させて、結果を出すだけだった。けれど開催を二日後に控えた、四月二十六日。最後の最後に二人に大きな出来事が起こった。

その日幸子はいつもの様に、家族三人でリンゴ園の方に出ていた。この時期は本来ならまだ余り忙しい時期では無かったが、幸子が帰ってきたからだろうか、父親はリュウマチがあるにも関わらず、その頑張りぶりは日毎に増していった。けれどそれが悪かったのだろうか、その日リンゴの木の台風対策用フェンスを補修していた父が急に倒れた。父は苦しい表情の中で、心配そうに見守る幸子に、必死に大丈夫、大丈夫と言っていたが、病院での診察の結果は、決していいものじゃ無かった。とりあえず入院をして様子を見ると言う事に成ったが、担当医の話では、まずリンゴ園の仕事をするのはもう無理だと言う事だった。それをまだ知らない父は、もうすぐリンゴ園に綺麗な花が咲くぞ、何とかそれまでに退院して、一緒にそれを見ような、と幸子に言

う。幸子としてはそんな父を残してこの場所は離れられなかった。幸子は潤一に余り心配掛けたく無かったので「父がちょっと入院する事に成ったんです。ホントそんな心配する程の事じゃ無いんですけど、色々世話をしないといけないので、当日会場の方には行けなく成ってしまったのですが。絶対に成功させくださいね」と大事な部分を抜かして言った。

潤一はとても残念そうにしていたけれど、電話を切った後の幸子は絶望に近かった。それは当日会場に行けないと言う事と同時に、もう潤一の元には戻れないと言う事でもあった。

父がリンゴ園の仕事が出来なく成ると言う事は、男手が居ない神崎家では致命傷に成る。少なくとも今この状況で自分が抜けたら、もうこのリンゴ園はやっていけない事は目に見えていた。父と母が必死でやって来たこのリンゴ園。もし仮にこの先潤一から誘いがあったとしても、そんな二人を置いて幸子は潤一の元には行けそうも無かった。そう考えるとそこには絶望しか見つけられない。けれど今はまだそれを口にしてはいけなかったし、心に出してもいけなかった。今はただ潤一の成功だけを祈る事が、今まで幸せをくれた潤一に対しての幸子の純粋な気持ちだった。

そして幸子が居ないまま本番当日がやって来た。

イタリアフェスティバルが開催された三日間は誰もが想像していた以上に実のあるものに成った。

収益面の来場者人数、契約件数は共に、目標値をクリアーしたし、この不景気の中のイベントと言う事もあり、各マスコミもこのイベントを取り上げた事により宣伝効果も出来た。中でもミラノブースで行われたファッションショーや、フォルナセッティの創設者バッジョ氏の高級家具は、世界のマスメディアや関係者までもが感心する程の注目度を集めた。勿論その陰には潤一らスタッフの根回し等があったからこそ実現された事だったが、アートインターナショナルの株はこれを機に上昇した。結局終わってみれば、大きな問題も無く、誰もが満足いくモノに成った。本部もこの企画の指揮をとった潤一を高く評価した。しかし潤一にとってはその目に見える結果より、この企画が自分にとってどうだったかが、重要だった。けれど元課長の斉藤も居なく、そして幸子も居ないこのフェスティバルはただの通過点にしか感じる事が出来なかった。

潤一は一人でイベントの終わった会場を、二階に位置するスタッフルームから見下ろしていた。一つ一つ取り壊されていく会場。とりあえず終わった。それが率直な気持ちだった。斉藤、そして幸子が居なくなっただけからの四ヶ月間は、今までに体験した事の無いモノだった。

とにかく誰かの気持ちを背負い歩いた四ヶ月間。それは決して楽しかった事だけじゃ無かったが、充実したモノだった。そしてそれは今目の前で壊されていく会場の様に、自分の中で終わりを告げた。これから自分は一体何をして行けばいいのだろう。答えは分かって居るのに、それはいまいちピンと来ない。それは歩いて行く方向は分かって居るのに、歩き方が分からないと言う感じだった。潤一はそんな複雑な気持ちで会場を見ていた。そしてその時、後ろから一人の男が声を掛けた。潤一が振り向くとそこに立って居たのはバジジョ氏だった。

「とりあえず、おめでとう。とてもいいフェアだったよ」

バジジョは満足げに言った。

「ありがとう・・・」

けれど潤一の声にはいまいち響きが無い。

「どうかしたのか？」

バジジョもそんな潤一の元気の無さに疑問を感じた。潤一はなんだかバジジョ氏を見た途端に、ホッと出来たのか、今まで張りつめていたモノが一気にほどけた。そして潤一は自分のまず黙っていた幸子の事を謝り、そして自分の抱えていたモノを話し始めた。永遠に続きそうな潤一のその悩み、バジジョはただだまって聞いていた。それは人生経験の長いバジジョにとっては、痛いほど良く分かる悩みだった。そして潤一の話をして聞き終わるとバジジョは潤一に言った。

「まあ、ワシが言ってあげられる事なんて大した事は無いが、今回の事で一つ分かった事があるんだ。なあジュン、きっと人生なんてそんなに難しい事じゃなくて、もっと単純なんじゃないかな」

「単純・・・」

「そう、単純だよ。なあジュン、まだここだけの話だが、ワシはフォルナセッティを引退して、また初めからやり直そうかと思っているんだ。七十年間掛けて築き上げたから、なかなか踏ん切りが付かなかったが、辞めると決めたら何だかとても簡単なことだったよ。だから君も、そう肩肘張らないで、もっと自分の思うままに生きてみたらどうかな？」

「思うままですか？」

「そうだよ。思うままだよ。君が教えてくれたんだぞ」

バジジョのその言葉は、とても潤一にとって勇気づけられる言葉だった。単純、思うまま、潤一は思わず笑ってしまった。だってそれは、本当に笑ってしまうほど簡単な事だったのだから。

早速その日に潤一は幸子の家に電話を掛けた。そして幸子に会いたい、そして会って話したい事があると伝えた。幸子も気持ちは一緒だった。けれど今は親を置いて横浜に行く事が出来ないと言う事と、

潤一も色々後処理が残っていると言う事で、二週間後の土曜日に潤一が青森に行くと言う約束の元で電話を切った。

幸子は電話を切った後、複雑な気持ちでいっぱいだった。潤一が言っていた、会って話したい事があるんだ、と言うセリフ。何となくその意味は分かった。ちょっと前までは待ち遠しかったそのセリフも、それに応えられない今は、とても悲しいセリフに成った。けれど悲しんでいる訳にはいかない。大好きな潤一だから、そして大切な潤一だから、最後は自分がしっかりしなくてはいけない。幸子は電話ではきっと上手く言える自信が無かったので、一枚の手紙に全てを託す事にした。そしてその手紙が潤一に元に届いたのは会う約束の丁度一週間前だった。

その日潤一は仕事から帰って来て、ポストに入っていた一枚の手紙を読んだ。その内容はこうだった。

拝啓、岸崎様。急にこんな手紙を受け取って、少々驚いている事だと思いますが、これから書く事を分かってください。この前、父が倒れた事は報告しましたが、その時言えなかった事がありました。それは、父の様態は決していいモノじゃないと言う事なんです。お医者様の話では、もう働く事は出来ないだろうと言う事なのです。私の実家がリンゴ園をしている事は前に言った事がありましたよね。今までリンゴ園は父と母とでやって来ました。だから父が出来なくなると、母だけではリンゴ園をやって行くのは無理なんです。私は実家に戻った時は、またいつかまた横浜に戻って、そして岸崎さんと一緒に同じ夢を追いかけていたいなと思っていましたが、それも叶わない夢に成りました。だけど分かって下さい。農家に生まれた一人娘は、リンゴ園を潰す訳にはいかないのです。もう岸崎さんの元には戻れないですけど、これだけは分かって下さい。私は短い間だったですけど、岸崎さんと会えて本当に幸せでした。楽しい思い出もいっぱい、いっぱい、作れました。岸崎さんは覚えていますか？ 私に、お前は素晴らしい能力があると言ってくれたこと。私はその時初めて自分にも人と違ったものがあるのかなと思いました。それまでの人生はどちらかと言うと、いつもいつも私はダメな人間じゃないかって思っていました。こんな私でも頑張れば誰かの力に成れるんだなと思いました。そして初めて二人で夜を過ごした時、岸崎さんととても苦しそうに、何かと戦っていましたね。私はただ手を握ってあげることしか出来なくて、でも朝起きた時、ありがとう君のお陰で乗り越えられたよ、と言われた時、初めて誰かの力に成れたんだなと思いました。本当だったらずっとそばに居て、いつまでも岸崎さんの力に成ってあげたかったです。でもそれも今は叶わない夢に成りました。だから私は岸崎さんから貰った、

全てを大切にします。本当にこんなわがままな私を許して下さい。
追伸、岸崎さんにこれから素敵な出会いがあって、そして私がしてあげられなかった事を、出来る女性が現れることを、心から願っています。さようなら。本当に色々ありがとうございました。

その幸子から届いた手紙は、悩んだ末に出した幸子の切ない程の結論だった。潤一は手紙を読み終えた後、バルコニーに出た。遠くに見えるマンションには、確かに今はもう幸子は居なかった。けれど空に見える月は今自分の上にある様に、幸子の上にも確かにあった。そして少し広めのバルコニーにある、鉢植えには二本のカーネーションがもっともっと高く、そしてもっともっと大きく成ろうとしていた。白いカーネーション、花言葉は私の愛は生きている。潤一はそのカーネーションの手をかざした。そしてそこには幸子に対しての確かな愛があった。

潤一は久しぶりに地元の、千葉の大網に戻った。町は駅前こそ変わり果てたが、実家の周りにはそれ程大きな変化はあまり無かった。けれど潤一は実家には寄らず、目の前を通り過ぎると、そのままある場所に向かった。

昔良く通った森、そして初めて女の子と手を繋いだその道は、とても懐かしいモノだった。潤一はその森を通り抜けて、少し広い場所に出た。二人だけに秘密の花園、そこは恵美子と過ごした全てがあった。潤一はその場所に辿り着くと、恵美子と最後に抱き合っ居た場所に腰を下ろした。そしてその場所に座って、周りを見渡して見た。

あの頃はこの場所が世界の全てだった。反対側に見える木々は世界の端っこで、そこから見える小さなそらは天井だった。この場所以外知る事の無かったあの頃の潤一にとって、ここは最後の砦だったが、大人に成ってその場所を見ると、そこは出発の場所に感じた。潤一は目を瞑り、そして今亡き恵美子の事を考えた。

なあ恵美子。俺達はあの時、必死に一体何を求めていたのだろうか？そして何を手に入れる事が出来たのだろうか？そして春の零れ日は、そんな潤一を優しく包む。潤一は確かにその中で恵美子の声を聞く事が出来た。

潤一はフッと微笑み、やっぱりそうだよな、と言った。そして手に持っていた鉢植えから一輪のカーネーションを取り出し、その場所に埋めた。あの時全てはここで終わったけれど、今はここが始まりだった。潤一は最後にもう一度だけ振り返ってみた。そこには永遠に変わる事の無い恵美子が、楽しそうに座って潤一を応援していた。潤一はそんな恵美子にありがとう、と言ってその場を後にした。

最後の日は呆気ないモノだった。始めこそ第一課の中ではどよめきがあったけれど、その後は機械的に事は進んで行った。企業なんて言うものはいつだってそんなモノなのだ。確かに三年間と言う短い期間だったけれど、潤一だってそれなりに犠牲にしてきたモノや、尽くしてきたモノもあったはず、けれどそれは今となれば何一つ意味の無いモノに変わっていた。そして本当の本当に最後の時に、あの例のFAX事件の真相が明らかに成った。

空港まで唯一見送りに来てくれた彩子が、動かぬ証拠を突き止めたらしかった。

彩子とは幸子が居なくなって、何度か食事を共にした事があった。勿論友達として。その度に彩子は幸子に起こったFAX事件の事を気に掛けていてくれた。その事自体は潤一にとって凄く有り難い事だったけれど、もう会社を辞めてしまった幸子、そして傷ついてしまった幸子は、もう元には戻れない事を知っていたので、その事は余り深く考えていなかった。それよりもこの先の事が潤一にとって大切な事だった。けれどそれは最後に判明したらしい、FAXを送ったのは案の定、香織の仕業だった。そしてその情報を提供したのは、潤一がイタリアに行った後、すぐに愛人関係に成った部長の佐々木だと言う事だった。何故それが分かったのかは、香織に焦点を絞っていた彩子が、そのリストの入ったフロッピーをやっと見つけたわって詰め寄ったらしい。勿論それはでまかせのフロッピーだったのだけど、そして香織が開き直って全て吐いたのが、その内容だった。

けれど実はそれは嘘なんだ。きっと彩子が最後ぐらい潤一にスッキリした気持ちで終わって欲しいと言う、彩子の優しさだった。彩子が嘘を付く時の癖を知っていた潤一にはすぐに分かった。けれど潤一は本当にありがとう。これでスッキリ出来るよ、と言って彩子にお礼を言った。

彩子は最後に、ちゃんと幸せになんなきゃ、こんないい女振った意味が無くなるよ。だから頑張ってるね。じゃあ元気でね、と言った。そして潤一もそんな彩子に、お前こそいい女なんだから、絶対に幸せに成れよ、と言って別れた。そして潤一はいよいよ全てを捨てて飛行機に乗った。

長かった三年間、今思えば、スカしていたと思っていたのは自分だけだったのかもしれない。だってそこには色々なモノがあり、色々な出会いがあったのだから・・・。

その日幸子は複雑な気持ちだった。今日は潤一と約束をした土曜日。けれど例の手紙を送ってから一度も連絡を取っていないかった。まさ

か自分からあんな手紙を送って置きながら、電話を掛ける訳にもいかず、気が付いた時には約束の土曜日に成っていた。

けれど潤一からの連絡も無いと言う事は、これで全て終わった事なのかもしれないと幸子は思った。本当だったら、最後にもう一度会いたい気持ちはあったけれど、逆に会えば辛くなる事も分かっていた。今と成れば会えなくて淋しいと思っていたこの五ヶ月間は、自分の悲しみを半減させてくれるモノに変わっていた。けれどそう思っているのに、悲しみはどんどん、どんどん溢れてくる。幸子はそんな悲しみを親に見せたく無かったので、ちょっと出かけて来るね、と言って、リンゴ園に行った。

リンゴの花がいっぱい咲いているリンゴ畑。そこで幸子はおもいきり泣いた。幸子は小さい女の子の様に声を出して泣いた。もういいんだよね。もう肩肘張らなくてもいいんだよね。自分で自分にそう言い聞かせた。だってもう全ては終わったはずなのだから……。

その頃潤一は手紙に書いてあった住所を頼りに、幸子の家を目指していた。確か最後の人に聞いた通りならば、この道を曲がって真っ直ぐ行けば、幸子が待つ実家があるはずだった。

潤一は周りを見渡してみた。のどかな田舎道、そして足下に流れる小川と目の前に広がるリンゴ畑、この場所で幸子が育ったんだ。そう思うと、その今居る場所がとてもいい場所に感じられる。もう少しだ、もう少し歩けばきっと辿り着ける。潤一はその道を人生と同じ気持ちで一步、一步、自分の気持ちを確かめながら歩く。そしてもう少しで幸子の実家だと言う所で、一瞬誰かの泣き声が聞こえた気がして立ち止まった。けれど耳を澄ましてみても、その声は聞こえなかった。なんだ気のせいかと思い、潤一はまた歩き出そうとした。けれどその時今度はハッキリと聞こえた。それは間違い無い、幸子の泣き声だった。

潤一はその声のする方に歩きだす、リンゴ畑は外から見ていたよりも、中は広くて複雑なつくりをしていた。潤一はその声だけを頼りに歩いた。けれどその声は左から聞こえてくる様にも聞こえれば、右から聞こえて来る様にも聞こえた。そして複雑なつくりのそのリンゴ畑は、そんな潤一を更に惑わせた。潤一はとりあえず歩くの止めて、その場に立ち尽くして目を閉じた。その時頭の中にバジヨ氏のあの言葉がフッと湧いた。それは「なあジュン、きっと人生なんてそんな複雑じゃなくて、もっと単純なんじゃないのかな」と言う言葉だった。

潤一はその場で少し肩の荷を降ろし、力を抜いた。そうなんだ人生なんてもっと単純なんだ。思うままに動けるものなんだ。

潤一は今度は自分の心に素直に歩き出した。そうしたら不思議な事に、声は一定の方向に定まり、その複雑だと思っていた道も一本道の

様に感じられた。そして潤一はその道をゆっくり、焦らずに一步、一步、前に進んだ。そして気が付くと少し開けた場所に出た。その場所はまるであの秘密の花園の様に、特別の場所に感じられる。そしてその先には、地面にへばり込んで泣いている幸子が居た。潤一は気付かれない様にそばに行って、そしてそっと幸子の手を握りささやいた。「なあ、この手は君をずっと幸せにする手だから、この手の感触をしっかり覚えていて欲しいんだ。そして絶対にどんな事があっても離さない欲しいんだ」

幸子は急に現れた潤一に驚いが、すぐに頷いて抱き寄った。

「なあ、本当に分かったのか？ この手は今はまだ軟弱だけど、そのうちゴツゴツした手に成っちゃうよ。だってこのリンゴ園も守っていかなくちゃなんないんだからな」

けれど今の幸子にはどんな言葉よりも潤一の存在だけが全ての様にしっかりと抱きつく、そして潤一はその勢いに押されてその場に倒れ込んだ。久々に感じた幸子の温もり、潤一は幸子に会って話したい気の利いたセリフを山ほど考えていたけれど、それは今はどうでも良くなった。だって人生はそんなに難しい事じゃ無くて、ずっと簡単なんだから。だから潤一はその気の利いたロマンティックな言葉を全て止めて、たった一言だけ言った。

「愛しているよ」

そして幸子も「私も愛してます」と言った。

そして二人はその場で強く抱き合った。もう何も要らない、今度こそ本当にそう思った。何故ならそこには、確かなモノがあったのだから・・・。

そしてそんな二人をリンゴ畑に広がるリンゴの真っ白な花が、優しくいつまでも包み込んでいた。

追伸

その年の夏、バッジョは家の裏にある小さな倉庫で、フォルナセッティ社を引退して初めてのタンスを作っていた。そして最後の仕上げをしようとした時に、自分と呼ぶ声がした。

「ねえ、あなたへ贈り物が届いたわよ」

その声は彼の妻だった。

「おお、そうか。今ちょっと手が放せないから、こっちに持って来てくれないか」

そして妻が重そうに持ってきた郵便物は日本からのモノだった。バッジョはその送り主を見て、嬉しくなり、最後の仕上げを残してその郵便物を開けた。

中には真っ赤に熟したリンゴが甘い香りと共につまっていた。そしてそれに付随して添えてあったDearバッジョと書いてある手紙を取り出し、リンゴを囓りながらその手紙を読んだ。

そこには丁寧なイタリア語で、これは僕とサチコが初めて作ったリンゴです。是非食べて下さい。と言う書き出しで始まり、そして最後は、今度僕たち結婚する事に成りました。その際は是非出席していただきたいのですが、とあり、そしてMrバッジョ、あなたの言う通りでした。人生なんてそんなに難しいモノじゃなくて、とっても簡単な事なんです。fromジュンイチ&サチコ、と綴ってあった。

バッジョはその手紙を読み終えると、また最後の仕上げに取りかかった。そしてそのタンスにノミで、JUNICHI & SACHIKOと刻んで大きな声で言った。

「やっと完成だ！」

そして送られて来たリンゴをその上に一つ置いて、そのお互いの初めての作品の出来映えを、満足そうにいつまでも眺めていた。

~君はその幸せと言う小さな花を知っているかい？

僕は知っているよ その花は水も肥料もいらぬのさ ましてやお金や時間や名誉なんて言うのもね その花に必要なモノはそんなモノじゃないんだ その花に必要なモノはほんの少し勇気と愛があればきっと君にも咲く花なのさ

ねえ君はまだその花を知らないなら僕と一緒に探しに行こう

何もかもこのままここに置きざりにして・・・

この作品を読んできた全ての人に、僕は心から感謝いたします。本当にありがとうございました。 Kazuhiko.Saito